平 成 3 0 年 度

第24回 日教弘教育賞

教 育 研 究 集 録

研究主題

学校の実態を踏まえ
明日の教育を考える

第 24 回日教弘教育賞教育研究集録
発行に当たって

公益財団法人　日本教育公務員弘済会
理事長　　黒　田　文　男

学校は、教職員の世代交代が進んでおり、近い将来、継承されてきました学校文化が変化し新しい文化が生まれてくると予測します。

それに呼応するかのように、グローバル化、情報化などの急激な変化がおき、高度化、複雑化する諸課題への対応が求められています。

また、「生涯を通して成長する教員」であるべきとか、「主体的・対話的深い学び」が必要である、という時代の変化に左右されない命題も連綿と求められています。

教職員には、これまで以上に幅広い知識と柔軟な思考力に基づいた確かな教育力が必要になると思います。

さて、当会は、奨学金の貸与・給付、学校研修・研究への助成及び資質向上を目指す教職員への支援を行っております。

そのことは、「明日を担う子どもたちのための健全育成に資する」こと、事業の評価基準は「最終受益者は子どもたち」を理念として、21 世紀に生きる子どもたちの教育に寄与・貢献することを志してまいりました。

「日教弘教育賞」は本年度で 24 回目を迎えました。制定の主旨は、「教育愛に燃え、子どもたちの未来のためにひたすら努力している教職員の教育実践と研究意欲に対する奨励」を意図したものです。

研究主題については、「学校の実態を踏まえ、明日の教育を考える」という立場から、応募者が具体的な研究主題を決めて論文をまとめることとしています。

本年度も都道府県支部へ全国から多数の論文を応募いただきました。ご応募いただいた論文は、質、量ともに充実したものが多く、かかわられた教職員の皆様の旺盛な研究意欲に心より敬意と感謝を申し上げます。

その中から各支部推薦の教育論文（学校部門 65 編、個人部門 57 編の 122 編）を慎重に審査し、別掲の結果となりました。

審査にあたられた皆様とお力添えをいただいた関係者の皆様に心から敬意を表し、ご協力に感謝申し上げます。

本研究集録は、変化の激しいこれからの社会を子どもたちがたくましく生き抜いていくために学校、家庭、地域が連携・協力した教育実践集となっています。

本研究集録が各学校等での研修・実践に広く活用され、今後の教育の着実な発展に寄与できれば幸いです。

未来を切り拓く力の育成

選考委員　文部科学省初等中等教育局
主任視学官　清　原　洋　一

このたび、日本教育公務員弘済会主催の日教弘教育賞の各賞を受賞された皆様、誠におめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

現代社会は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっています。また、急激な少子高齢化が進む中で成熟社会を迎えた我が国にあっては、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待されています。このような時代にあって、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められています。

こうした状況を踏まえ、平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申に基づき学習指導要領等が順次改訂され、平成 31 年 2 月には特別支援学校高等部についても公示となり、全て出そろいました。新たに前文が設けられ、これからの学校には、教育基本法に示す目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の児童生徒が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること等が明記されています。そして、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていく「社会に開かれた教育課程」の重要性についても示しています。それを実現するため、全ての教科等の目標及び内容を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理し、これらの資質・能力を着実に身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるよう「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進しようというものです。さらに、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくカリキュラム・マネジメントについても示しています。

日教弘教育賞の入賞論文は、時代的背景等も踏まえつつ教育課題を的確に捉え、ねらいを明確にし、指導の改善や充実等に取り組んでいる実践的な研究でした。学校部門では、学校全体で地域とともに、授業改善を進め児童生徒の自己肯定感を高めていくといった論文が多く見られ、働き方改革に関するものもありました。個人部門では、各教科等における「主体的・対話的で深い学び」の視点からの指導改善やしなやかな心や体を育てようとする論文が多く見られました。いずれも教育の改善•充実の参考となるものでした。ただし、選考の評価については、自校の現状分析等を踏まえ明確な課題設定になっていること、実践に工夫が見られること、児童生徒の変容を適切に捉え評価・分析されていることなども充分考慮し選考しました。よりよい研究とするためにも、このような点を明確にしながら進めていただければと思います。そうした実践の積み重ねを通じて、子供たちは未来を切り拓く力が育成されていくことでしょう。

結びに、この日教弘教育賞がこれまで長きにわたり、学校教育の充実・発展に寄与してこられましたことに対し、関係の皆様に深く敬意を表しますとともに、本事業のますますのご発展を祈念いたします。

日教弘教育賞（平成 30 年度　第 24 回）
第一次選考を終えて

第一次選考委員長　群馬支部
支部長　　砂　川　次　郎

平成 30 年度第 24 回日教弘教育賞を受賞された皆様、誠におめでとうございます。

今年度、各都道府県支部への教育実践研究論文の応募は 2511 編でした。各都道府県から日教弘教育賞に 122 編が推薦され、応募いただきました。

（応募状況内訳）応募総数 122 編

○学校部門 65 編：小学校 35 編　中学校 24 編　高等学校 5 編　養護学校 1 編

○個人部門 57 編：小学校 32 編　中学校 13 編　高等学校 8 編　特別支援学校 2 編
養護学校 1 編　中高一貫校 1 編

2018 年度から 2022 年度にかけて、教育要領や学習指導要領が改定されます。

学校で学んだことが、子供たちの「生きる力」となって、明日に、そしてその先の人生につながってほしいという思いが改定に込められています。

新しい教科等として、小学校では、外国語活動・外国語、小・中学校では、特別な教科道徳、高等学校では、総合的な探究の時間・理数探求などがあげられます。

子どもたちの「生きる力」を育み、これからの社会が、どんなに変化して予測困難な時代になっても、子供たちが主体的に関わり、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」という観点から、児童生徒にどのような資質・能力を育んでいくことが求められています。

このため、各学校においては、校内研修等で取り組んでいると思います。

今年度応募された教育実践研究論文には、アクティブラーニング、協働、地域との連携、探求型学習、カリキュラムマネジメント、外国語教育、道徳の実践など今日的課題の解決を意図した教育実践研究論文が多数応募されていました。学校現場では、学習指導要領の改訂に向けた取り組みや子どもたちにより良い学びができるよう日々努力している様子が伺えます。

各支部から推薦された教育実践研究論文は、どれも素晴らしい論文でした。

開かれた教育課程、学力向上、学びあい活動、授業改善など学校がかかえる課題解決に向けての取り組みでした。

第一次選考員会では、学校部門 10 編、個人部門 10 編を日教弘教育賞選考委員会へ推薦いたしました。

日教弘教育賞の教育実践研究論文に応募する場合、募集要項に沿って論文を作成してください。図表、写真等は資料として活用して、“論文様式、字数、行数、段組、ページ数”を守って作成してください。また、過去に類似した論文、他団体に応募した論文等の応募については、各支部でご配意ください。

「第 24 回日教弘教育賞　研究集録　第 30 集」に記載された教育実践論文は、どれも児童生徒の学力向上や子供たちの資質・能力の向上等に参考になる素晴らしい内容となっています。この教育研究集録に記載された論文の成果を多くの学校において自校の実践の“道しるべ”として活用していただけることを願っています。

第 24 回日教弘教育賞　選考委員

（順不同－敬称略）

≪選考委員≫

文部科学省初等中等教育局　主任視学官	清原　洋一
日本大学文理学部教育学科教授	佐藤　晴雄
前ぐんま国際アカデミー　中高等部校長	吉田シヅエ
日本教育新聞社　取締役 兼 編集局長	矢吹　正徳
公益財団法人日本教育公務員弘済会　常務理事	藤倉　新一

≪第一次選考委員≫

委員長	関東北ブロック	砂川　次郎（群　馬）
委　員	北海道・東北ブロック	海老名陽一（山　形）
委　員	関東南ブロック	安西　和彦（千　葉）
委　員	東海・北陸ブロック	中野　　仁（三　重）
委　員	近畿ブロック	若野　哲夫（滋　賀）
委　員	中国ブロック	山根　俊道（鳥　取）
委　員	四国ブロック	住友　裕二（徳　島）
委　員	九州ブロック	古城　真代（大　分）
委　員	本部	藤倉　新一

《目　　次》

◇あいさつ

公益財団法人 日本教育公務員弘済会　理事長　黒田　文男 …… 3

文部科学省初等中等教育局　主任視学官　清原　洋一 …… 4

第一次選考委員長　群馬支部　支部長　砂川　次郎 …… 5

◇「日教弘教育賞」受賞論文一覧…… 8

●『最優秀賞』 2 編

《学校部門》　北海道札幌市立二条小学校　校長　大牧　眞一 …… 18

大分県中津市立豊陽中学校　校長　山香　昭 …… 22

●『優秀賞』 6 編

《学校部門》　群馬県立吾妻中央高等学校　校長　鎌田　幸生 …… 26

愛媛県北宇和郡松野町立松野中学校　校長　平野　昌稔 …… 30

熊本県人吉市立西瀬小学校　校長　吉村　英亀 …… 34

《個人部門》　栃木県立黒羽高等学校　教諭　吉澤　尚樹 …… 38

埼玉県新座市立新座中学校　主幹教諭　中島　豊 …… 42

岡山県立岡山朝日高等学校　教諭　平田　丞二 …… 46

●『優良賞』 8 編

《学校部門》　山梨県立吉田高等学校　校長　髙保　裕樹 …… 50

広島県安芸高田市立美土里小学校　校長　冨岡美保子 …… 54

高知県高知市立秦小学校　校長　髙石　智恵 …… 58

《個人部門》　千葉県木更津市立波岡小学校　教諭　古舘　良純 …… 62

香川県三豊市立詫間中学校　教諭　丸岡　正則 …… 66

徳島県吉野川市立鴨島東中学校　指導教諭　着藤　文恵 …… 70

熊本県菊池市立菊之池小学校　養護教諭　吉川　恵美 …… 74

沖縄県那覇市立松川小学校　教諭　我那覇ゆり子 …… 78

平成 30 年度・第 24 回「日教弘教育賞」受賞論文一覧

◎学校部門

◆最優秀賞

【北海道】　チーム力を結集する学校マネジメント
～【共有】と【協働】を軸にした「働き方改革」～
北海道札幌市立二条小学校　校長　**大牧　眞一**

【大分県】　「公の場で通用する人」の育成を目指して
～「自分がする」「みんなとする」「ほめあう」活動をとおして～
大分県中津市立豊陽中学校　校長　**山香　昭**

◆優 秀 賞

【群馬県】　次代を担う農業土木スペシャリストの育成を目指して
～地域連携と最新技術の習得を通して～
群馬県立吾妻中央高等学校　校長　**鎌田　幸生**

【愛媛県】　ふるさとを愛し、夢や希望をもち、協働しながら成長する生徒の育成
～「株式会社松野中学校」の取組を通して～
愛媛県北宇和郡松野町立松野中学校　校長　**平野　昌稔**

【熊本県】　外国語に親しむ児童を育てる「主体的・対話的で深い学びの実現」を目指した指導法の研究
熊本県人吉市立西瀬小学校　校長　**吉村　英亀**

◆優 良 賞

【山梨県】　新たな教育目標の設定とカリキュラム・マネジメント
～教育活動全般を繋ぎ、生徒の資質・能力を高めるために～
山梨県立吉田高等学校　校長　**髙保　裕樹**

【広島県】　主体的に学び　表現する児童生徒の育成
～自分や集団の考えを発展させる「学び合い」の授業を通して～
広島県安芸高田市立美土里小学校　校長　**冨岡美保子**

【高知県】　輝け！秦っ子！！
～運動を取り入れた生活リズムに改善することにより、生きる力を身につける～
高知県高知市立秦小学校　校長　**髙石　智恵**

◆奨 励 賞

【北海道】　児童理解に基づく教育活動の充実に向けた学校教育の挑戦
～児童の実態から始まる教育活動の改善充実～
北海道野付郡別海町立中西別小学校　校長　**古森　康晴**

【青森県】　不登校や入院により登校して学習することが困難な生徒への学習の機会の確保
～ ICT 機器（iPad と Kubi）を活用した遠隔授業～
青森県立浪岡養護学校　校長　**奈良　親芳**

【青森県】　「対話的な学びの実現に向けた授業展開の工夫」
～わかった！できた！という実感を高めるために～
青森県南津軽郡藤崎町立藤崎小学校　校長　**田澤　正憲**

【秋田県】　「開かれた教育課程」のその先にあるもの
～地域に根ざしたキャリア教育から生まれた六次化まんじゅう「十文字物語」～
秋田県横手市立十文字第一小学校　校長　**赤川　太**

【秋田県】　地域の問題解決意欲を高めて目指す社会人の基礎を育む
～問題解決的な学習山内スタンダードと地域に根ざしたものづくり教育を通して～
秋田県横手市立山内小学校　校長　高橋　晋

【岩手県】　生徒が主体的に学ぶ先人学習
～全校演劇の取組を通して～
岩手県盛岡市立下橋中学校　校長　小野寺昭彦

【宮城県】　知識・技能を活用して主体的・対話的に問題を解決できる生徒の育成
～特別活動を生かした学力向上の一試み～
宮城県栗原市立築館中学校　校長　伊藤富久男

【山形県】　認め合い高め合う子どもの育成
山形県東根市立大富小学校　校長　奥山　衛

【山形県】　学びを広げ深める子どもをめざして
～探究型学習の授業づくりの取り組みを通して～
山形県鶴岡市立朝暘第一小学校　校長　小田　悟志

【福島県】　いきいきと輝く自分をつくる子どもの育成
～仲間と協働して高め合う　主体的・対話的で深い学び～
福島県会津若松市立鶴城小学校　校長　唐司　和彦

【群馬県】　家庭と学校とが力を合わせて取り組む児童の生活習慣改善と学力向上
～アウトメディア週間の実践を通して～
群馬県館林市立第五小学校　校長　青木わかば

【埼玉県】　3方向から撮影した授業記録ビデオを活用した校内研修の充実
～よい指導法の共有を目指して～
埼玉県入間郡越生町立越生小学校　校長　竹田　聡

【新潟県】　人の心のいたみが分かり、互いを思いやる子どもの育成について
～人権教育、同和教育の視点に立った授業実践と温かい人間関係づくりを通して～
新潟県新発田市立加治川小学校　校長　猪俣　伸

【新潟県】　生徒が活きる、生徒を活かす学校づくり
～生徒の主体的な活動を柱に据えた、学校経営の実践を通して～
新潟県胎内市立中条中学校　校長　野澤　一吉

【長野県】　自ら求めて、友とともに意欲的に学び合う生徒の育成
～生徒が探究する授業の創造を目指した「学びの共同体」10年の取り組み～
長野県中野市立中野平中学校　校長　有賀　泰司

【茨城県】　自己の生き方を見つめ、よりよく生きようとする児童の育成
～道徳科の授業における多様な指導方法の工夫を通して～
茨城県常総市立絹西小学校　校長　猪瀬　和男

【茨城県】　社会力を身に付け、未来を拓く児童生徒の育成
～道徳を要とした　つながりのある教育活動を通して～
茨城県つくば市立手代木中学校　校長　土田十司作

【神奈川県】　新学習指導要領実施に向けたカリキュラム・マネジメント
～「社会に開かれた教育課程」の実現を目指した学校づくり～
神奈川県横浜市立戸塚小学校　校長　鈴木　陽一

【神奈川県】　豊かな心を育む人間関係づくりを根底に置いた学校経営
～グループワークの実践を通した人間関係づくり～
神奈川県海老名市立海西中学校　校長　漆原　肇

【千葉県】　小中一貫教育を目指す小中兼務教員（中学校教員）による小学生への指導
～松戸市独自教科「言語活用科日本語分野」を切り口として～
千葉県松戸市立第五中学校　校長　高橋　政弘

【静岡県】　学校・地元企業・地元自治体と共に地域を担う人材を育成する
～地域に育ち、地域に育ててもらうキャリア教育～
静岡県立熱海高等学校　校長　杉山　禎

【富山県】　学校における働き方改革への挑戦
～『呉中８マン（クレチュウエイトマン）作戦』～
富山県富山市立呉羽中学校　校長　石川　弘明

【富山県】　カリキュラムマネジメントで学校をかえる
～牧中クロスカリキュラム『環境』への取組～
富山県高岡市立牧野中学校　校長　田中　広光

【石川県】　ESD の視点を取り入れたふるさと学習の推進と校長のリーダーシップ
～学校と地域の連携をファシリテート（協働を促進）する校長の役割～
石川県かほく市立大海小学校　校長　山本　洋

【福井県】　学校の教育力を向上させる研究・研修の推進
～校内研修の充実と授業改善で、子供たちが主体的に学ぶ子に～
福井県鯖江市吉川小学校　校長　三津谷雅美

【岐阜県】　自己を見つめ、他者とともによりよく生きようとする子の育成
～人間関係づくりを基盤とした取組を中心として～
岐阜県可児市立旭小学校　校長　吉岡　誠

【岐阜県】　仲間との学び合い活動を通して、一人一人に確かな学力を身に付ける教科指導
～分かる喜び、できる喜びを～
岐阜県関市立桜ヶ丘中学校　校長　森　茂夫

【愛知県】　自学自行（じがくじこう）
～自らの意思で学び考え、行動していく生徒の育成～
愛知県東海市立加木屋中学校　校長　片山　裕之

【愛知県】　自分の思いや考えを伝え合い、学び合う子の育成
愛知県安城市立三河安城小学校　校長　水野　勝通

【三重県】　学び直しの場－「ゆったりルーム」の挑戦
～すべての子が安定した居場所のある学校を目指して～
三重県津市立白塚小学校　校長　伊東　直人

【三重県】　「学力向上」を実現する効果的な算数科少人数指導の実践
～神田型少人数指導で「学力の二極化」を解消する～
三重県員弁郡東員町立神田小学校　校長　日置　幸嗣

【滋賀県】　質の高い「学び」を目指して
～子どもが学びに向かう課題設定と支援～
滋賀県大津市立仰木の里小学校　校長　合田　幹生

【滋賀県】　少人数のよさを最大限に生かす取組
〜生徒が自ら光り輝くために〜
滋賀県大津市立伊香立中学校　校長　**松代　弘**

【京都府】　キャリア教育の視点でつなぐ小中一貫教育の推進
〜「組織が動く」カリキュラム・マネジメントで実現する施設分離型小中一貫教育の 4 年間〜
京都府綾部市立吉美小学校　校長　**龜井　貴子**

【京都府】　本の好きな生徒を増やすために
〜生徒と保護者、そして地域の図書館と総掛かりの連携のもとに〜
京都府長岡京市立長岡中学校　校長　**外田　敏久**

【兵庫県】　「教師が変わる、子どもが変わる、学校・地域が変わる」
〜日本一人を大切にする学校の挑戦！〜
兵庫県淡路市立志筑小学校　校長　**山本　哲也**

【大阪府】　エネルギー教育の取り組み
〜「地球のために、私たちができること」〜
大阪府八尾市立曙川小学校　校長　**森本　徹**

【和歌山県】　極小規模校の特性を生かして学力の向上を目指す
〜一人ひとりを大切にした学力向上三本柱の取組を通して〜
和歌山県新宮市立熊野川中学校　校長　**吉田　元紀**

【鳥取県】　生徒の興味・関心、満足感を高めるための授業改善を行い、学力向上をめざす
〜主体的・対話的で深い学びの視点にたって〜
鳥取県八頭郡智頭町立智頭中学校　校長　**藤原　紀子**

【鳥取県】　なかまとかかわりながら　よりよく生きようとする東っ子の育成
〜学び合い　人間関係を深め　自分たちでつくる生活をめざして〜
鳥取県八頭郡八頭町立郡家東小学校　校長　**安住　順一**

【岡山県】　自尊感情を高め、地域に貢献する生徒を育てる教育活動
〜地域学校協働本部事業と社会貢献活動を通して〜
岡山県赤磐市立高陽中学校　校長　**平田　俊治**

【島根県】　「かかわり」をとおして、考えることを楽しむ授業づくり
〜学んだことを学習や生活に活かそうとする児童をめざして〜
島根県益田市立吉田小学校　校長　**領家　芳明**

【山口県】　地域と共に進めるライフキャリア教育
〜“カタリ場”から“厚狭人ダイアローグ”へ〜
山口県山陽小野田市立厚狭中学校　校長　**宇都宮直樹**

【山口県】　自分の在り方を思考する子どもの育成
〜協働的な学びを通して地域や社会をとらえる社会科・生活科学習〜
山口県岩国市立愛宕小学校　校長　**世良　泰章**

【香川県】　「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて
〜生活科と総合的な学習をつなぎ、家庭・地域との連携による地域創生の学習の実践から〜
香川県高松市立十河小学校　校長　**町川　哲**

【香川県】　家庭や地域と連携・協働した学校における働き方改革
〜「みんなで午後 7 時頃までに帰ろうプロジェクト」の推進〜
香川県木田郡三木町立田中小学校　校長　**小笠原　学**

【徳島県】　よりよい人間関係の中で人と人がつながり、自ら学ぶ豊かな子供の育成
～校訓「敬愛信」と学校力を基盤に自己肯定感を高めて～
徳島県徳島市方上小学校　校長　**町口美千代**

【愛媛県】　普通高校における特別支援教育の在り方
～特別な支援を必要とする生徒の進路保障を目指して～
愛媛県立津島高等学校　校長　**松本耕太郎**

【大分県】　発信する生徒会活動
～「茶園」からの新たな展開を通して～
大分県日田市立南部中学校　校長　**吉田　英喜**

【福岡県】　「性的マイノリティ」の人権に係る理解を深める学習指導の在り方
～中学校３か年の指導計画の立案と実施を通して～
福岡県柳川市立大和中学校　校長　**平河　　力**

【宮崎県】　今日が楽しく明日が待たれる学校の創造
～学校経営ビジョンの具現化を図る組織マネジメントを通して～
宮崎県日南市立油津中学校　校長　**野脇　浩文**

【熊本県】　地域や社会との関わりを深めることで、生徒・学校はどのように変容するのか
～社会の接点での学びの「本質」と「可能性」を見つめる～
熊本県山鹿市立鹿北中学校　校長　**郡　　一路**

【鹿児島県】　叙述と向き合い、論理的に読む力を高める指導
～全国学力・学習状況調査における国語Ｂ「読むこと」の学力向上を目指した取組～
鹿児島県出水市立西出水小学校　校長　**池田　俊彦**

【鹿児島県】　自他とのつながりを深め、児童が自ら道徳性を養う道徳教育の在り方
～考える道徳、議論する道徳科の授業の実践～
鹿児島県指宿市立大成小学校　校長　**島子　　修**

【佐賀県】　コミュニティ・スクールの推進による生徒のキャリア形成の一考察
～立腰（りつよう）教育を基盤とし、社会性を身に付けた生徒の育成を目指して～
佐賀県武雄市立山内中学校　校長　**井手　和憲**

【長崎県】　宇久高校魅力化推進のための取組
～探究活動「Uku　Labo」（H29 後半～ H30 前半）の取組～
長崎県立宇久高等学校　校長　**石山　雅晴**

【長崎県】　子どもたち一人一人を支え、見守る教育活動の充実をめざす
～特別ではない、特別支援教育の具体的な取組を通して～
長崎県大村市立大村小学校　校長　**丹野　平三**

◎個人部門

◆優 秀 賞

【栃木県】　生徒の苦手意識を克服するための指導の工夫
～チーム英語科としての対応～
栃木県立黒羽高等学校　教諭　**吉澤　尚樹**

【埼玉県】　主体的・対話的に深く学ぶ「書くこと」の授業
～思わず書きたくなる課題設定と協働的な授業展開～
埼玉県新座市立新座中学校　主幹教諭　**中島　豊**

【岡山県】　作文での対話を通した“知的越境”の試み
～高等学校３年国語科における評論文教材を用いた研究実践とその考察～
岡山県立岡山朝日高等学校　教諭　**平田　丞二**

◆優 良 賞

【千葉県】　考え、議論する道徳授業の在り方
～自分らしさを発揮し合う、対話・話し合い活動を通して～
千葉県木更津市立波岡小学校　教諭　**古舘　良純**

【香川県】　身近な生活と社会をつなぎ多面的・多角的に思考できる生徒を育成する技術・家庭科教育
～『電気エネルギー変換に関する技術』の授業づくりと評価の工夫～
香川県三豊市立詫間中学校　教諭　**丸岡　正則**

【徳島県】　新学習指導要領への移行期における英語授業改善
～「やり取り」・「即興性」を意識した言語活動～
徳島県吉野川市立鴨島東中学校　指導教諭　**着藤　文恵**

【熊本県】　けがをしにくいしなやかな体と心づくりをめざして
～地域教育力を活かしたメンタル・体幹を鍛える「元気アッププロジェクト」を通して～
熊本県菊池市立菊之池小学校　養護教諭　**吉川　恵美**

【沖縄県】　多様な意見を尊重し、合意形成を図る力の育成
～意見を可視化し、折り合いの付け方を考える話合い活動を通して～
沖縄県那覇市立松川小学校　教諭　**我那覇ゆり子**

◆奨 励 賞

【北海道】　“柔軟性”を育む理科学習
～地学領域「土地のつくりと変化」の学習を通して～
北海道教育大学附属札幌小学校　教諭　**鐙　孝裕**

【秋田県】　道徳的価値の理解をもとに、人間としての生き方について考えを深める道徳授業
～「比較する対話」を中心に据えてねらいに迫る～
秋田県秋田市立将軍野中学校　教諭　**伊藤　香**

【岩手県】　自分の課題に意欲的に取り組む子どもの育成をめざして
～インクルーシブ教育を支えるＬＤ等通級指導教室から一人一人の思いに寄りそいながら～
岩手県一関市立山目小学校　教諭　**皆川　淳子**

【宮城県】　「関数の考え」を育てる指導の一試み
～第１学年「あわせていくつ　ふえるといくつ」の指導の工夫を通して～
宮城県宮城教育大学附属小学校　教諭　**三井　雅視**

【宮城県】　新学習指導要領全面実施に向けたカリキュラム・マネジメントの実践
～学校経営参画意識と同僚性の向上を目指して～
宮城県名取市立那智が丘小学校　校長　**小木曽　清**

【山形県】　挑戦的な授業改善を促進する教科経営マネジメントの研究
～課題探究型学習とプロジェクトアドベンチャーの理論を生かして～
山形県飽海郡遊佐町立遊佐中学校　教諭　**信夫　智彰**

【福島県】　英語での表現に関心を持ち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成
～英語表現科の授業における、実践的コミュニケーション能力の基礎を養う授業づくりを通して～
福島県郡山市立行健小学校　教諭　**中野　幸恵**

【栃木県】　「割合」の真の理解につながる思考ツールの開発と活用
～もとにする量を「１」とみることのイメージ化を通して～
栃木県日光市立大沢小学校　教諭　**石川　創未**

【埼玉県】　教室清掃で「キャリア」をみがく
～「言われて動く」活動から「理解して動く」活動への転換～
埼玉県立所沢おおぞら特別支援学校　教諭　**藤村　良男**

【新潟県】　言語障害通級指導教室におけるマルチメディアデイジー教科書を用いた音読指導
～読み飛ばしや読み誤りの多い児童２名への指導を通して～
新潟県村上市立村上小学校　教諭　**八藤後和男**

【長野県】　実生活に生きる国語力の育成
～「書く」力をつける授業づくり～
長野県飯山市立城北中学校　教諭　**関口　祐子**

【長野県】　理科問題解決学習での個人実験における協働的な学び
～小学校理科第３学年単元「風とゴムのはたらき」の授業実践より～
長野県長野市立南部小学校　教諭　**林　康成**

【茨城県】　文章と画像の互換性
～論理展開図を通して～
茨城県立水戸桜ノ牧高等学校　教諭　**福地　千文**

【東京都】　医師になる志を高める教育プログラムの開発と成果について
～キャリア教育、探究学習、社会人基礎力、学習支援の組み合わせ効果の検証～
東京都立戸山高等学校　非常勤教員　**押尾　勲**

【東京都】　授業改善を推進できる教師の育成
～港区教育研究会小学校体育研究部におけるチャレンジ～
東京都港区立笄小学校　校長　**石井　卓之**

【神奈川県】　UD の視点に基づく環境整備の効果
～児童の安心感に関わる効果的な環境整備～
神奈川県横浜市立都田西小学校　教諭　**目黒　準弥**
教諭　**手島　麻美**

【山梨県】　授業を通じた自己肯定感育成の方法及び実践
～「わかる、楽しい」が自己肯定感につながるまでを可視化する一枚ポートフォリオ評価論の活用～
山梨県甲府市立甲府商業高等学校　教頭　**谷戸　聡子**

【静岡県】　「投動作の日常化」によって投力を向上させる指導
～ボールがなくてもスローアップ～
静岡県浜松市立与進小学校　教諭　**芹澤　一史**

【静岡県】　『未来を生きる』ための主体性・社会性を育む　カリキュラム・マネジメント
～私たちが考える未来の車を車のプロにプレゼンしよう～
静岡県藤枝市立瀬戸谷小学校　教諭　**栗原　敏史**

【富山県】　安心・安全な学校生活の保障
～食物アレルギー対応委員会の試み～
富山県高岡市立伏木小学校　教諭　**森　仁美**

【石川県】　時代を見つめ、思いを深め表現する英語科での即興対話の取り組み
～ News Topic Chat の取り組み～
石川県白山市立北星中学校　教諭　**木村　祐太**

【福井県】　探究的な学習を促すRLAによる授業実践
～「整数の性質」の課題学習～
福井県立高志高等学校　教諭　**青木　慎恵**

【岐阜県】　県都中心部の伝統校閉校(隣接校との統合)と新設校初年度の軌跡
～児童の誇りや家庭・地域の信頼に繋げる学校の情報発信～
岐阜県岐阜市立徹明さくら小学校　校長　**藤田　忠久**

【三重県】　重度重複障がいのある児童生徒の主体的な動きを引き出す
～「したいを自由に」「思いを形に」を実現するために～
三重県立城山特別支援学校　教諭　**佐藤　千夏**

【滋賀県】　小学校体育科における児童の主体的な学習を促す指導法に関する研究
～ＩＣＴ機器を活用した第6学年の器械運動領域を対象として～
滋賀県草津市立山田小学校　教諭　**山田　淳子**

【京都府】　文学教材の可能性と授業実践改善に関する一考察
～夏目漱石『こころ』授業実践を手がかりに～
ヴィアトール学園洛星中学校高等学校　教諭　**松本　匡平**

【兵庫県】　児童が主体的に思考する授業の創造
～「教材とのずれ」、「仲間とのずれ」をキーワードに児童の意欲と思考を引き出す工夫～
兵庫県西宮市小学校教科等研究会理科部会　研究代表　**安部洋一郎**

【兵庫県】　「心を動かす授業づくり」
～楽しくて主体的に活動する体育授業へ～
兵庫県芦屋市立打出浜小学校　教諭　**植戸　宏行**

【大阪府】　学校生活とコミュニケーションする美術
～主体的に思考・表現し、対話的で深い学びを育むアートで、学校は学習協働体になる～
大阪府箕面市立第三中学校　教諭　**蜂須賀公子**

【大阪府】　家庭と連携した食に関する指導の推進
～家庭と一緒に、子どもたちの食生活をよりよいものに～
大阪府堺市立東浅香山小学校　栄養教諭　**田中　美貴**

【和歌山県】　戦争体験者の高齢化によるこれからの戦争学習のあり方について
～子供の生活空間を意識した地域素材の教材化と実践～
和歌山県和歌山市立雑賀小学校　教諭　**木下　雄生**

【和歌山県】　授業力を高める初任者指導
～教師と子どもの信頼関係づくり～
和歌山県海南市立大野小学校　教諭　**沖　香寿美**

【鳥取県】　身の回りの生活とのつながりを実感できる理科の授業づくり
～音単元における取り組みを通して～
鳥取県鳥取市立北中学校　教諭　**吉田祐一郎**

【島根県】　ふるさとから始まる平和学習プログラムの作成とその実際
～「戦争体験伝承者」育成のための学びのあり方～
島根県出雲市立荘原小学校　総合学習充実プロジェクトチーム
プロジェクトリーダー教諭　**恩田　香住**

【広島県】　学力向上を図るための「わかる」「できる」授業の創造
～児童の実態に応じたきめ細かな指導・支援を通して～
広島県東広島市立中黒瀬小学校　教諭　**石崎　彩**
教諭　**井上めぐみ**

【広島県】　花育活動を通して生徒の自己有用感を育む
～「学びなおしの場」で小さな経験を積み重ねる　定時制高校の取組～
広島県広島市立広島工業高等学校　養護教諭　**新開美和子**

【山口県】　児童が自ら動き出したくなる教師のしかけ
～「認識の目」を育てる国語授業づくり～
山口県山口市立良城小学校　教諭　**宮野　大輔**

【徳島県】　高大連携にもとづく教育実践による生徒・学生の変容
～新たな学力観を地域において具体化させる試み～
徳島県立図書館　係長　**生駒　佳也**

【高知県】　障害の重い児童生徒が“分かる”を大切にした授業づくり
～ＯＡＫを活用した実態把握に基づく主体的・対話的で深い学びにつながる実践の評価～
高知県立高知若草養護学校小学部　教諭　**森田　唯**

【大分県】　なりたい自分を思い描き、自立していこうとする子どもの育成をめざして
～ゲストティーチャー・保護者との連携を通して～
大分県臼杵市立南野津小学校　教諭　**岩崎　和代**

【福岡県】　科学的に問題解決する子どもを育てる理科学習指導
～２ステップの考察活動の工夫を通して～
福岡県久留米市立江上小学校　教諭　**松延　花子**

【福岡県】　OJT の推進による校内研修の充実
～教員の指導力改善とチーム力向上のための７つの方策～
福岡県春日市立春日北中学校　主幹教諭　**山川　征治**

【宮崎県】　基準量・比較量・割合の関係を的確に捉え、思考・表現できる児童の育成
～第６学年における「割合」学習の授業改善をとおして～
宮崎県宮崎市立池内小学校　教諭　**甲斐　淳朗**

【宮崎県】　「特別の教科　道徳」の評価の在り方
～児童の道徳的成長、教師の授業力向上に繋がる評価方法の模索を通して～
宮崎県延岡市立恒富小学校　教諭　**宇戸田　貢**

【鹿児島県】　支え合いながら教職の専門性を高め合う学習共同体の構築
～子どもの姿から学ぶ授業研究会を核にして～
鹿児島県鹿児島市立八幡小学校　教諭　**兒玉　拓世**

【佐賀県】　理科の授業でのアクティブラーニングの実践
～主体的・対話的で深い学びをめざして～
佐賀県鳥栖市立基里中学校　教諭　**舘　亮輔**

【佐賀県】　主権者意識を育てる社会科授業の設計
～社会的論争問題に対する意思決定の場を通して～
佐賀県佐賀市立城北中学校　教諭　**手島　将之**

【長崎県】　生徒の自己肯定感を高め、学びに向かう力の涵養を目指して
～生徒の情意を重視した教科指導による実践～
長崎県北松浦郡小値賀町立小値賀中学校　教頭　**関口　雄資**

【沖縄県】　主体的な問題解決による科学的な思考力・表現力の育成
～事象提示による予想・仮説の設定を通して～
沖縄県島尻郡久米島町立清水小学校　教諭　**浦添　充志**

日教弘教育賞

最優秀賞

優秀賞

優良賞

最優秀賞

《学校部門》

チーム力を結集する学校マネジメント

～【共有】と【協働】を軸にした「働き方改革」～

北海道札幌市立二条小学校
校長　大牧　眞一

Ⅰ　はじめに　～約8割が「働きやすさ」実感へ～

現在、教職員の業務負担が増加し、時間的、精神的なゆとりがなくなり、子どもに向き合う時間が不足しているということが全国的な課題となっている。

このような中、本校では、平成29年度後半から積極的に働き方改革を進めてきた。下表は、本校における「働き方改革」の取組について中間評価（平成30年9月末）として行った意識調査結果の一部である。

本校教職員の働き方についての意識　肯定的な回答（%）	
昨年度までと比べ、勤務時間内の負担感は全体的に減少したと思う。	79.2%
昨年度までと比べ、働きやすいと思う。	79.1%

昨年度までに比べ、約8割の教職員が「負担感の減少」と「働きやすさ」を実感しており、本校の改革が着実に成果をあげてきていると実感している。以下、その取組について論述していく。

Ⅱ　チーム力の結集が教職員の働き方を変える

学校における働き方改革においては、「仕事の無駄を減らす」という観点と同時に、「教育効果を高める」「教職員の同僚性を高める」という観点も重要である。改革の結果、仕事の質が低下したというのでは本末転倒になりかねない。

しかしながら、「仕事の無駄を減らしつつ、その質を高める」のは容易なことではなく、教職員一人一人の努力だけでは実現困難なテーマと言える。

そこで、本校では、以下の2点を重視しつつ、学校全体で組織的に働き方改革を進めることとした。

○教職員が仕事をシェア【共有】
○互いの知恵を出し合って問題解決【協働】

教職員の働き方における課題の一つに、「教職員が一人で仕事や問題を抱え込むことで、結果的に非効率を生み、負担感につながる」ことが考えられる。そこで、教職員が【共有】と【協働】を通じて、チーム力を結集して働く、「チーム二条」の体制づくりを図るべく、次の3つの改革に取り組むこととした。

1　「副担任制」の導入

学級担任制をとる小学校の課題は、「いかに学級担任を孤立させず、周囲からの支援を充実するか」である。

本校では、学級担任が生徒指導上の問題や校務を抱え込まないようにするために、担任外教諭が学級担任をサポートする副担任制を導入し、平成30年度から運用している。適宜、「立ちミーティング」なども取り入れ、迅速に組織的な対応をとっている。

2　「専科指導」の拡充

本校では、大きく2つのメリットがあると考え、「専科指導」の拡充を図ることとした。

○専門性を活かした、一層良質な教育が提供できる。
○専科担当教諭による授業時数を増やすことで、学級担任が校務に充てられる時間が増える。
○複数の教諭により多角的に児童の実態を把握することで、より実態に即した指導につながる。

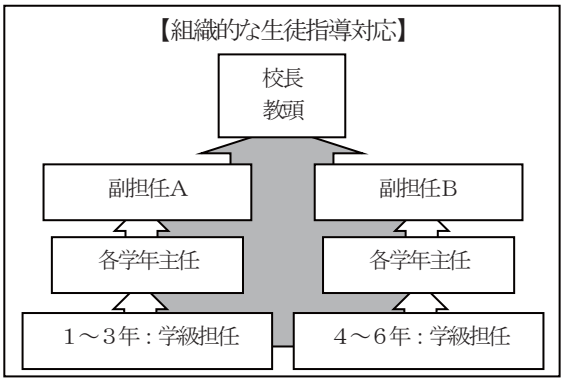
3　「学校マネジメント会議」の設置と活用

本校では、管理職と担任外教諭、学校事務職員や栄養教諭、用務員などで構成する「学校マネジメント会議」（以下、「マネジメント会議」）を新設し、学校からの情報発信や教育環境の充実、校務の効率化などについて、様々な観点で意見交換し、改善を図っている。

Ⅲ　具体的な取組

1　「副担任制」による改善策の実際

学級担任とともに、協働的に学級経営をサポートする体制として、「副担任制」を導入した。担任外の教諭2名が低学年と高学年をそれぞれ副担任として担当し、生徒指導上の問題や保護者対応などを学年主任と協働でサポートしている。



生徒指導や保護者対応は、迅速かつ的確な対応が求められるため、複数の教員による複眼的な検討が効果的なケースが多い。複数体制での対応によって、学級担任や学年主任も問題を抱え込むことがなく、精神的な負担感も軽減される。

また、直面する課題を共有し、ともに問題解決に取り組むことは、職員同士の共感性や組織としての実践知を高めることにもつながっている。

2 「専科指導」の拡充

本校では、各教員の専門性を生かして以下のような専科体制をとっている。

○ 3 ～ 6 年生の外国語活動を専科で実施
○ 5 ～ 6 年生の国語、音楽の一部を専科で実施

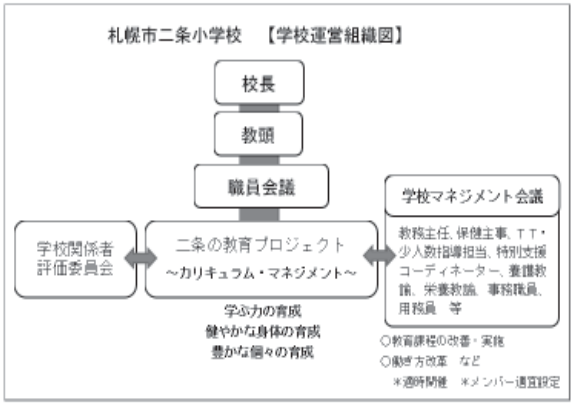
年間を通じて外国語活動を専科指導とし、専科担当教諭が授業を行う間、学級担任はその時間を校務を行う時間に充てている。また、教科数の多い 5 ～ 6 年生については、通知表作成時期（ 9 月、 2 月）に、特に多忙となる傾向があるため、この時期の国語と音楽を専科指導で実施することとしている。

教員の専門性を活かした授業により、子どもの学習意欲が一層高まるとともに、複眼的な児童の実態把握により、生徒指導の充実を図ることができている。

3 「マネジメント会議」による課題改善の実際

「マネジメント会議」では、学校で日常的に発生する教育課題をテーマに、学校全体を俯瞰して意見を出し合うことによって、幅広い観点から改善策を検討することにつながっている。

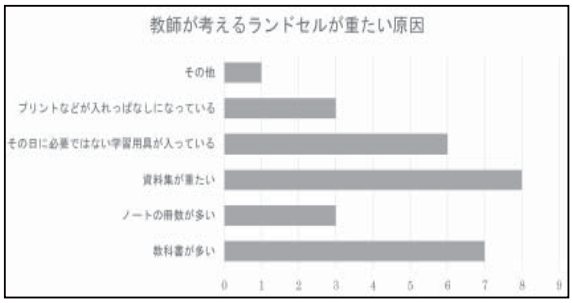
また、「会議」といっても、職員会議のように資料を準備して行うことを前提とせず、何か気づきがあれば、適宜開催し、時には必要なメンバーだけで、短時間で打ち合わせることもある。



大切にしているのは、改善すべき点を見出したときに、「即時検討・即時実行」すること、そして、「常にチーム対応」することである。

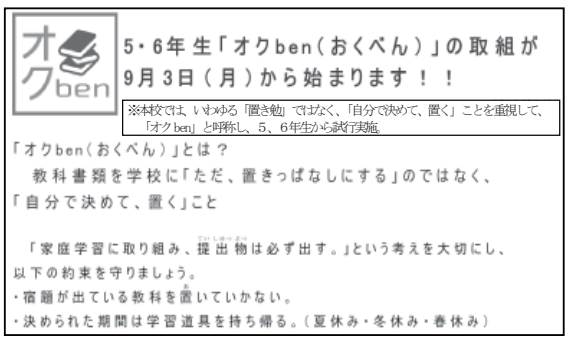
⑴　事例①　教育の充実（児童の携行品に係る配慮）

教科書や学用品の過重による身体の発達への影響などが報道等で取り上げられる中、本校では、定例の職員会議を待たずに、教員へのアンケート調査を行った上で、「マネジメント会議」で検討し、速やかに対策を実行した。



【教員へのアンケート】

「マネジメント会議」での検討に当たっては、教員へのアンケートを実施した。その結果、携行品を学校に置くことと、子どもが学習用具を自分で揃える生活習慣を確立することの両面を考慮することが重要との共通理解に至った。これにより、本校の明確な方針を打ち出し、迅速な対応が実現できた。



【児童への周知プリント（一部）】

⑵　事例②　教育の充実（理科教育）

理科の観察実験は、用具の準備に相当の時間を要するため、学習時間の確保の観点からも、「いつでも・簡単に・すぐに使える」環境づくりが欠かせない。「マネジメント会議」における検討の結果、理科担当の教諭に加え、教育委員会から派遣される観察実験アシスタント（週１回４時間勤務）と学校事務職員との協働で、理科教育の充実に向けた環境整備をチーム体制で進めることとなった。その結果、観察実験の授業が一層的確に実施できるようになり、集中して取り組む子どもの姿が見られている。

ア　観察実験用具の整理：観察実験アシスタント

- 使いたい物が一目で分かるよう、単元と関連付けて実験用具等を分類整理し、ラベリング。
- 整理等の結果を文書で学級担任等に共有。

イ　適正な薬品管理の実施：学校事務職員

- 「監査に耐えうる適正な管理」を目指して、学校事務職員が教員へ助言を行いながら薬品の整理・保管、定期点検及び管理簿を作成。

⑶　事例③　情報発信の充実

保護者・地域からの学校への信頼をさらに高めるため、情報発信の進め方について改善を図った。

ア　学校ホームページ（以下、「ＨＰ」）の充実

ＨＰの充実を図るため、ＨＰ担当者を、管理職、担任外の教諭や学校事務職員などの複数体制とした。

特に学校事務職員は、これからの学校において、校長・教頭の右腕となるような活躍が期待される存在であることから、本校では、学校事務職員が学校のスポークスマン的な役割を担っている。学校事務職員は、ＨＰのニュースコーナーを担当し、日常的な教育活動を取材して、分かりやすいコメントを付けて情報発信している。保護者からは、「ＨＰが楽しみです。」との感想が寄せられ、アクセス数も増加している。

◇お知らせ◇　熱中症に注意！

この夏、各教室に扇風機を設置しました。学校では、休み時間はもとより、体育の学習など、状況に応じて水道水を飲用するよう指導しております。気温が高い日には、ご家庭の判断で、水、又はお茶を入れた水筒を持参してもよいこととしています。

イ　玄関前大型モニターによる情報発信

社会に開かれた学校づくりを進める上では、学校に来校する方々に対して、学校のよさを伝えることも大切である。来校者が目にしやすい玄関に設置している 40 インチの大型モニターに、教員や学校事務職員が撮りためた写真をスライドショーで常時映し出している。ＨＰでは紹介しきれない子どもの取組をタイムリーに情報発信することにより、来校された保護者や地域の方が笑顔でモニターに見入ったり、子どもたちも他学年の学習等を知る機会になったりしている。

【玄関前モニター】

ウ　お便りのフルカラー化

子どものよさや学校の取組のよさを分かりやすく伝える「学校便り」「学年便り」の在り方についても検討し、カラー印刷機を増設することによって、写真を豊富に掲載した視覚に訴えやすいフルカラーのお便りを発行することにつながった。学校の様子がより分かりやすくなったと保護者から好評である。

⑷　事例④　児童の安心・安全の確保

本校グラウンド（今年度新設）は、外周のほとんどが雨水を流すための溝で囲まれているが、溝での転倒が懸念されるという課題があった。このため、「マネジメント会議」では、溝にウッドパネル（写真）を敷き詰めるアイデアが提案され、目前の運動会に向け、学校事務職員が設計・材料の調達を担当し、用務員と協働で自作ウッドパネルを敷き詰めた。コストを抑え、児童が不安なくグラウンドに出入りできる環境を実現したことは大きな成果であった。

【自作ウッドパネル】

⑸　事例⑤　情報資産管理の改善

学校では、相当数の調査対応、文書管理・作成を行っている。事務的業務に時間を割くことで、長時間勤務せざるを得ない状況につながる場合も多い。

本校では、このような状況を踏まえ、学校事務職員が要となって情報資産管理の改善を図ってきた。

ア　学校徴収金業務のマネジメント

学校徴収金業務は、多種多様な経費を扱い、作成文書が大量であること、帳票等の作成経験が少ない

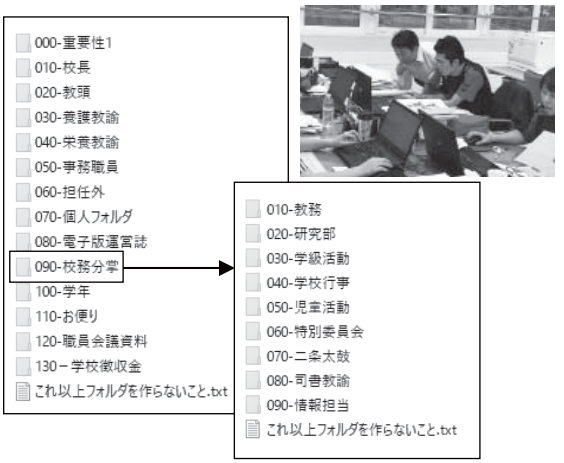
教員が多いことなどから、担当となった教員が苦労するということも少なくない。また、個人情報が含まれるため、セキュリティ対応にも気を遣う。本校では、徴収金業務及びセキュリティ対応について、各担当に任せっぱなしにせず、情報資産管理のプロである学校事務職員が作成過程での助言や進捗管理を行うなどし、効率的かつ安全に業務を進めている。

イ　「次に使う人」を意識した情報資産管理

校務用パソコンの普及により、かつてのように、教材や会議資料をゼロから作り上げることは不要となった。サーバー内のフォルダを検索すれば、昨年までの資料が残っているのである。

しかしながら、学級担任は、教材や資料の作成にこそ時間をかけられるが、分類整理にまではなかなか時間を割けない現状があり、データ管理の方法が統一されず、検索に時間がかかってしまうという現状が本校でも見られた。

「マネジメント会議」の検討を経て、「次の人が使いやすい」をテーマに、ジャンルごとにフォルダを再構築し、「これ以上フォルダを作らないこと」などの運用ルールを明確にした。これにより、現在、既存のデータが円滑に活用されている。



【PC のフォルダ構成】

Ⅳ　取組の成果

1　チーム力の高まり

これまで述べてきたように、本校では、「授業」や「生徒指導」、「事務」を複数の教職員間で【共有】し、互いの知恵や持ち味を発揮しつつ、問題解決を図る【協働】を大切にしてきた。

教職員の中からは、「○○さんにアドバイスをもらえて助かった」、「この学校で働くことが楽しい」という声が聞かれるようになってきた。問題を一人で抱え込まず、チームで対応することで、安心して働くことのできる職場環境づくりにつながっている。

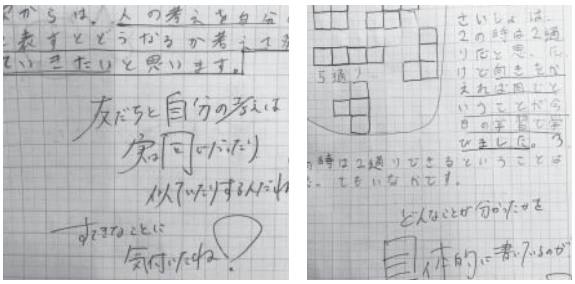
本校教職員の意識調査結果では、チーム対応の実現について、約 8 割の教職員が肯定的にとらえている。

本校教職員の働き方についての意識　肯定的な回答（%）	
昨年度までと比べ、職員間での<u>チーム対応について、円滑に行われている</u>と思う。	79.1%

2　チームで生み出した「ゆとり」を子どもに還元

多岐に渡る校務について、チーム力を結集して対応していくことで、教職員に、時間的な「ゆとり」を生むことが見えてきた。管理職が「早く帰ろう」と促すまでもなく、早く退勤する教職員が目に見えて多くなってきている。

また、「ゆとり」が生まれることで、今まで以上に、きめ細かに児童の指導や保護者対応等に取り組むことができるようになっている。これは一例だが、ノートにコメントを書くなどして、授業での子どもの伸びを価値付ける取組が今まで以上に充実してきている。



【ノートへのコメント】

Ⅴ　まとめ～今後の課題に代えて～

「教職員の皆さんの表情が明るいですね。」

これは、先日、他県から本校を視察に訪れた教育関係者の言葉である。働き方改革によって教職員が生き生きと働く「活力ある学校」づくりを目指してきた本校にとっては、この上ないほめ言葉である。

学校における働き方改革は、単に勤務時間の短縮を目標にするのではなく、改革の結果、教職員が溌剌（はつらつ）、颯爽（さっそう）、堂々として自信をもち、やりがいを感じながら働くことができること、そして、その姿が子どもにあこがれの気持ちと将来への夢を感じさせることを目指すべきである。

本校の取組は、未だ試行錯誤の連続であるが、引き続き、「チーム二条」の充実にチャレンジしていきたい。

最優秀賞

《学校部門》

「公の場で通用する人」の育成を目指して

～「自分がする」「みんなとする」「ほめあう」活動をとおして～

大分県中津市立豊陽中学校
校長　山香　　昭

1．はじめに

本校は大分県北部に位置する中津市の中心部にあり、2018年度は生徒数356名、特別支援学級2学級を含め全13学級、教職員数は市の支援員等を含め合計32名の中規模校である。

私は、新任校長として本校に着任し、今年度で3年目を迎えた。着任前には「生徒指導が大変ですよ」「保護者対応が多いですよ」等言われ、いわゆる問題の多い学校であった。

実際、着任した4月の始業式では、止まない私語、服装違反、教職員の指導に従わない生徒等、気になる生徒は多くいた。しかし、大半の生徒は私の話しをきちんと聴き、変わりたい、成長したいという気持ちが大いに伝わってきた。むしろ気になったのは、「静かにせんか！」「はやく並ばんか！」と大声で指示をしている教職員の指導方法であった。そのような「強い指導」を行う教職員の思いは、はやく落ち着いた学校生活を取り戻したいということからだろうが、信頼関係が十分築かれていない状況では、その真意が伝わりにくく、リーダー的な生徒や真面目に聞いている生徒も、そのような指導方法に対しては不満をあらわにしていた。

2．学校教育目標等の設定

（1）ＳＷＯＴ分析

4月に教職員と面談を行った際も、「一部の保護者の協力が得にくい」「毎日生徒指導に疲れている」「若い教職員が少ない」等、全体的にネガティブな発言が多かった。そこで、本校の強みを確認するため、全職員の意見を聞いてＳＷＯＴ分析を行った。

分析結果から、内部環境では「生徒は男女とも仲が良い」「経験豊かな教員が多い」等があげられ、外部環境では「校区内に3つの高校がある」「地域の方が協力的である」等、本校の強みを確認できた。また、マイナス因子である「学校に苦情を言う保護者が多い」も、「学校に期待する熱心な保護者が多い」とみれば強みにもなると理解し、無いものをねだるより本校の強みを活かしながら課題を解決するよう全員で確認した。

（2）学校教育目標と行動目標

学校教育目標：「公の場で通用する人」の育成
行動目標：自分がする・みんなとする・ほめあう

「公の場で通用する」とは、相手軸に立って行動ができることであり、そのためには、教科等の基礎・基本、思考力・判断力・表現力に加え、言葉やマナー等の技能を身につけることが求められる。また、「生徒」の育成でなく「人」の育成としたのは、仮に卒業までにそのようなことができなくても、いつか必ずわかってもらえることを信じて、最後の最後まで絶対に諦めない、一人も見捨てないという教職員の覚悟を示すものである。

そして、行動目標を「Ｊ：自分がする」「Ｍ：みんなとする」「Ｈ：ほめあう」とし、それぞれの頭文字を取った、「Ｊ・Ｍ・Ｈ」を行事や日々の授業においても、意識するようにした。

「自分がする」とは、一人一人がそれぞれ当事者意識をもつことであり、できない言い訳をなくすことでもある。そのため、常に教職員や生徒には、「“So what?”＝だからあなたは何をするの」「“Now what?”＝これからあなたは何をするの」と問いかけることにした。

「みんなとする」とは、協力することである。一人の力は無力である。多様な考えをもった者が集まり、意見を交わすことで、新たな方策がみつかるのである。

そして、「ほめあう」を最も重点的な目標とした。「ほめる」とは単なるおべっかや相手のご機嫌を取ることではない。ましてや、相手をコントロールするために行うものでもない。「『ほめる』とは、価値を発見してそれを伝えること」と定義して、教職員、生徒、保護者がほめあうことを意識し行動することとした。

3．「自分がする」（率先垂範）

校長がビジョンを熱く語っても、また、教職員に自

分のやりたいことを企画するように勧めても、これまでの学校文化を変えることは難しい。そのため、学校経営方針や目指す姿を校長自らが行動で示すことで生徒、教職員、保護者等に伝える必要があると考えた。

（1）集会時の指導と講話

全校集会時は自ら一番に会場に行き、「3年生の男子の整列が素早いね」「2年1組はスリッパをしっかり揃えているね」「○○君の座り方はお手本だね」など、その良さを具体的にほめることで、生徒自ら行動することが増え、集会が素早く行われるようになってきた。

その後、体育大会の練習において、当初は「赤団の集合が遅い」「遅刻だ！走らんか」と言っていた体育主任の指導が、「白団は集合が速い！」「遅刻だが昨日より30秒速くなった」と変わってきた。どちらの指導を行っても集合時間はあまり変わらなかったが、生徒達は、「怒られるのが嫌」ではなく「もっとほめられたい」という思いから行動するようになってきた。

さらに、校長の講話等も授業形式として、集会時はプレゼンを用意し、生徒が自ら考え、話し合い、発表する場を設けることにした。そのような集会では、拍手が溢れ、生徒達も自然と笑顔になっていった。また、生徒をほめるためには、校長（指導者）が一方的に話すのではなく、生徒に活動の場を十分保障することを教職員にも伝えることができた。

（2）「写真＋価値語」の掲示

私は、授業や部活動、行事の様子を写真に撮り、その写真に価値ある言葉を添えて、廊下や階段などに掲示し、その生徒達の価値を伝えてきた。途中、学年主任や副担任の協力も得て、約2年間で400枚作成した。

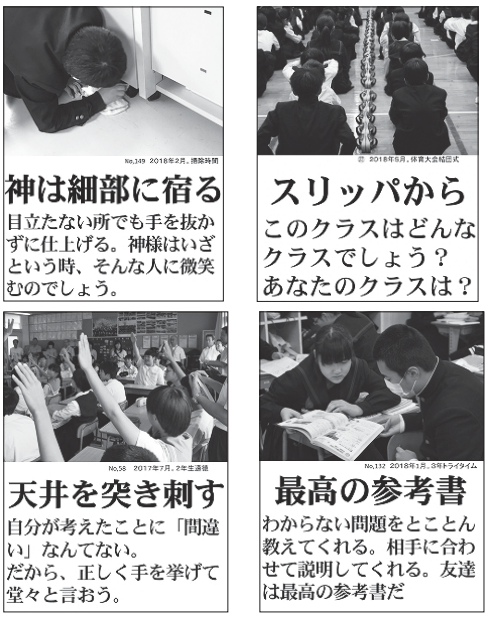


写真1～4．「写真＋価値語」の例

写真5．「写真＋価値語」の掲示

このように、自分たちの日々の行動の様子を写真で見ることで、真っ直ぐ手を挙げることの美しさや、きちんと整列していることで気持ちが揃っていることを感じることができたようだ。また、日頃はあまり知らない他クラスや他学年の生徒の様子を知ることにもなり、その生徒への見方が変わるだけでなく、自分身の行動を振り返ることにも繋がったようだ。

さらに、写真とともに、その行動の価値を示した言葉（本校では「価値語」という）を読むことで、なぜこのような姿が良いか、そこにどのような価値があるのかを考える生徒もいた。

また、学活や帰りの会（ほめほめタイム）においても、最初は「授業に頑張ってました」「真面目に掃除をしてました」等しか言えなかった生徒も、写真にある「価値語」を参考にしながら、「○○君は、国語の時間に先生の質問に直ぐ答えることができました（事実）。彼は『無茶振対応力』があります（価値）」「○○さんは、掃除を最後まで頑張っていました（事実）。『周りに流されない人』だと思いました（価値）」等、「具体的な事実」と「その価値」を合わせて、友達をほめる生徒も増えてきた。

4．「みんなとする」

（1）「1枚の写真」から（ミニ研修）

ほめることの意義やその方法を理解した教職員も増えたが、「あの生徒はほめることが無い」「つい欠点の方に目がいってしまう」という声も多くあった。

写真6．「ミニ研修」の様子

そこで、職員会議や研修の初めに、教職員はペアになって、授業中等に撮影した1枚の写真を見ながら、「1分間で生徒の良いところを10カ所以上みつけよう」というミニ研修を行った。

そのようなミニ研修を繰り返すことで、意識的に良いところを見つけるようになり、学期末に行う教職員の自己評価では、全ての教職員が「生徒をほめる機会が増えた」と回答した。

（２）道徳の授業改善

写真７．菊池省三氏の授業

ほめるためには、生徒の多様な意見を引き出し、認めることが必要である。そのような取り組みを全教職員で推進するためには、道徳の研究や実践が効果的であると考えた。

そこで、2017 年度は全国で講演活動や提案授業を実践している、元小学校教諭の菊池省三先生を招き、各学年において道徳の授業を行って頂いた。菊池先生の授業では、生徒達は自分の考えを伝えるために積極的に動き、笑顔で友達の意見に拍手をしていた。日頃と異なる生徒の姿を目のあたりにした我々は、事後の研究会では自分達の指導法について素直に見直すこととなった。

これまでは、公開授業等で師範的な授業を参観しても自らの授業改善につなげることはあまりなかったが、今回は菊池先生が行った授業の追実践を、数日後の参観日（学校公開日）に全ての学級担任が行った。

写真８．追実践の授業

追実践を通してわかったことは、菊池先生のような授業名人でなくても、生徒が自らの成長を感じる授業ができることだった。

そのためには、生徒の力を信じるという授業観と、生徒の意見を引き出し、それらを繋ぎ整理するファシリテーターとしての技能を磨くことが必要だと感じた。

追実践の成功は我々教職員に自信を与え、その後、教科等においても、それぞれの生徒のネームプレートを用意し、自分の立場を明確にさせる授業や、ディベート形式を取り入れた授業が増えてきた。

なお、2018 年度の校内研究は、教職員の強い希望から、道徳の授業を中心として研究を進めており、現在は、副担任も含めて計画的に授業実践を行っている。

（３）生徒会活動の活性化

学校が真に安心・安全な場となるためには、教職員の指導だけでなく、生徒による自治力の向上、特にリーダーの育成は必須である。

そこで、生徒会執行部と校長が話し合い、生徒が感じている学校の課題や、自分達でやりたい事を出しながら、前例踏襲にならない新たな企画を共に考えた。

①執行部による新たな企画

生徒会執行部が独自に行動した例として、朝の挨拶を笑顔で行う「ハイタッチ運動」や、言われてうれしい言葉を集めた「ありがとうの木」、集会時に無言で移動し集合する「無言整列」等があげられる。さらに、市総体激励会では、執行部を中心とした応援団を組織し、校長と共にサプライズの応援を行った。

写真９．サプライズ応援団

②「縦割無言清掃」

生徒会執行部は、学校をもっときれいにしたいという願いから、小学校時に行っていた「無言清掃」を実施したいと訴えてきた。しかし、本校の教職員は「無言清掃」を指導した経験がなく、導入は慎重になっていた。そこで、生徒会美化部長から 3 年生をリーダーとした「縦割りによる無言清掃」が提案された。当面は月に 1 週間程度であるが、3 年生の指導のもと、15 分間、集中して掃除を行うことができている。また、リーダーは、その日の反省を翌日に活かすＰＤＣＡサイクルを回すことで、学年が異なるメンバーにあっても、協力しながらより効果的な方法で取り組む姿が見られてきた。

写真 10.「無言清掃」の様子

５．「ほめあう」

（１）朝の会、帰りの会の工夫

これまでの朝の会や帰りの会は、教職員からの一方的な伝達事項が主な内容であったが、生徒の成長を確認する時間とするために、朝の会を「のびのびタイム」として今日の目標を設定させ、帰りの会を「ほめほめタイム」として、友達の良かった点をほめあう時間とした。今では毎日「ほめほめタイム」になると、各教室から笑顔と大きな拍手が溢れている。

写真 11.「ほめほめタイム」

また、マンネリ化を防ぐため、下学年の生徒が上級生の「ほめほめタイム」の様子を見学することで、ほめる視点や価値の伝え方などを学んでいる。これらの活動を通して、生徒だけでなく、教職員も「ほめほめ

タイム」の多様な運営方法を学ぶことができ、終了後の職員室ではお互いの学級の生徒を讃えながら、学年を超えた話し合いが行われ、教職員の関係の質も向上してきた。

（2）「校長通信」と学校ＨＰの毎日更新

ほめられた経験が少ない人は、ほめることの良さを実感することはないと思われる。そこで、教職員の頑張る姿や生徒の価値を伝えるために、本校の教職員に向けた校長通信（「山ちゃん通信」）を発行している。

2018「山ちゃん通信　NO.３４」

2018. 9.4
校長：山香 昭

授業改善最前線

「単元目標」と「本時の課題」
そして「今日のながれ」

安部先生は単元全体の目標を毎回掲げ、単元の流れを確認しながら、本時の課題と流れを示しています。
単元のゴールイメージを常に意識させることで、「何のために今日学ぶのか」を確認することができますね。また、習熟度に応じたプリントを準備し、ネームプレートで進捗状況を確認させることで、本時の評価規準の達成状況も確認もできますね。今回は全員達成！

①課題の確認
②授業プリント
③ワーク
④
⑤確認テスト

時間を記入

作業が多い村上先生の授業では、資料にそれぞれの時間を明記しています。時間を意識させることで、生徒も集中して取り組み、作業後のふりかえりの時間を確保できます。

1枚の写真から

庭瀬先生の授業では、1枚の写真から「楽しい」「悲しい」という２つの立場で意見を書かせ交流していました。正解は無いという自由さと、異なる立場で考える多様さを育んでいました。

数学的な説明

渋谷先生は、生徒に説明させると共に「展開」「因数分解」等の数学の用語を使うよう、繰り返し指導しています。また「めあて」「課題」も毎回明確で中津教育事務所長さんからも褒められました。

公の場で通用する生徒たち

昨日、尾本指導主事さんが、実力試験の問題と、５日間の「学びのススメ表」の取り組みについて授業に来られました。

図１「山ちゃん通信（校長通信）」の一部

主な内容は、各教員の授業の工夫点やベテラン教員の板書の他、掃除等に地道に頑張っている生徒の紹介等である。年間 100 号を目標に発行し、本校のＨＰでも公開しているので、他校や他県の校長から資料提供を求められることもあった。

また、保護者や地域の方に対しては、日々の授業や行事等の様子をＨＰで毎日紹介している。アクセス数は、着任当初は月に 2,000 程度であったが、現在では月に 10,000 以上のアクセスがある。最近では、「ほめることは大切ですね。家庭でもやっています」「『ＨＰみたよ。あなたのお子さん頑張っているね』と言われました」等の声が増え、保護者アンケートからも「ご家庭において子どもをほめている」と回答する割合が高くなった。

６．成果と課題

教職員の意識や生徒の行動が変化すると、暴力行為や反社会的な行動をする生徒は激減し、課題であった学力についても、低学力層の減少が顕著に表れ、全体的に向上してきた。また、生徒の思いやいじめのサイン、生活状況をより客観的に分析するため、昨年度から生徒質問紙調査「i-check」（東京書籍株式会社）を６月と２月の年間２回実施している。以下は昨年度の３年生のデーターであるが、２月は全ての項目で全国値を超え、ほとんどの項目が６月より向上していた。

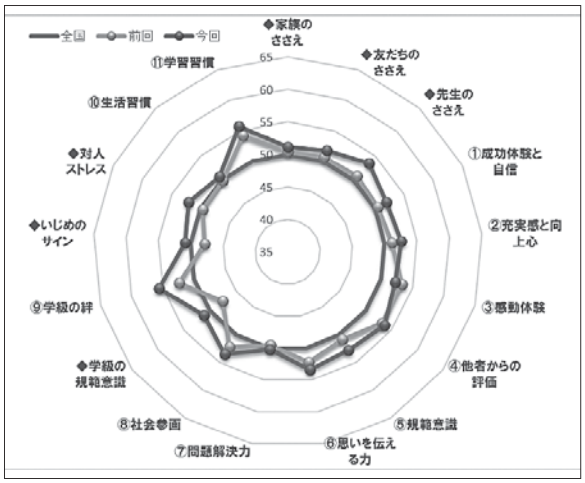


図２「i-check（生徒質問紙）」　３年生の変化（６月→２月）

このような本校の「ほめる」ことを中心とした実践はテレビや新聞等にも紹介され、昨年度は韓国の学校関係者も視察に来られた。さらに、「一般社団法人日本ほめる達人協会（理事長：西村貴好）」が主催する「ほめ達！オブ・ザ・イヤー 2017　特別賞」を受賞した。同賞は、全国的に実績のある企業や、日野原重明氏や小林麻央氏等の個人に贈られるもので、学校では本校が初の受賞だった。受賞は中津市長からも大いに讃えられ、本校生徒会は「平成 29 年度中津市教育長表彰」を受けた。

課題としては、「自分には良いところがある」等の自尊感情に関する質問に対し、最も肯定的な回答をする生徒の割合が伸び悩んでいることにある。今後は、生徒の良さをほめるだけではなく、一人一人の生徒が自らの力でやりとげたような達成感や、友達と協力して困難な課題を乗り越える感動経験をさせるような、授業や行事を企画していきたい。

７．おわりに

「あの子達が、あんなに成長したんだ」という、生徒の劇的な変容は、生徒達だけでなく、なによりも本校教職員一人一人の大きな自信となった。

今後とも、教職員、生徒、保護者と共に、「Ｊ・Ｍ・Ｈ」を合い言葉として実践を重ね、それぞれの価値を発見しながらよりよい学校経営を行っていきたい。

優　秀　賞

《学校部門》

次代を担う農業土木スペシャリストの育成を目指して

～地域連携と最新技術の習得を通して～

群馬県立吾妻中央高等学校
校長　鎌田　幸生

Ⅰ　はじめに

人が生きていくために必要な、「衣・食・住」。これを支える一つの職業である農業土木。しかし、数年前より、農業土木系への就職希望者が少なく、業界の若者世代の減少が著しい。リーマンショックから右肩下がりの景気になってしまった建設業、昔からのイメージ「きつい、危険、汚い」の３Ｋと呼ばれた過去もまだまだ足を引っ張っていると思われる。地元地域はもちろん、日本の将来を支えていくには農業土木の技術者が必要不可欠であるため、それを望み、その技術と知識を意欲的に学ぶ人材の育成が求められている。

本校は、群馬県北西部に位置する全日制の高校であり、今年度より吾妻高校との統合により、環境工学科、普通科、生物生産科、福祉科の４学科にてスタートした。環境工学科は旧中之条高校からの伝統を引継ぎ、「農業土木のスペシャリストの育成」を教育目標に掲げ、教育活動を展開している。１年次は農業土木全般について基礎・基本を学習し、２年次より応用的な学習を経て、測量国家試験や土木施工管理技術検定など、専門的な資格試験に挑戦している。その成果もあり、地元地域はもちろん、県内の企業や団体から毎年求人を多数いただき、また、実際の測量を依頼されるほど信頼も厚い。

昨今、その測量技術は目まぐるしい発展を続けている。そのスピードに追い付き、最新技術の知識や技術を習得することで、イメージである３Ｋを払拭すると同時に職業観や勤労観の育成につながり、進路の選択肢とする生徒が増えていくことが期待される。

これらを実現するため、農業土木のスペシャリストの育成を目指し、本主題を設定した

Ⅱ　研究目的

本学科の特色ある教育活動により、地域連携を通じ、最新技術の知識や技術の習得・活用を通じて、農業土木のスペシャリストを育成する。

Ⅲ　研究方法

最新技術の知識と技術を習得するため、本学科の柱である測量学に焦点をあて、研究に取り組んだ。研究内容は、各活動の内容及び成果を記した。また、研究のまとめは、進路実績、国家試験実績等から、検証を行った。

Ⅳ　研究内容

１　最新技術その１『ドローンによる写真測量』

（１）活動経緯と活動内容

測量学では、空中写真から地図を描く『写真測量』の分野がある。従来の写真測量は、測量用カメラを装備したセスナ機で、上空数千メートルから重複写真を撮影し、専用の図化機で地形図を描画する等、作業工程のどれ一つを取っても教育現場で実際に行うためには専門業者に依頼しなければ不可能であり、そして高価であるため、現在に至るまで座学によるイメージで学習指導を行ってきたのが現状である。しかし、近年、ドローンが高性能化、かつ安価で販売され、安定飛行と鮮明画像の撮影が可能となり、測量業界のみならず様々な企業で用いられるようになった。さらに、その空撮画像を処理する写真測量ソフトウェアもアカデミックパッケージの登場など、学校での写真測量実習が、ある程度まで可能となった。そして、平成２８年、国土地理院より、『ＵＡＶ（ドローン）を用いた公共測量マニュアル（案）※以下「規程」と称する』が制定され、一定の条件をクリアすることによりドローンによる公共測量が可能となり、昨年度の測量国家試験にも出題されるようになった。その対策も視野に、ドローンを通じ、写真測量についての学習指導を開始した。

活動項目は次のとおり。

①小型ドローンで操作の基礎・基本習得
②ドローンの危険性、安全管理、法律の学習
③ドローンによる空中写真撮影技術の習得
④撮影画像で精度検証
⑤ドローンの応用的な発想の考案

（２）成果

①確かな学力

ドローンという新技術に生徒は興味・関心が高く、ほぼ全員が終始笑顔で楽しんで学習をしている様子であった。それに加え、飛行には中途半端な練習では墜落の可能性が大きいことを全員が承知し、短時間集中の練習を積み重ねた。昼休みや放課後も率先して練習を希望した生徒も見られ、練習当初では考えられない操作技術を今では身に付けている。

また、空撮画像から精度検証を行い、規程に記載された精度に収まるよう、生徒達が課題・仮設・実行を繰返し､最終的に精度内に自分達で収めることができ、今では準備から片付けまで生徒自身で全てやりとげ、突然の風にも対応する余裕と平常心さえ見せている。

②職業人に求められる倫理観

小型ドローンの練習中、原因不明の暴走により、生徒の頭に着陸してしまうアクシデントが起こった。大事には至らなかったが、髪の毛を巻き込み、生徒本人の承諾を得て髪の毛を数本カットして取り外すことになってしまった。小型ドローンは全面ガード付きを使用し、人体に触れても安全なものであり、細心の注意を払い練習環境を整えていたはずであったが、このような事態になってしまい、被害者の生徒には非常に申し訳ないことになってしまった。しかし、この失敗により、新技術には誰もが予想できない出来事が起こる可能性があることを生徒全員が身をもって学習し、危険性や保険等、その倫理観について深く学ぶことができた。

③豊かな人間性

空撮では役割分担を決め、ドローンの墜落や事故等を極力避け、また、操縦士の負担を最低限に抑えるために、生徒たちはドローンの騒音に負けないよう声を出し、指示を出し合い、操縦士に状況を伝える努力をした。撮影を終えてもドローンが帰還するまで気を抜くことは無く、無事に帰還すると、安堵の表情と達成感に満ち溢れ､仲間と成功を分かち合う様子が覗えた。また、現場の天候や風向き等の状況判断により、地上約８０m上空まで飛行高度を上げて撮影した。その撮影画像をみんなで確認したときの生徒の感動の様子は最高であった。生徒自身で、そこまでの状況判断ができるようにもなった。

また、現在では、活動の成果が認められ、各行事の空撮や、飼料用トウモロコシ畑の被害調査映像などの環境調査にも、空撮の依頼をいただけるまでになり、生徒は誇らしげに計画から準備､空撮､画像処理をやってのけ、依頼者から喜びの声をいただいている。そんな彼らの成長を見る限り、私たち教員をも超えた知識と技術を得ていると感じられ、職業人としての必要な資質・能力が育まれていると実感した。

④研究日誌、アンケート結果

ドローンによる写真測量の挑戦に関して、日々日誌を記載させたところ、ほとんどの生徒が､「次は操作をさらに上達したい」と記載した。アンケートによる結果でも､ほとんどの生徒が「進路に活かしたい」､「ドローンについて応用的な知識を身に付けたい」と解答している。このことから、ドローンを使用する職業への一歩が開けたと思われる。

写真：ドローンによる空撮

写真：空撮画像で精度検証

２　最新技術その２『農業用水路の点検・補修』

（１）活動経緯と活動内容

５年前より、地元の美野原土地改良区より農業用水路の測量を依頼され、約２００ｈａの測量に取り組んでいる。その連携活動の中で、農業用水路の点検、及び補修についても、県農村整備課や地元建設業により指導いただき「ストックマネジメント」について学び、実践を毎年継続している。

活動項目は下記のとおり

①　水路図作成のための各種測量
- 従来の器械を用いた測量
- Ｎ－ＲＴＫを用いた測量（最新機器）

②　水路の損傷、ひび割れ等の点検、及び診断
- 野帳、ペンを使い記帳・記録
- ＰＤＡを使用した記録（最新機器）

③　水路の点検箇所の簡易補修
- 基本的なモルタルによる簡易補修
- シーリング材による充填工法補修
- 接着型テープによる被覆工法補修（最新技術）

（2）成果

① 人工衛星とＩＴによる測量

学校所有の測量機器での測量は、従来の方法でしかなく、基準となる点から全て始まる基礎的な方法で行っている。しかしＮ－ＲＴＫ（ネットワーク型ＲＴＫ）は、その器械単体で人工衛星から電波を受信し、さらに無線ＬＡＮで補正情報配信機関より情報を受け、精度よく位置情報を導く、基準点が不要な測量機器である。学校には無い器械のため、毎年地元の測量会社の方に社会人講師として御指導いただいている。器材については、受信機、専用ポール、操作用ＰＤＡとほぼ3つしかなく、測量の方法は観測したい場所へ行き、観測ボタンを押し、数秒で終わる。これを次々と同様に行っていく。毎年、これを体験した生徒は、そのスピードと手軽さに呆気にとられ、実習で感じていた測量への若干の煩わしい感情が払拭される瞬間となる。現代の高校生には、人工衛星や無線ＬＡＮなどは、カーナビや携帯電話など生活環境の一部であり、原理としての理解は早い。それもあり、生徒の日誌には、「早い」、「便利」、「楽しい」など、業界のイメージが良い方向へ感じられた成果が表れた。

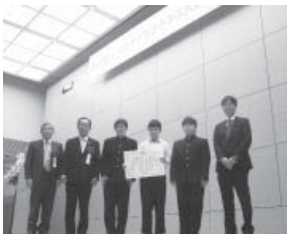
② ストックマネジメントという仕事

生徒の中で、農業土木の仕事のイメージは、建設のための設計、設計に基づいた測量、そして測量に基づいた施工、建設と何かを造り上げるイメージが強い。しかし、毎年、土地改良区や県農村整備課、地元建設業によりストックマネジメントについて御指導いただき、農業用水路の点検から簡易的な補修まで行っている。すると、生徒の感想は「想像より簡単」、「想像より楽しい」と好印象の結果となっている。特にモルタルを実際の現場で練り、均してみると、興味・関心を抱き、非常に楽しそうに行う。さらに簡単なシーリング材や接着型テープで補修してみると、「仕事というより遊びの延長のよう」との意見もあり、スムーズに、そして楽しんで行う様子が覗える。また、水路の布設替えについては、先輩が行ったのを見たり聞いたりした上で、「早くやってみたい」、「楽しみ」など、想像を超える好印象であることがわかった。

生徒には、「ストックマネジメント」という仕事があること、その仕事が非常に多いという現実を伝えると「この仕事なら出来る」、「この仕事ならやりたい」との意見があり、業界のイメージをまた一歩明るくする結果となった。

この活動については、美野原土地改良区がインフラメンテナンス大賞に輝き、今年8月に表彰された。この表彰式にも対象生徒が参加することが出来、生徒の励みになったと思われる。

写真：水路補修

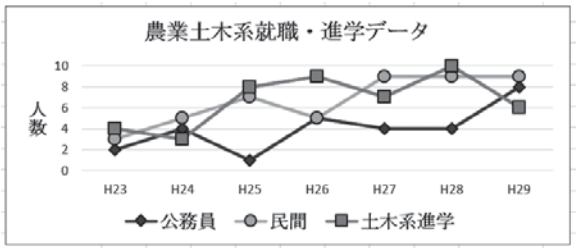


写真：ｲﾝﾌﾗﾒﾝﾃﾅﾝｽ大賞表彰式

Ⅴ 研究のまとめ

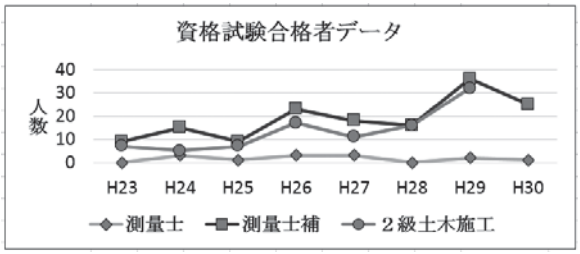
これまで述べた各教育活動や成果を踏まえ、過去7年間の進路先、及び資格試験の成績について、表にまとめ検証する。

表1 過去7年間の進路先



この進路先データから、多少ではあるが農業土木系の進路へ進む生徒が増えてきている。また、農業土木系技術職の公務員へと希望する生徒も増えてきているのがわかる。土地改良区と連携を始めたのが5年前であり、その平成２６年より増加しているとも読み取れる。土地改良区と連携を始めた当初から、水路の測量についてＮ－ＲＴＫ機器は地元測量会社から、水路点検は県農村整備課、水路補修は地元建設会社と、各企業や団体に直接講義していただき、各々の仕事について直接知ることができ、また、現在社会の最新技術を知ることにより、３Ｋのイメージが払拭されると同時に、仕事の中身や楽しさを味わえたことが大きな要因であると考えられる。また、表2は測量国家試験と2級土木施工管理技術検定の合格者についてデータをまとめたものである。

表2 測量国家試験と2級土木施工管理技術検定合格者



測量国家試験に関しては、ドローンを取り入れ、試験対策に実物とその映像や原理を直接見せながら学習指導が出来てきたことにより、今まで座学のみでイメージが難しかった写真測量について理解が深まり、得点出来るようになったのではないかと推測される。

また、2級土木施工管理技術検定に関しても、建設業との連携が始まった5年前より合格率が上がっている。プロの指導の下、直接現場で実作業を行った経験により、それが深く印象付き、出題される問題の意味も理解しやすくなったと思われる。

資格取得に挑戦した生徒は、特に合格を手に入れた生徒は、「資格を活かしたい」と関連企業へと進路を進める生徒が多い。また、公務員に挑戦したが残念な結果に終わってしまった生徒も、「資格を持っているので」と関連企業へ進む生徒が多い。

これらの検証から、本学科の教育活動は地域連携と最新技術の習得により、次代を担う農業土木技術者の育成に有効であると考えられる。

また、これらを実証すべく、遊びに来た卒業生の声を下の表にまとめる。

遊びに訪れた卒業生（農業土木系就職）の声	
A君	測量会社は想像より楽しく、やりがいがある。
B君	仕事が学校での実習と同じ、又は続きのよう。
C君	CAD、丁張りは、ある程度やっておくと良い。
D君	授業にしっかり集中しておくべきだった。
E君	この学科で良かった。

この他に、農業土木系へ就職した卒業生は離職率が少なく、逆にそれ以外の企業へ就職した卒業生が農業土木系の企業への転職が多いといった情報も得ることができた。これらは正に現場で感じた一番身近な貴重な意見であり、これらの声を在校生に伝える義務がある。

Ⅵ　課題

日本の農業を守るため、農業土木の技術者を育成するために、中学生、更には小学生の農業土木についての理解を高め、本学科へ入学を希望する中学生を増やすことから始めなければならない。卒業生の声にもあるように、「この学科で良かった」と言える教育活動を継続し、また、農業土木技術者の重要性について中学生へ話す機会を設け、農業土木のスペシャリストへの意識を高めてもらう努力が必要であると考える。

Ⅶ　おわりに

失敗を恐れないことは、学習指導要領の理念である『生きる力』を育てるために非常に重要なことである。しかし、ドローンのように、失敗の種類と程度によっては大事故につながりかねない。指導する側がそれを恐れすぎて、生徒の積極的な行動を抑えてしまいそうな場面もあった。生徒の能力を見極め、それを信じ、失敗しても良い環境づくりをしていくことも教育の場では大切であると、生徒に教えられたように感じられ、改めて考えさせられた。そして、生徒が生きる力を身に付けるには、指導者が教え過ぎず、与え過ぎないことで、生徒自ら考え、動くことも実証された。

現代社会は目まぐるしく発展し、次々と新しい技術や機械が登場する。教育の場では、それに後れを取らないよう、常に情報収集とスキルアップを心がけ、社会のニーズに適応する人材を育てる義務があると考える。基礎・基本から応用、新技術の習得を経て、地域や社会の健全で持続的な発展を担う農業土木のスペシャリストを今後も教育の発展を踏まえて努めていきたいと考える。

ドローンによる教育活動の実現には、公益財団法人ベイシア21世紀財団、及び公益信託サントリー世界愛鳥基金による助成により可能となりました。心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。また、ドローンに関する助言、指導、水路の点検や補修の講義、指導にて多くの方々に大変お世話になりました。その全ての方々にこの場を借りて御礼を申し上げます。

写真：水路補修後の集合写真

Ⅷ　参考文献

○　高等学校学習指導要領
文部科学省（平成30年3月公示）
○　UAV（ドローン）を用いた公共測量マニュアル（案）
国土地理院（平成28年3月制定）

優　秀　賞

《学校部門》

ふるさとを愛し、夢や希望をもち、協働しながら成長する生徒の育成

～「株式会社松野中学校」の取組を通して～

愛媛県北宇和郡松野町立松野中学校
校長　平野　昌稔

1　はじめに

松野中学校のある松野町は、愛媛県南西部の宇和島市から東へ約 20km、高知県との県境に位置する。四季折り折りの美しさを見せる滑床渓谷や国指定の重要文化史跡河後森城趾、俳人芝不器男記念館等、自然と歴史、文化の香りに包まれた町である。このような自然や文化と共生し、心豊かで思いやりのある町「人心緑化の町」を宣言して、教育を推進している。また、平成 17 年の「平成の大合併」の際は、隣接市町と合併せず、単独で生き残る道を選択した県内最少人口の町である。町の活性化に向け、行政と地域住民が一体となり、「森の国まつの創生」に知恵を絞っている。

そのような中で、松野中学校では、地域創生をテーマとする総合的な学習の時間 (以下「総合」) に取り組み、地域の担い手となる資質・能力の育成や将来仕事をする上で必要な発想力、コミュニケーション能力、課題対応能力等の育成に努めようと考えた。

2　主題設定の理由

本校は町内唯一の中学校で、生徒数 92 名の小規模校である。かつて、地域と連携した環境教育も進められ、広い敷地の中には町の特産物である桃や茶の畑もある。加えて、10 年以上前に、シイタケの「ほだ場」もつくられた。そこには、冬を迎えると、毎日、10 ～ 30 個のシイタケが収穫される。

生徒は、小学校から自然と親しむ学習や地域学習を積み重ね、地域をより深く学び、地域を大切にしようとする心が育ってきている。

しかし、地域の自然・歴史の魅力や産業の特色については学習しているものの、ふるさとの課題や今後の在り方については、十分に考える機会を得ていない。

そこで、本校では 3 年前から町政の動向を踏まえ、総合を見直すこととした。特に、3 年の総合では、シイタケ栽培と町の創生を結び付け、学習を進めることとした。また、起業家教育を導入し、シイタケを扱う仮想の会社「株式会社松野中学校」を設立し、生徒自身にこの会社を経営させることにした。この活動を通して、地域創生という夢や希望をもって、仲間とともに協働しながら成長する生徒の育成つながると考え、本主題を設定した。

3　研究の仮説

⑴　仮想の会社を起業させ、生徒自身による会社経営を経験させれば、自己理解を促したり、自己の役割を強く自覚したりし、協働して課題解決に取り組む生徒が育つであろう。

⑵　地域創生を考える指導計画等を整え、地域創生につながる本物体験を取り入れた学習を工夫することにより、ふるさとへ貢献しようとする生徒が育つであろう。

4　研究内容

⑴　株式会社設立への組織体制づくり
　ア 株式会社設立懇談会・運営委員会
　イ 指導計画等の見直し
⑵「株式会社松野中学校」の活動
　ア 職業調べ
　イ「株式会社松野中学校」の設立
　ウ 社員研修
　エ 決算とまとめ
⑶　系統的・組織的な指導体制づくり
　ア 1・2 年生の取組
　イ 新たな体制づくり

5　研究の実際

⑴　株式会社設立への組織体制づくり

ア 株式会社設立懇談会・運営委員会

「株式会社松野中学校」を設立するに当たり、行政、地域、関係機関等による株式会社設立懇談会を行った。この会が基盤となり、年度末に運営委員会を実施し、成果や課題を共有している。目的等が共有でき、学校と地域とのよりよい連携・協働体制づくりにつながっている。「社会に開かれた教育課程」という観点から、学校の教育計画の改善に地域の意見を反映させること

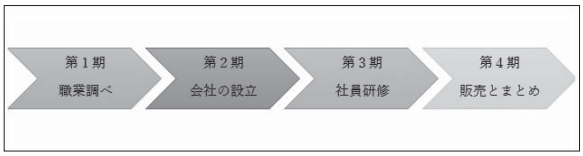
は有意義なことと考える。

イ「総合的な学習の時間」の見直し

地域創生をテーマとする総合を実施するため、全体計画や年間指導計画を見直した。全体テーマを地域創生と設定し、松野町の抱える課題をテーマとし、1年「環境」、2年「福祉」、3年「ふるさと」とした。3年の総合においては、起業家教育を導入し、起業家的な資質能力の育成に努めることとした。具体的には、3年生全員が、松野町の特産物であるシイタケを取り扱う「株式会社松野中学校」を起業することから始まる。社長や部長も生徒の中から選び、生産から販売、決算に至るまでの会社経営を生徒たちが行う。会社の活動を通して、自分の役割の意味や価値、自分とその役割との関係性を見出していくことにつながっている。

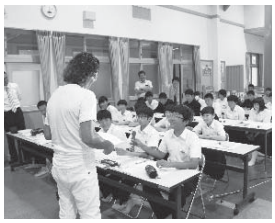
⑵「株式会社松野中学校」の活動

この会社の活動は、下の図のように、大きく4期に分かれる。第1期は「職業調べ」、第2期は「会社の設立」、第3期は「社員研修」、第4期は「販売とまとめ」である。それぞれの活動に地域創生という系統性や関連性をもたせ、地域の外部人材や関係諸機関との連携を強化し、課題解決型学習や体験的な学習を積極的に取り入れている。

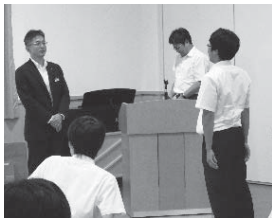


ア　第1期　職業調べ

第1期は、様々な職業を調べていく学習である。職業について調べるだけでなく、町内の社長や銀行支店長、地域創生の中核を担っている方やシイタケ生産者から直接話を聞いたり、質問したりした。起業や会社経営、地域創生やシイタケの管理などについて学び、「株式会社松野中学校」の設立に向けて意欲が高まっていく。起業や会社経営のあり方については、愛媛大学社会共創学部の学生がコーディネートし、考えを深めることができた。


【社長講演】

【創生課長講演】

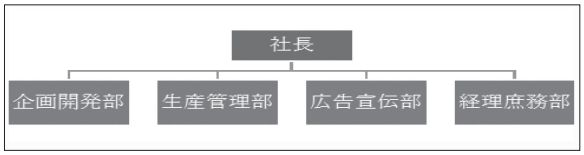

【銀行支店長講演】

【愛媛大生の支援】

イ　第2期「株式会社松野中学校」の設立

第2期は「株式会社松野中学校」入社式とそのための事前・事後学習である。

会社の設立に当たって、まず、社長選挙を行った。社長候補が学級の中でプレゼンテーションを行い、会社経営の理念や会社の成長に必要なことを訴える。その後、社員全員による選挙を行い、社長が決定する。下の図のように、会社は、社長の下、4部構成である。協働体制が整い、目標達成に向け、一体感が増していく。



入社式は、株式会社設立運営委員会の参加者も来賓として参加いただき、盛大な式となっている。社訓や社員の所属部も発表され、会社経営の成功に向けての意欲が高まっていく。

【入社式】

【社長所信表明】

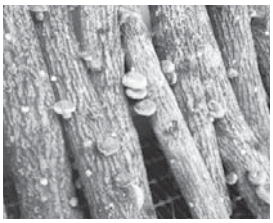
入社式後、部長を中心に部内会議を行う。部の活動目標や活動計画を立て、より具体的な活動の見通しが立ち、活動意欲がさらに高まる。

ウ　第3期　社員研修

第3期は、社員研修と称する職場体験学習である。株式会社から離れての出向研修である。松野町内外の事業所で研修し、望ましい職業観や勤労観の育成につながっている。

エ　第4期　販売とまとめ

第4期は、株式会社の商品を販売し、実社会と関わりをもつ学習である。シイタケ販売に向けて、各部の活動が始まる。そして、販売後の決算と1年間の活動を振り返る学習である。


【シイタケほだ場】

【収穫】

【社員会での提案】

【トップセールス研修】

【袋詰め】

【ポスター、幟旗】

企画開発部では、販売戦略や市場調査、価格決定案の作成、他の野菜の販売計画等について話し合い、社員会議で提案した。生産管理部では、シイタケの収穫に向けての温度管理や散水、収穫期には毎朝、採り入れを行う。広告宣伝部では、ポスターの制作、ちらしやレシピ作りを行う。経理庶務部は、収支予想や商品の袋詰め、販売に必要な道具作成等を担当する。社長は、部長会や社員会の取りまとめだけでなく、トップセールス研修も行う。具体的な活動を通して、自己有用感がさらに高まっていく。

【第1回販売】

【第2回販売】

【第3回販売】

販売活動は、協働意識を高めることにも有効である。販売は文化祭販売や町イベント時、産直市等で行う。実社会とふれあい、実際に活動する中で、今まで培ったコミュニケーション能力や課題対応力等が試される。

決算については、経理庶務部が担当し、社員会で報告する。過去2年間の収支は赤字である。決算後の社員会では、赤字経営の克服についての意見交換が行われる。社員が同じ目標に向けて、意見を練り合い、高め合い、深め合い、課題解決への道を話し合う。経営改善のため、販売時期、価格設定、品質、商品の供給量と供給時期へのテコ入れの必要性等が主な意見として出された。

決算報告後の生徒感想

初めて本格的にシイタケを育て、包装し、販売まで自分たちで行うことに不安があった。しかし、みんなと協力し「お客様にどうしたら喜んでもらえるか」を考えることで相手を思いやる気持ちや相手を理解しようとする気持ちが強くなった。また、「利益を上げるためにはどうすればよいか」を考えることにより、経済の仕組みや経営感覚の大切さを実感した。その先にある地域創生の難しさややりがいも感じた。この学習により、ふるさと松野のたくさんの人に支えていただき、人間としても成長できたことに感謝したい。

(3) 系統的な組織体制づくり

ア　1・2年生の取組

3年生での「株式会社松野中学校」の取組が、松野中全体としての系統性、継続性をもたせた活動となるよう、他学年においても意識した取組を行っている。

【ほだ木への植菌】

【120本の原木】

【ほだ木起こし】

【修学旅行での企業訪問】

1年生では、2月に植菌し、校内にある「ほだ場」へ原木を寝かせる。2年生では6月に、シイタケ菌の成長を促進するため、「ほだ木起こし」を行う。他にも、修学旅行で、企業見学を取り入れている。事前・事後学習を通して、3年生で行う起業家教育への意識を高めることができている。

また、3年生になる生徒に対して、平成28年度の

取組をベースとした「株式会社松野中学校の１年間」という手引きを作成し、見通しをもって活動し、継続的・発展的なものとなるように努めている。

イ　新たな体制づくり

今年度は、右の図のようにえひめジョブチャレンジＵ－15と関連させ、既存の活動に加え、5日間の出向職場体験と情報発信が主な学習内容となるよう学習体制を再編成した。

6　成果と課題

起業家教育を取り入れた「株式会社松野中学校」の取組は3年目である。生徒の感想やアンケート、年度末の地域の関係者との運営委員会での協議を通して、成果と課題も明確になってきた。

⑴　成果

成果として、生徒は松野町のよさを再認識し、将来の松野町を担う意欲や具体的な見通しについて考えることができた。また、起業を通した「地域創生」という目標を明確にした取組により、仲間と協働して、よりよい地域をつくっていこうとする意欲が高まった。中でも、地域や社会に貢献する職業人から直接話を聞いたり、質問したりすること、地域の特産物を扱う会社経営の実践を知ること等を通して地域や社会のために役に立ちたいという生徒が多くなった。さらに、会社の活動を通して､生徒は自分の価値や役割を自覚し、その喜びや自己有用感を感じることができた。このほか、体験的な学習の中で、多くの人と接する機会をもち、コミュニケーション能力も向上した。

全国学力・学習状況調査における質問紙の結果において、27～30年度の結果から、年度間で差はあるものの「地域や社会の問題に関心がある」「将来の夢や目標がある」は全国平均と比べて高い数値を示している。地域の課題に目を向け、地域人材をはじめとする地域資源を活用したことにより、地域に誇りをもち、将来の夢や希望をもって、地域や社会に貢献しようとする生徒が育ってきている。

⑵　課題

課題として､生徒は地域のよさを実感しつつも､「地域創生」の難しさにも直面している。よりよい課題解決につなげるために、総合と教科との関連を見直すほか、多様な人材を活用したり、小中高と連携した取組につなげたりして、解決の糸口が見えるカリキュラム構成も考えていく必要性がある。会社の活動についても、よりよい活動となるようＰＤＣＡサイクルを有効に機能させていかなければならない。また、会社経営において、多角化経営や販売方法を工夫するなど、経営感覚を磨く必要性がある。そのための組織体制づくりを再検討していかなければならない。

加えて、人口減少社会の中で、地方からでもＩＣＴを有効に活用することにより、地域創生につながっていくことを実感させることも大切である。

また、この学習は、総合や課外の時間といったごく限られた時間の中での活動である。シイタケの収穫や販売は課外活動となる。気象条件にも大きく左右され、予定どおりには進まないことが多い。限られた時間の中で効果の上がる学習となるよう工夫していく必要もある。

7　おわりに

「株式会社松野中学校」は、名前が先行し、幅広く解釈されることがある。新聞等を目にした人からは、よく会社の経営状態について質問される。しかし、この学習の目的は、「仲間との協働による地域創生への意欲向上」等である。確かに、経営改善を考えさせることは大きな課題ではあるが、主な目的ではない。学校と家庭・地域等のよりよい連携・協働により、生徒の人間的な成長を支え、地域づくりの在り方を考えさせていかなければならない。3年目となり、学校や地域の中で定着しつつある取組となってきた。自分の生き方や地域の在り方を深く考え、人間的な成長や基礎的・汎用的な能力の伸長につながっているという確かな手応えも感じている。今後とも、よりよい改善を加え、継続性・発展性のある取組をしていきたい。

優　秀　賞

《学校部門》

外国語に親しむ児童を育てる「主体的・対話的で深い学びの実現」を目指した指導法の研究

熊本県人吉市立西瀬小学校
校長　吉村　英亀

1　主題設定の理由

平成 29 年 3 月 31 日に小学校学習指導要領の改訂が行われ、平成 32 年度から新学習指導要領完全実施となり、本年度は移行措置期間を迎えている。本校は、平成 28 年度～ 30 年度文部科学省より教育課程特例校（英語教育）の研究指定を受け、最終年度としての取組を進めている現在である。新学習指導要領の改訂の趣旨や内容を踏まえ、研究推進校として他校に参考としていただけるような外国語・外国語活動の授業づくりや教育活動に新しい取組を取り入れながら研究及び実践を進めてきた。

研究主題として「外国語に親しむ児童を育てる『主体的・対話的で深い学びの実現』を目指した指導法の研究」と位置付け、学校総体となった取組の一端を具体的に以下に述べてみたい。

2　研究の仮説

外国語・外国語活動を通して、「主体的・対話的で深い学びの実現」を目指し、研究の視点を位置付けながら授業改善に取り組むことで、自ら学び自ら考え、生きて働く知識・技能を身に付けた児童を育成することができるだろう。

3　研究の視点

⑴　主体的な学びを実現する指導法の工夫

ア　児童の興味・関心を引き出すような題材の設定や教材・教具の工夫

イ　既習事項を想起させたり、見通しを持たせたりするような導入の工夫

ウ　児童自らが見通しをもって取り組んだり、自己の学習活動を振り返ったりすることができる学習過程の工夫

エ　本当の自分の考えや気持ちを表現させる学習活動の工夫

⑵　対話的な学びを実現する指導法の工夫

ア　対話的な学びを支える学習態度の育成

イ　他者と伝え合うことで、自分の考えや気持ちを広げたり深めたりする言語活動の工夫

ウ　対話する目的や内容に応じた伝え合いの場の工夫

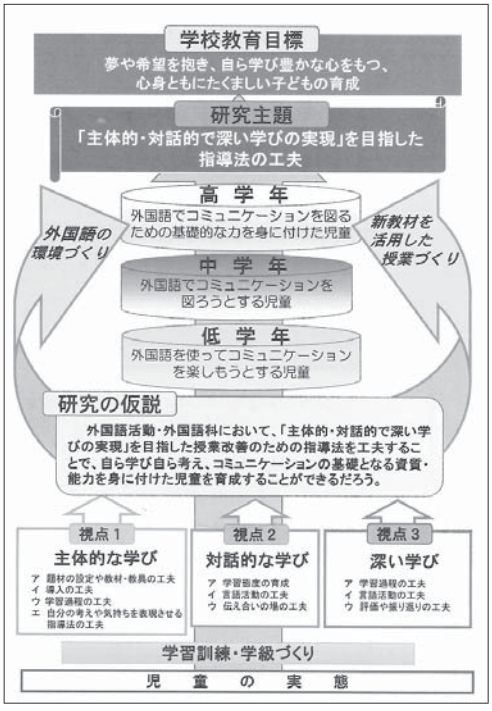
⑶　深い学びを実現する指導法の工夫

ア　学びの深まりをつくり出すために、習得と活用を効果的に位置付けた学習過程の工夫

イ　必要な言語材料を自ら選び、相手に伝わるように思考・表現する言語活動の工夫

ウ　学びの深まりを実感できる評価や振り返りの工夫

4　研究の構想図　　資料　構想図



5　研究の実際

⑴　主体的な学びを実現する指導法の工夫

ア　映像資料の活用

学習活動「Let's Watch & Think」において、Let's Try! 及び We Can! のデジタル教材は、ネイ

写真　ALT の映像

ティブ・スピーカーの発音に触れたり、世界各地の映像や動画を見たりすることができるため、児童の興味・関心を高めることができる。

本校では、それらの活用を図るとともに、ＡＬＴ不在の場合に、事前に収録した映像を、ＡＬＴから児童や担任へのメッセージとして提示する場面設定を行った。児童の好奇心を喚起し、担任の呼びかけにより課題解決に向かう児童の主体的な学びを促すことができた。

イ　スモールトーク（Small Talk）

これは、導入時において、主に高学年の児童同士がやり取りをしたり、教師の話を聞いて、既習事項を想起したりする学習活動である。例えば、既習の誕生日を尋ねたり答えたりする表現を想起させるために、教師が自分の誕生日を紹介したり児童に誕生日を尋ねたりする場面などがある。つまり、児童の身近な話題について、既習表現を繰り返し使用する機会を保障し、その定着を図るねらいがある。

スモールトークの場面

本校では、低・中学年においても、ショートトーク（Short Talk）と名付けて取組を進めている。

ウ　学習過程の工夫

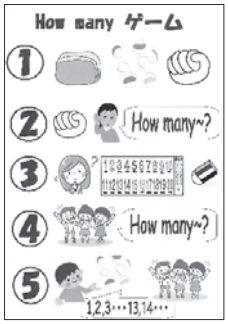
本校では、外国語活動・外国語科の目標を踏まえ、CAN-DO リストと年間指導計画を関連付けた一覧表を作成した。　**資料　年間指導計画**

西瀬小学校　第４学年　　年間指導計画（平成３０年度）

領域				聞くこと	話すこと（やり取り）	話すこと（発表）
CAN-DO				・ゆっくりはっきりと話されると、身近で簡単な事柄について、基本的な表現が分かる ・アルファベットが発音されるのを聞いて、どの文字か分かる。	・自分のことや身の回りの物について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝えることができる。 ・自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、質問したり質問に答えたりして、1～2往復程度のやり取りができる。	・自分のことや身の回りの物について、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができる。 ・人前で実物などを見せながら、自分の考えや気持ちなどを2～3文程度で話すことができる。
月	単　元	時	具体的な内容・扱う表現	評価規準	評価規準	評価規準
4月 5月	Unit 1 Hello, world! 世界のいろいろな言葉であいさつしよう	2	挨拶をする Hello. Good {morning / afternoon / night} Goodbye. See you. 自己紹介をする I like {strawberries}.	・友だちの好みなどを聞き取っている。	・友だちと挨拶をして、自分の好みなどを伝え合っている。	
5月 6月	Unit2 Let's play card. 好きな遊びをつたえよう	4	天気を言う How is the weather? It's {sunny / rainy / cloudy / snowy} 遊びに誘う Let's {play cards}. Yes, let's. Sorry. 動作 Stand up. / Sit down. / Stop. Walk. / Jump. / Run. / Turn around.	・天気や遊びの言い方を聞き取っている。	・好きな遊びについて尋ねたり答えたりして伝え合っている。 ・相手に配慮しながら、友だちを自分の好きな遊びに誘っている。	

この計画に沿い、児童に単元のゴールや本時の目標（Today's Goal）を示すことで、児童は見通しをもって取り組むことができる。

ゲームの流れ



また、Activities では、ゲームを紹介するために、流れを示した用紙を提示することで児童が安心して取り組むことができる一つの手立てになると考えた。

エ　自分の考えや気持ちを表現させる取組

主体的な学びを導くためには、誰かになりきって何かを話したり、架空のことを話したりさせるだけでなく、本当の自分自身の考えや気持ちを表現させることが大切である。

4年生の単元「What time is it? 今、何時？」において、日課・時間には〔wake‐up/breakfast/study/lunch/homework〕time などがあり、言葉から受けるイメージとしては同じ様子を思い浮かべがちだが、自分のお気に入りの時間を児童一人ひとりの思いでジェスチャーに表すように求めると、自分の考えをジェスチャーに取り入れながら表現させることができた。

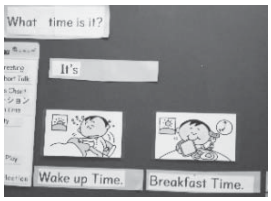


写真　　板書の例

(2)　対話的な学びを実現する指導法の工夫

ア　対話的な学びを支える学習態度の育成

児童が対話を続けるための基本的な表現を身に付けさせるために、対話後「相手の言ったことを繰り返して言えたか」「一言感想を言うことができたか」等を確認し、対話を続けるための基本的な表現に意識を向けさせている。また、本校では毎週1回実施しているイングリッシュタイムや年5回実施しているイングリッシュフェスタでは、リアクションについてスキルカードを用いたり、文字や音に親しませるために ABC サウンドを行ったりして練習する場を設けている。

リアクションの練習

イ　他者と伝え合うことで、自分の考えや気持ちを広げたり深めたりする言語活動の工夫

5年単元「What would you like?　ランチメニューを紹介しよう」では、客や店員になりきって、丁寧な言い方で注文を尋ねたり答えたりする場面を設定した。ロールプレイの「Let's Go to Restaurants」と題し、デモンストレーションを見せて教師の説明を行った。その後、客役と店員役に分かれて各児童がロールプレイを行った。児童は、実際に友達とやりとりする中で、対話をつなぐ必要な語彙やリアクション等を確認することができた。

ロールプレイの様子

ウ　対話する目的や内容に応じた伝え合いの場の工夫

1年単元「What's color? 色であそぼう」では、児童同士のやりとりができるだけたくさん行われるようにするために、「Let's Play」の学習活動として、かるた取りやカラービンゴゲームなどを取り入れた。このことにより、児童は次は何色が出るかなとわくわくしながら英会話で楽しむことができた。

かるた取りの様子

(3)　深い学びを実現する指導法の工夫

ア　学びの深まりをつくり出すために、習得と活用を効果的に位置付けた学習過程の工夫

資料　単元の指導計画の一部

第1時 学習活動	第2時 学習活動	第5時 学習活動
① Small Talk ② Let's Listen ③ Let's Practice 登場した職業 ④ Let's Play ポインティングゲーム ジェスチャーゲーム ⑤ Let's Write なりたい職業を選んでカードに書き写す。	① Let's Chant ② Let's Practice ③ Let's Play ポインティングゲーム ジェスチャーゲーム ④ Let's Write 自分がなりたい職業を夢シートに書き写す。	① Let's Chant ② Small Talk ③ Let's Play キーフードゲーム ④ Let's Speech 「将来の夢」スピーチ クラスを二つに分け小グループ内で一人ずつスピーチを行う。 ⑤ Let's Write

これは、単元の指導計画6時間中の第1・2時及び第5時を取り上げたものである。単元の前半ではチャンツやゲームを通して児童が基本的な表現に十分慣れ親しむ時間を多く確保し、単元後半にはスピーチ等を取り入れ、これらの表現を習得させるコミュニケーション活動へとつないでいくようにしている。

イ　言語材料を自ら選び、相手に伝わるように思考・表現する言語活動の工夫

上記のアで取り上げた6年生単元「What do you want to be？　夢宣言をしよう」では、自分のなりたい職業を伝えた上で、その理由を尋ねた友達に「I like ～」「I can ～」を用いて説明する授業展開を行った。

グループ学習の様子

この授業では5～6人のグループをつくり、聞く側が「What do you want to be？」と尋ね、発表者は「夢シート」を見せながら答えるやり方で学習を進めた。

児童はそれぞれ既習の表現を用いながら「将来の夢」スピーチを行うことで、自分や相手の将来の夢について、意欲的に伝えよう、聞こうとすることができた。

ウ　学びの深まりが実感できる評価の工夫

単元を通して評価として行っているのは、単位時間の終末に行っている、どんな学びや気づきがあったかを出し合う振り返りの時間と、単元を通しての学びを確認する評価シート等がある。

資料　評価シート

年間を通して行うのは、学習指導要領に示されている「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に沿い、年間を通して指導と評価の一体化を図る中で、発表、グループでの話し合い、作品の提出等の多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価等を取り入れていく必要があると考えている。

(4)　西瀬小の学校総体となった日常的な指導

ア　イングリッシュタイム

毎週水曜日の1回、朝の20分間を週時程に

位置付けて取組を進めている。

取組内容は、ＡＢＣサウンド、既習事項の確認、コミュニケーションタイム、文字の読み書き等、児童の発達段階に合わせている。児童にとって英語に慣れ親しむ楽しい時間となるように工夫している。

イングリッシュタイム

イ　イングリッシュフェスタ

年に５回、45分間の全校集会イングリッシュフェスタを実施している。企画・運営は英語委員会が行っており、英語の歌、英語委員会によるデモンストレーションの後、全児童交流としてのコミュニケーションタイム、縦割り班による英語のレクリエーション等を行っている。児童が楽しみにしている集会である。

イングリッシュフェスタ

ウ　給食時の校内放送

給食時間の校内放送では、毎週水曜日に研究主任が企画運営している英語の放送を行っている。ＡＬＴへのインタビュー、英語委員会の児童の放送、児童へのインタビュー等、タイムリーな話題を取り上げている。

校内放送の様子

6　研究の成果と今後の課題

これまで、本校は平成27・28年度熊本県教育委員会より「小学校英語教育研究推進校」の指定、平成28～30年度は文部科学省より「教育課程特例校（英語教育）」の指定を受けて研究に取り組んできた。

この間、年度ごとに研究発表会を開催し、熊本県内外からの参観者をお迎えし、研究の取組に対しいろいろな感想や意見をいただきながら、改善を図って取組を進めてきた。

本年度は、平成32年度からの新学習指導要領完全実施につながる移行措置期間であり、昨年度末に出された教科書教材は、その内容や語句が大幅に増加しただけでなく、関係の映像資料のレベルが一段と高くなり、これまでの外国語・外国語活動の授業を根本から見直す必要があった。このことが本校にとっても一番悩んだ点である。そこで、職員間で文部科学省から出された学習指導要領やガイドブックを何度も確認したり、指導主事等に尋ねたりしながら研究の視点を見出し、授業改善を進めていった。

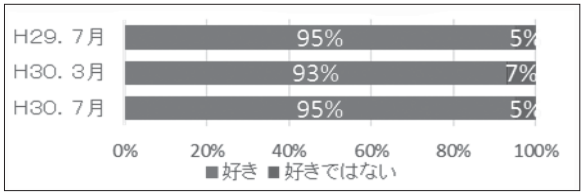
成果としては、何より職員がそれぞれ役割を分担しながら、一丸となって研究に取り組むことができたことと、児童が英語に関するいろいろな教育活動に意欲をもって取り組み、多くの児童が「英語の学習が好き」と感じていることであると考えている。（以下の児童アンケート結果参照）

本校の研究は最終年度を迎えており、平成30年11月７日（水）に研究発表会を開催する予定である。

新学習指導要領の趣旨・内容を踏まえて研究を進めてきたものの、まだまだ十分ではない点が多くあるものと考えられる。参観される方々から多くの示唆をいただき、謙虚に受け止めながら、今後の教育活動への課題として生かしていきたい。

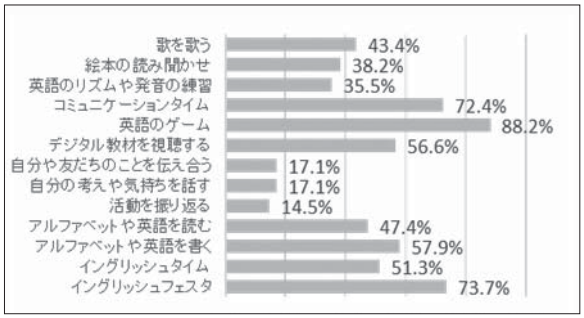
◆児童アンケートの結果から

○英語の学習は好きですか。　資料　集計用グラフ



○英語の時間で楽しいと思えることは何ですか。

【高学年】（複数選択可）　資料　集計用グラフ



7　参考文献

小学校学習指導要領解説　外国語活動・外国語
小学校外国語活動・外国語　研修ガイドブック
（文部科学省）

優　秀　賞

《個人部門》

生徒の苦手意識を克服するための指導の工夫

～チーム英語科としての対応～

栃木県立黒羽高等学校
教諭　吉澤　尚樹

1　はじめに

「英語は、読まないし話せないし、できないから嫌い」「将来、英語を使う職業に就くことはないのに、英語なんてなぜ勉強するのだろう」「私には無理だけど、英語が話せたらかっこいいな」

生徒たちは英語に対して様々なイメージを持っているが、概して消極的な意見を耳にすることが多かった。本校の生徒は、中学校時代に少なくとも一度は英語につまずいた経験をもち、英語を学習することに対して消極的で、コンプレックスを抱えている生徒が多い。また、中学校からこれまでの授業内容について聞いてみると、訳読中心の授業を受けてきたことが多かった。それゆえに、生徒たちの多くは「英語の授業＝教科書の文章を日本語にする」というイメージをもっており、英語の授業が苦痛と答えている。英語に苦手意識を持っている生徒に、同じような授業を続けることは、英語の授業に対してさらに抵抗感を持たせることになる。

2　主題設定の理由

この状況に鑑み、英語を使って自身の気持ちを伝えられたという自信を持たせることによって、少しでも英語への抵抗感を減らすことが急務であると考えた。生徒が英語を話すことに抵抗がないようにするために、ICT などの力を借りながら、段階的に、授業中に small talk などの即興性を高めるスピーキング活動や、学んだ内容についてのプレゼンテーション活動、interaction を大切にした活動を取り入れることにより、積極的に英語を話してコミュニケーションをとる姿勢とその楽しさを身につけさせたいと思った。

本校では、can-do リストにおいて卒業時の目標を「英語を通じてコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、話すこと、書くこと、聞くこと、読むことの基礎的な能力を養うとともに、言語や文化に対する理解を深める。」と提示している。ゆえに、ペアやグループ単位で英語を用いて意見を交換したり、発表したりする言語活動を通して、生徒たちの interaction が活発になるような授業を目指していきたいと考えた。また、一人の教員の実践だけではなく、多くの教員が意見を出し合い、授業内容を共有するように、１つのチーム（組織）としてこれらの問題に真摯に向き合う必要性があると考えた。さらに、お互いに協力することで同僚性を高め、教員が互いに協力して楽しい授業を作り上げる姿を生徒に見せることにより、少しでも英語が楽しいというイメージを生徒に与えられるのではないかと考えた。

3　研究仮説

上記の主題設定の理由を元に、以下のような仮説をたてた。

> 英語科教員が組織的に同じベクトルで指導し、お互いにアイディアを出し合い、一緒に教材研究をして意見を共有し、教員自らが「英語で communication をとることの楽しさ」を一丸となって生徒に示していくことで、生徒は「英語で communication をとること」を楽しむだけでなく、とりわけ speaking の分野において、interaction が活発になり、英語を少しでも好きになり苦手を克服することができるであろう。

4　実践方法

⑴　研究対象の設定

仮説の検証対象として、３年生のＡコース４クラスを設定した。Ａコースは、就職や専門学校進学を目指す生徒が所属している。本校は、各学年４クラスあるが、１・２年生までは習熟度授業を実施しているために、２クラスを３クラスに分けて授業を実施している。３年生になると、ＡコースとＢコース（４大・短大進学を希望する生徒が所属している類型）で分かれて授業を各クラスで実施する形態をとっている。

また、昨年度までクラス編成をする際に、習熟度に応じて advanced class １クラス・middle class １クラス・slow learner class １クラスの３つにレベルを分けて行っていた。（現在の１・２年生は advanced

class 1クラス、second class 2クラスに分けて実施している)。4大・短大進学を希望する生徒を交えてクラス編成をしているために、どうしてもAコースの生徒は、どのクラスにおいても、advanced class・middle class出身者が少数、slow learnerクラス出身者がほとんどという、英語に対して非常に苦手意識を持っている生徒が多い集団である。しかし、昨年度のslow learnerクラスは比較的communicativeな授業を行っていた経緯もあり、英語を発することの抵抗感は少なく、英語の挨拶などは大きな声でできるし、読める単語があれば大きな声で音読することもある。しかし、英語に苦手意識を強く持っている上に語彙力が少なく、思ってもなかなか発信できないということに課題がある。

このような状況に鑑み、強い苦手意識を持っている3年生Aコースの生徒に、英語科の教員が「チーム」として対応することにより、すこしでも苦手意識を克服し英語が好きにすることが急務であると考え、3年生Aコースを設定した。

また、3年生Aコースはそれぞれのクラスで授業が実施されるので、4クラスそれぞれに以下の表のように担当の教員を配置することができた。1学年4クラスを4人で担当するメリットが2つある。まずは、授業を進めていく上でのアイディアが4人で共有することにより、1人で担当する場合の4倍、2人で担当する場合の2倍と膨らみ、よりよい授業を生徒たちに提供できることにある。また、別の時間割で実施されるために、空き時間には授業をお互いに見せ合うことができるということにある。

1組 (19人)	2組 (19人)	3組 (26人)	4組 (27人)
小野澤	中野内	臼　井	吉　澤

仮説の検証のために年度当初に授業開きの際に、仮説の検証と、英語学習に対する意識を調査する目的で、以下のような簡単なアンケートを行った。

英語の授業は好きですか？　　好き・嫌い

質問の回答として、「好き」と答えたのは17.9%、一方「嫌い」と答えたのは82.1%で8割を超える生徒が英語の授業に抵抗を感じていることがわかり、この抵抗感をできるだけ早めに払拭することが急務だと考えた。

⑵　実践にあたって　－プロジェクト会議－

時間割係に協力してもらい、英語科のスタッフ全員が空き時間になる時間を2時間作っていただいた。この時間を「プロジェクト会議」と題し、毎週実施している。プロジェクト会議は、主に「授業デザイン」と「試験作成」である。一緒に授業の進め方を議論し、ワークシートやスライドの案を作成する。それから、一人が教材を作成するのではなく、それぞれのLessonごとにワークシートを作成する担当者を分担した。担当者は、プロジェクト会議の内容をまとめ、ワークシートやスライドを作成し、全員が同じ教材で授業を実施するという仕組みである。Lessonの担当者は、次回の試験作成のメインとなる教員が担当することにした。

【プロジェクト会議の様子】

「プロジェクト会議」では、協同で教材研究をすること、試験を協同で作成することだけではなく、実際に授業を実践してみての成果や反省を話し合ったり、授業で成功したことや悩んでいることなどをお互いに共有したりすることで、同僚性を高めるよい時間となっている。

⑶　試験の工夫①　－持ち寄り制と当番制－

テストを作成する際には、どうしても問題の問い方など、作成担当の個性がでてしまうことがよくある。また、授業では訳読は一切せずに、スライドや生徒とのinteractionで内容を理解させている。interactionを大切にしたいという想いがあるのはもちろんのこと、訳読をすることこそが、生徒が一番抵抗をもっている作業であるからである。授業で訳読をしないので、「和訳しなさい」という問題を聞くわけにはいかない。生徒が授業で理解したことが活かされる問題を作る必要があった。そこで、4人で担当しているメリットを活かし、問題を1人で作成するのではなく、4人それぞれがsectionごとに7個程度の和訳無しの工夫した問題を作成したものを持ち寄り、プロジェクト会議で協議し問題を作成していくことにした。同じ箇所を問う場合でも、教員によって問い方が違うことで、さまざまな作成方法をお互いに共有することができた。

また、以下の2つのテストの例のように、一切和訳問題を出すことなく、授業中のinteractionの中で考

えたり、まとめた内容を出題したりしている。また、Daily K chan(K ちゃんは本校のマスコットキャラクターである) と題した架空の英字新聞のコーナーとして対談形式でまとめさせる場面設定を工夫したり、日時を整理させるためにカレンダーなどの図表を多く用いて内容を整理する問題を多く出題することで、題材の深い部分までの内容理解を図る試験を作成することができた。

4. 次のものは、下線部(B)についてまとめた学生新聞の一部である。空所に入る語（①～⑤）を書きなさい。選択肢のあるもの（(ⓐ、(ア)）は、最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

Daily K-chan For Students

Kurobane SHS English Department

What is Nobel Prize?

● His name is (①　　).
● He (②　　) the Nobel Prize with his (③　　).

How many fields are there in Nobel Prize?

(④　　) fields!

Chemistry / Physics / Biology / Physiology or Medicine / (⑤　　)

People who contributed to (ⓐ　　) in these fields can get a prize!

ア program　イ professor　ウ problem　エ progress

Why did Nobel make (⑥　　) Prize ?

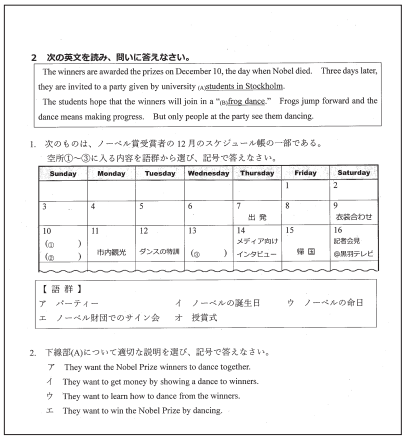
He fell in love with a woman!

Profile

She is (ア　　)

ア an angry woman
イ a popular dancer in Sweden
ウ a woman who doesn't like war or fight
エ a woman who doesn't like to work

42 years old



2　次の英文を読み、問いに答えなさい。

The winners are awarded the prizes on December 10, the day when Nobel died. Three days later, they are invited to a party given by university (A)students in Stockholm.

The students hope that the winners will join in a "(B)frog dance." Frogs jump forward and the dance means making progress. But only people at the party see them dancing.

1. 次のものは、ノーベル賞受賞者の 12 月のスケジュール帳の一部である。空所①～③に入る内容を語群から選び、記号で答えなさい。

Sunday	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday	Saturday
					1	2
3	4	5	6	7 出 発	8	9 衣装合わせ
10 (①　　) (②　　)	11 市内観光	12 ダンスの特訓	13 (③　　)	14 メディア向け インタビュー	15	16 記者会見 @黒羽テレビ

【 語 群 】
ア　パーティー　　イ　ノーベルの誕生日　　ウ　ノーベルの命日
エ　ノーベル財団でのサイン会　　オ　授賞式

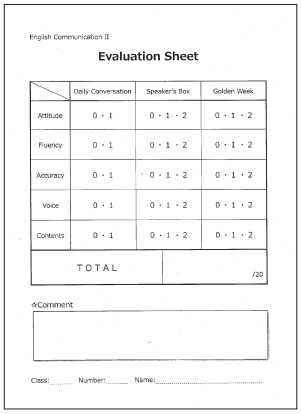
2. 下線部(A)について適切な説明を選び、記号で答えなさい。
ア　They want the Nobel Prize winners to dance together.
イ　They want to get money by showing a dance to winners.
ウ　They want to learn how to dance from the winners.
エ　They want to win the Nobel Prize by dancing.

【テストの例】

⑷　試験の工夫②　－ speaking test －

授業を始める前に、プロジェクト会議で「interaction を活発にするために、できるだけ平易な英語を使いながら、All English の授業を目指す」という目標を共有した。生徒間の interaction、生徒と教師間の interaction を通してたくさんの英語に触れさせ、「英語が使えた」という成功体験を多くさせたかったからである。そのため、授業の 3 分の 1 は “Speaking” をさせている状況から、定期試験においても “Speaking” の力をしっかり測るテストが必要であるということに直面した。

そこで、定期テストが終わった後に、実技試験として “Speaking Test” を実施した。テストの内容ももちろん「プロジェクト会議」で話し合い、採点方法もしっかりと共有した。また、4 人が別のクラスを担当しているメリットをここで活かし、自分が担当しているクラス以外のクラスを採点する方法をとった。“Speaking Test” を実施する際には、担当の教員ではない教員に採点してもらうことにより、生徒たちには、緊張をしている一方で、一生懸命に練習をし、テストを受けている様子が見受けられた。参考資料として評価の基準を統一するために作成した Evaluation Sheet を示す。Evaluation Sheet により、統一した評価をすることが可能になった。



English Communication II

Evaluation Sheet

	Daily Conversation	Speaker's Box	Golden Week
Attitude	0・1	0・1・2	0・1・2
Fluency	0・1	0・1・2	0・1・2
Accuracy	0・1	0・1・2	0・1・2
Voice	0・1	0・1・2	0・1・2
Contents	0・1	0・1・2	0・1・2
TOTAL			/20

☆Comment

Class:　　Number:　　Name:

⑸　授業の工夫　－ small talk の実践①－

生徒たちの日常生活や好きなものなどをトピックにして行った。トピックを選定する際に次の 2 つのことに留意した。1 つめは、生徒の出来事を聞くだけではなく、教師自らも自己開示をして日常生活について話せる内容を選定することである。教師のことを知りたいと思う生徒たちが多い。「週末に何をしたのか」を知りたいのはまだ理解できるが、「朝ご飯に何を食べたか」ということも small talk のトピックになり、生徒たちが教師が何を食べたのかも気になっているのには驚いた。このように自己開示をし、日々の出来事を話すことによって、生徒たちは教師が話す話の内容を知りたいという気持ちになり、質問をしてきたりするようになった。2 つめに、授業をしっかりデザインをしてトピックを選定することである。トピックの選定については、その後のテキストの内容の introduction や、メインの活動につながる内容を選定するようにした。トピックをそのときの状況に合わせたり、教科書の本文の内容に関わるものであったり、メインの活動につながるものであったりするときには small talk の効果覿面で、自然な流れでメインの活動へ進むことができた。

⑹　授業の工夫　－ small talk の実践②－

small talk の内容にゲーム性を持たせられないかと

考えたときに、Learning Resources 社からでている Speaker's Box という教材が適切であると考え、4 セット購入した。この教材は、Box の中に 4 タイプのカードがそれぞれ 20 枚ほど入っており、その引いたトピックについて talk をするというものである。それぞれのタイプは、①自分の好きなものとその理由、②写真の動物や人はこれから何をしようとしているのか、③ 2 つ選択肢があり、どちらを選ぶか、そしてその理由（ディベートの練習にもなる。たとえば Which do you want to keep, lion or tiger? など）、④写真の描写の 4 つである。small talk の内容に鑑みると、①自分の好きなもの、③ 2 つのうちの選択の 2 つのタイプを授業で実施することがよいのではないかと考えた。しかし、1 学期のうちは、2 つのものから選んでその理由を話すのはすこし高度な力を要するので①の自分の好きなものカードを使うことにした。トピックは、教師がひくのではなく生徒に引かせるようにした。自分が今日のトピックを決められるという優越感からか、今日のトピックを引きたい生徒を募ると多くの生徒が挙手をしていた。

2 学期からはミニディベートを授業で実践する前の準備段階として、9 月より③の 2 つの選択カード Box の中に追加した。トピックが生徒たちにとってとりかかりやすいものであったために、思いの外とても盛り上がっていた。なお、3 年生の授業だけではなく、それぞれが担当している他の授業でもこちらの教材を授業の introduction としての small talk で使用し、それぞれの授業で活発な interaction が見受けられる。

5　取り組みの成果と仮説の検証

4 月からチーム英語科として、4 人の教員でできるだけ生徒の英語への抵抗を減らそうと全力で取り組んできたが、どれだけ生徒の中で英語に対する意識が変わったのかを調査するために、1 年間最後の授業で、4 月に行った「英語の授業は好きですか？」というアンケートを再度実施した。結果は、78.9% の生徒が「英語の授業が好き」と回答し、4 月当初の 17.9% と比較すると、6 割強の生徒に対して英語の授業への抵抗感を軽減させることができた。このアンケート結果により、教員がアイディアを共有し、1 つの授業を作り上げることで、授業の質があがり生徒の英語への苦手意識を克服することができるという仮説を立証することができた。

6　おわりに

生徒の苦手意識を少しでも克服するために、英語で communication の楽しさを生徒に伝え、interaction が活発な授業を目指して「チーム英語科」を作り上げてきた。プロジェクト会議では、4 月当初は、アイディアが思い浮かばなかった時もあったが、5 月になる前には「この活動をすればこのような反応が返ってきそうだ」「このようなワークシートを使えば、理解が深まるだろう」「さらに内容をふかめて考えさせてみたい」「プレゼンテーションをやらせてみたい」など、ここには書き切れないほどたくさんの意見が飛びあい、50 分の時間をいつもオーバーし、放課後に持ち越し…ということが多くなった。「三人寄れば文殊の知恵」という言葉があるが、まさにその通りで、一人では考えつかないようなアイディアも共有することができた。それと同時に、4 人それぞれがプロジェクト会議で触発され、今まで以上に教材へのアンテナを張り巡らせ、「この内容は授業の small talk に使えるのではないか」「この資料は生徒が discussion する際に使える」などといった会話が、プロジェクト会議を飛び出し、職員室の中でも飛び交うようになった。すると、他教科の教員から思いがけない提案やアドバイスを受けることができ、同僚性を高めることもできたと思う。

なによりも、一番の成果は、生徒が授業中に顔を上げる機会が増えたこと。そして、たどたどしさはあるものの、ジェスチャーなどの力を借りながら英語で communication をとろうとする姿がどのクラスでも見られるようになった。校内における授業公開においても、「ここまで生徒が活き活きと授業を受けているのは久しぶりにみた」「生徒が面談で英語の授業がわかりやすくて楽しいと言っていた」という声を、多くの先生からいただくことができた。生徒たちからも、「今年になって英語の授業が楽しくなった」「自分でも英語が少しは話せるようになった」という肯定的な意見を耳にするようになった。今後もお互いに協力しながら、生徒とともに授業を作り上げいきたい。

優　秀　賞

《個人部門》

主体的・対話的に深く学ぶ「書くこと」の授業

～思わず書きたくなる課題設定と協働的な授業展開～

埼玉県新座市立新座中学校
主幹教諭　中島　　豊

1　研究主題設定の理由

本校では、平成28年度より、市の委嘱を受けて「『確かな学力』を持った生徒の育成　～わかる授業に向けた指導の工夫～」を研究主題として研究を進めている。「わかる授業」とは、本校では「学習したことを生徒たちが具体化できるようになる授業」と定義し、「知識・技能」を用いて思考・判断する中で、学びを具体的に「表現」できる生徒の育成を目指している。そのための指導の工夫として、知識を整理する過程で考えを深めたり、他者の意見や視点に触れることで考えの道筋を共有したりする指導方法の研究を行っている。

そのような中、平成28年度の県の学力調査において、私の受け持つ当時の第1学年は、国語の正答率が県平均より「－1.6ポイント」であり、特に「書く能力」に係る設問における正答率は県平均と比べて「－4.3ポイント」と非常に低かった。その後の授業の様子を観察していても、「作文」の苦手な生徒が多く、課題に対して手を付けられない者が多かった。

このような現状の中、国語科の授業において、「何のために学ぶのか」という学ぶことの意義を生徒に意識させ、国語科の各領域との連携を考えながら、「書くこと」の向上を目指した。

2　研究仮説

授業の様子の観察、提出物や定期テストの考察により、「書くこと」に関する本校生徒の課題が、3点浮かび上がった。

①「書くこと」を嫌がる
②「何を書いていいかわからない」という生徒が多い
③だらだらと書いてしまって主張を明確に書けない

①については、魅力的な課題設定が重要であると考える。特に、「読むこと」の教材を生かすことが有効であろうと考えた。その上で、学習活動が協働的になるような学習課題を熟考した。また、②③については、これまでの漫然と作文を書かせる指導を改め、目的・目標を明確にしたり、また、「書くこと」に関するスキルについての振り返りを的確に行ったり、他の生徒と学びあったりすることで、論旨の明確な文章が書けるようになるのではと考えた。

以上の考察より、次のような仮説を立てた。

> 生徒の興味に即した、「思わず書きたくなる」ような魅力的な課題を設定し、クラスメイトや自身との対話を重ねて「メタ認知」を深めることで、生徒たちは能動的に活動に取り組み、身につけた「見方・考え方」を働かせて適切に表現する能力を高めることができるであろう。

3　実践内容

⑴「思わず書きたくなる」課題の設定

生徒は、文章の読解や話し合い活動には熱心に取り組む。そこで、まず「書くこと」に対する対抗を減らすために、「読むこと」での意欲を引き継げないかと考えた。その上で、グループや全体での学び合いから、書く材料を全員が確実に持てるような授業展開を考えた。その際、気を付けるべき点として、十文字学園女子大学富山教授の挙げる「グループ学習の短所」

・学習に時間がかかる
・子供の姿が一見活発になるため教師が安心してしまう
・グループ内の特定の子供に依存してしまうことがある
・グループごとに取り組む内容が異なる場合、個々の子供の学習状況を捉えるのが難しくなる（※1）

に配慮して活動を設定した。

また、「思わず書きたくなる」課題を設定するに当たっては、明星大学教育学部白石客員教授の述べる以下の内容が参考になった。

「国語科の問題解決学習においては、子どもたちの『思考のズレ』を生じさせ、そのズレを教材の論理、特徴を生かして論理的に思考し明確に答えを導き出せるようにしていくことが大切である。」（※2）

これらのことより、本実践では、

Ⅰ　教科書教材から「思考のズレ」が生じるような場面に着目させる。
Ⅱ　その部分についての学習を深め、自分自身の「考

え」を持たせる。

Ⅲ　その「考え」について他者と交流させ、「思わず書きたくなる」ように高めさせる。

という学習過程を設定して、以下のような実践を行った。（教材は光村図書『中学校国語』１～３年のもの）

①「星の花が降るころに」の続きを書こう！

授業では、上記の課題を提示して、ジグソー法にて本文の読み取りを行った。「『私』の『夏実』に対する気持ち」「『私』の『戸部君』に対する気持ち」「『私』『夏実』『戸部君』の人柄」という３つの観点について小グループで読み取りを行った上で、物語の今後についてどのようなことが起こりうるかを考えた。そして、それをもとに各自で物語の続きを書いた。（写真１）

生徒たちはそれぞれに、読み取った登場人物の人物像（「私」の不器用さ、「戸部君」の優しさ等）を踏まえて、成長した「私」が「夏実」と人間関係を作り直す様子を描いたり、「戸部君」への恋心を描いたりしていた。生徒一人一人の読み取った、心情や人物像のささいな「ズレ」が、それぞれの描く「続き」に大きな個性を生じさせることに、生徒たちは非常な関心を持って活動に取り組んでいた。

（写真１）グループ学習の様子

②「少年の日の思い出」のミニ論文を書こう！

「少年の日の思い出」は一人称の視点で描かれている。一読した限りは、「僕」に同情的で「エーミール」の言動に対して反感を持つ生徒が多い。しかし、読み取りを深めていく内に、「僕」の言動について疑問を持つ生徒も出てくる。「『母』に促されなければ『僕』は謝りに行かなかったのでは？」「『エーミール』の対応の方が『大人』なのでは？」等々。

授業ではディベート形式で「『僕』は反省しているといえるのか」について話し合う活動を行い、それを踏まえて生徒たちに「ミニ論文」を書かせた。生徒たちは、学習内容を踏まえ、「自らチョウをつぶした理由」「『エーミール』の視点から見た『僕』」などについて、各自の読み取りを、それぞれに形にしていた。

③「シカの『落ち穂拾い』」を参考にレポートを書こう！

本教材の特徴である「仮説・仮説の検証・考察」という文章の構成を学んだ後、生徒たちに同様の構成のレポートを書かせた。検証の方法を「同級生にアンケートをとる」方法に限定し、生活の中で気になっていることについて、同じ興味を持つもの同士でレポートのテーマとアンケートの内容を決めさせた。生徒たちは、「携帯電話を使う時間が短いほど成績が良い」「睡眠時間が長い人は背が高い」などとそれぞれに仮説を立てて、その仮説を検証するためのアンケートをとり、集計、考察を行った。

「動機」「仮説」「結果」「考察」「まとめ」と、見出しの入ったレポート用紙を用意し、調査結果を基に、一人一人でレポートの作成を行った。仮説が実証されてもそうでなくても、生徒たちはクラスメイトの実態について興味を持って取り組んでいた。

④「走れメロス」をリライトしよう！

単元を貫く学習課題として「メロスは『真の勇者』であるか？」を掲げ、学習を進めた。ジグソー法にて「メロスに関する描写（前半・後半）」「王に関する描写」「その他の人物に関する描写」の観点から読み取りを進め、生じた「ズレ」をもとに、意見交換を行った。

最後に、それぞれが読み取った人物像や心情をもとに、「走れメロス」のリライトを行った。リライトの内容としては、「主人公を換える」「時間を変える」「設定を変える」を例としてあげた。生徒たちは、「セリヌンティウス」を主人公とした『待て！　セリヌンティウス』という作品や、メロスを「真の勇者とはいえない」とした生徒が「真の勇者」を描く物語などを書いていた。

⑤友達に『論語』を紹介しよう！

単元の目標である「人間の生き方についての孔子の考え方を、自分たちの生活と関連づけて考えよう」を達成するために、各自で選んだ論語の章句について、自身の体験と結びつけ、クラスメイトにわかりやすく紹介する、という活動を行った。

これまでの「書くこと」の学習において、特に意見文のような場合はその根拠として「自分自身の体験をふまえて」述べると説得力を増す、ということを繰り返し指導してきた。その学びを生かして、生徒たちは紹介する内容がその章句の説明としてふさわしいかという意見交換をグループで行い、紹介文を掲示物として作成した。

⑵　メタ認知を積み重ねる授業

「書くこと」に対する本校の課題として、意欲を高めることともう一つ、「適切に表現できるようになる」ことがある。そのためには「書くこと」に関するスキルを身につける必要がある。「何ができるようになるか」「何を学ぶか」が曖昧だった自身のこれまでの作文指導を省みて、

Ⅰ　指導内容を明確化する
Ⅱ　生徒にきちんと振り返りを行わせる
Ⅲ　一方通行の指導にせず、対話的な学びになるような授業の工夫を行う

の３点を心がけて、以下のように指導を行った。

①評価の観点の明確化と指導と正対した振り返り

「評価の観点」は、「文章・表記」と「内容」の２本柱を標準として、指導内容に合わせて詳細を定めた。

「文章・表記」の指導については、毎学年１学期に、資料集を活用しながら、まとめて指導する時間を設定した。その際、自主開発教材「作文の間違い探し」（意図的に表記等の誤りを配した作文例）を用いて定着を図っている。

「内容」については、課題によって評価の観点を示した。例えば、第１学年１学期の教材である「わかりやすく説明しよう」では、

Ⅰ「はじめ・なか・おわり」の３段落構成で書くこと
Ⅱ「好きな『もの』を紹介する」というテーマで、読み手にその思いを伝えること

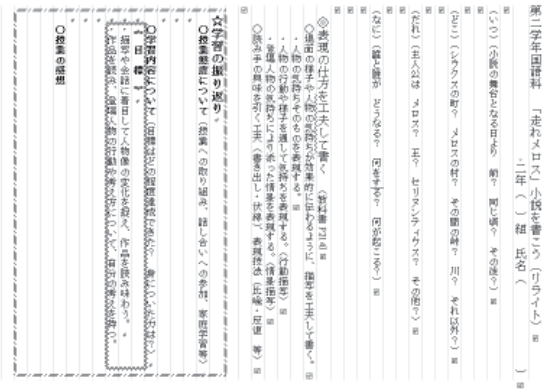
という２つの評価の観点を示して書かせた。「観点Ⅱ」については、「紹介する『もの』の長所等を書くことができたか」「書き手と『もの』との具体的な関わりを述べることができたか」を具体的な評価基準として定め、ルーブリックとして示した。

また、先の「（１）②「少年の日の思い出」のミニ論文を書こう！」の実践例の評価の観点は、

Ⅰ〈主張〉自分なりの読み取りについて書いてあるか（授業で学習したことを深める、もしくは独自の読み取りについて書く）
Ⅱ〈構成〉テーマが明確で、論理が一貫しているか（テーマを１つに定めてそれについて述べる）
Ⅲ〈量〉内容が充実しているか（文章量の基準の目安として、原稿用紙１枚半以上で「Ｂ」、２枚以上で「Ａ」）

とした。Ⅰについては、授業ではあまり触れることのできなかった「母」の人物像について述べたものや、「僕」からみた「エーミール」の偏った見方について分析したもの、最後の場面でチョウをつぶした理由について独自の解釈をしたものなどがあり、「Ａ」をつけた。Ⅱについては、テーマを絞れておらず、場面を個々に取り上げた感想文のようなものになってしまったものがいくつかあり、その程度によって「Ｂ」もしくは「Ｃ」を付けた。

生徒の学びに対するメタ認知を深めるために、「書くこと」の学習に限らず、単元ごとに「振り返りシート」(写真２)による振り返りを行った。「振り返りシート」には、「授業の取り組み態度」「『目標』を達成できたか」「今後の課題、感想」を書かせるようにしている。「書くこと」でも、評価の観点を明示したことで、振り返りが効果的に行えるようになった。「何ができるようになったか」というメタ認知を深めることで、その学びをその後の活動でも積極的に用いるようになり、学習の動機付けを高めることができた。



（写真２）「走れメロス」プリント

②評価の工夫

「加点方式」による評価と、「減点方式」による評価を課題に応じて使い分けるようにした。

先の「⑴「思わず書きたくなる」課題の設定」の実践における①④⑤や、第１学年「鑑賞文を書く」、第２学年「自分流枕草子を書こう」、「短歌を創作しよう」等の創作の要素が強い課題は、生徒の気づきや表現の工夫を積極的に評価する「加点」に重きを置いた評価を用いた。逆に、上記⑴の②③や、第１学年「新入生へメッセージを書く」、第２学年「意見文を書く」等、読み手を意識し、正確につたえることが必要な文章は減点方式の評価を用いた。

また、教師による評価のみでなく、生徒同士の相互評価を行う機会を多く設定するように心がけた。完成した作品等を読み合う以外に、下書きの段階での交流も行うようにした。交流の方法としては、以下の方法を定番化して行った。

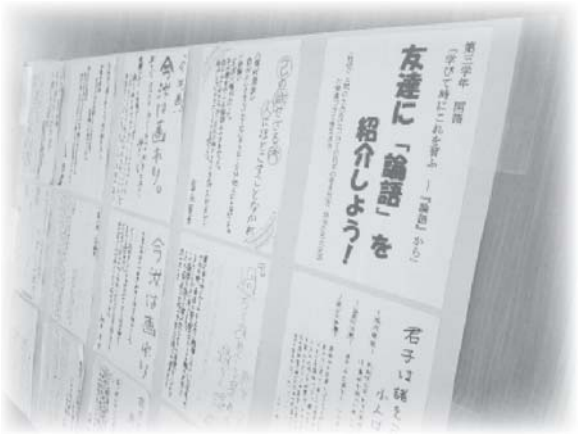
Ⅰ　生活班（５～６人）で机を向かい合わせる

Ⅱ　教師の合図で時計回りに作品と感想記入用紙を右隣の生徒に回す
Ⅲ　2分間で作品を読み、コメントを記入する
Ⅳ　Ⅱ～Ⅲを5回繰り返し、一回りする
Ⅴ　書かれたコメントを読む
（※課題によって人数や時間を変えた。）

定番化することによって、時間のロスをなくし、スムーズに活動が行えるようになった。相互評価によるメリットとしては、以下のようなものがある。

- 友達に評価してもらうことによって、動機付けを高める
- 誤り等を指摘してもらうことによって作文を改善できる
- 何を書いていいかわからない生徒が複数の友達の作品を読むことで演繹的に学ぶことができる

特に、一斉指導ではなかなか向上の見られなかった生徒に対して、生徒同士の相互評価を繰り返し行うことは効果があった。また、他の作品を批評することは、自ずと自らを振り返ることともなり、メタ認知を深めることにもつながったと考える。



（写真3）「友達に『論語』を紹介しよう」掲示物

回し読み以外にも、作品をまとめて冊子としたり、生徒の作品を廊下に掲示したり（写真3）することによって、学びを共有することもあった。これらも、先に挙げたのと同様の学習効果を得ることができた。

4　成果と課題

以上のような実践により、研究仮説で挙げたような問題点は改善してきた。書くことを嫌がる生徒は減り、当初は各クラスに4～5人はいた作文を白紙で出す生徒はほとんどいなくなった。生徒は、書くことのスキルを生かしてより適切に伝えようという意識が高まり、授業中の質問も「何を書いたらいいんですか？」から、「この課題だと、結論は最初に書いた方がいいですか？」「このたとえ話は内容と合っていますか？」等、高度なものに変わってきた。

埼玉県の学力学習調査の「書く能力」に係る設問における正答率の県平均との差も、

平成28年度　－4.3ポイント
平成29年度　－0.3ポイント
平成30年度　＋5.6ポイント

と大きく向上した。

また、全国学力学習調査の「書くこと」に係る設問における正答率の全国平均との差も、平成29年度との比較において、A問題で「6.7ポイント」、B問題で「5.1ポイント」の向上が見られた。

グループ学習には先に挙げたような難しさもあるが、評価をしっかりと見据えて課題を設定することと、集団での学びをきちんと個に戻す（作文する）ことで克服することができた。

今回の実践は「書くこと」に関するものが中心であったが、その中で行った「魅力的な課題の設定」「学習内容の焦点化と振り返り」「生徒同士の学びあい」などといったことは、他の領域でも生かせそうな指導方法である。今年度の県の学力調査では、「話すこと・聞くこと」の正答率は伸び悩んでいた。今後は、本実践をさらに汎用的なものとし、国語力全般の向上を図っていきたい。

5　参考文献

※1　富山哲也(2016)「子どもが主体的・協働的に学ぶグループ学習とは」,『教育科学　国語教育』2016年1月号，P.4，明治図書
※2　白石範孝(2016)「『思考のズレ』を生かした問題解決の学習課題と授業づくり」,『教育科学　国語教育』2016年7月号，P.39，明治図書

優　秀　賞

《個人部門》

作文での対話を通した“知的越境”の試み

～高等学校３年国語科における評論文教材を用いた研究実践とその考察～

岡山県立岡山朝日高等学校
教諭　平田　丞二

１　研究の背景と目的

本研究は、「作文による対話」という学びの手法を用い、それにより巻き起こる“知的越境”という生徒たちの学びの深化を目指したものである。“知的越境”とは、生徒たちが他者（「級友」・「教員」・「教材」）との対話により、新たな発見や気付きに辿り着き、それにより自分の殻を打ち破って「知」の領域を拡大・深化させることを意味する。この“知的越境”をつくり出す学びは、新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」と軌を一にしている。本研究は、このような学びを、高等学校国語科において「作文を用いた対話」を位置づけた授業構成によって実現することを目指した。

新学習指導要領は身に付けさせるべき資質・能力の柱の一つとして「思考力・判断力・表現力」を挙げているが、その元となった中央教育審議会答申（平成28年12月）は、「未知の状況にも対応できる」という形容を付している。つまり、学校で育成する「思考力・判断力・表現力」とは、未知なる課題を発見し、その解決方法を様々な方面から思考・探究し、他者と協働してその解決に向け対話してくような表現力や適切な判断力などの生きて働く力である。本研究が提起する“知的越境”は、こうした力の育成を意図している。すなわち、単なる知識習得にとどまらず、それらを活用して未知の状況に対応していけるような、生きて働く「知見」を拡大・深化させることである。

さて、本研究において焦点を当てる「作文」は、「書くこと（行為）」と「書かれたもの（文章）」という二つの意味を持っている。本研究は「作文」の持つこれらの二側面に着目し、生徒が作文する行為の過程における「対話」と、生徒が作文した文章をめぐる「対話」を豊かにつくり出すことで、主体的・能動的な“知的越境”が可能と考えた。

しかし、「作文」に対して苦手意識を持っている生徒が多いことも事実である。本研究の対象である３年生に対して、２年生の終わり頃に「作文に、苦手意識はありますか？」というアンケート調査を行った。その結果、作文に苦手意識が「ある」「ややある」と答えた生徒が73％と、実に約４人に３人の生徒が作文に苦手意識を持っていた【表１】。

【表１　作文に対する苦手意識（高校２年生）】

	ある	ややある	余りない	ない
割合（％）	26.5	46.5	21.5	5.5

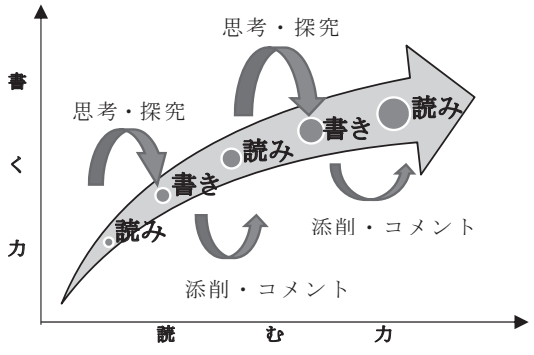
従来から作文指導に力を入れてきたが、こうした実態を踏まえ、生徒の苦手意識が払拭される、より効果的な作文指導を行うことも重点課題の一つとして考えた。

２　研究の仮説

今回、以下のような３つの研究仮説を立てた。

⑴　作文することで、教材をより深く理解し、読む力と書く力とを相乗的に伸ばすことができる。
⑵　級友の作文を読み、コメントを加え、フィードバックすることで、級友との深い対話ができる。
⑶　対話が新たな気付きや発見をもたらし、多角的に物事を見る目が養われ、“知的越境”がなされる。

上記仮説⑴は「相乗的」という観点がポイントである。教材を「読み」、それについて「書く」ことで、教材の「読み」が深まる。逆に「読み」が深まることにより、「書き」の精度も上がる。このように「読み」と「書き」が互いに補強し合いながら、両方の力を付けることを目指したが、そのイメージは【図１】の通りである。



【図１　書く力と読む力の深まりのイメージ】

3　具体的な研究内容

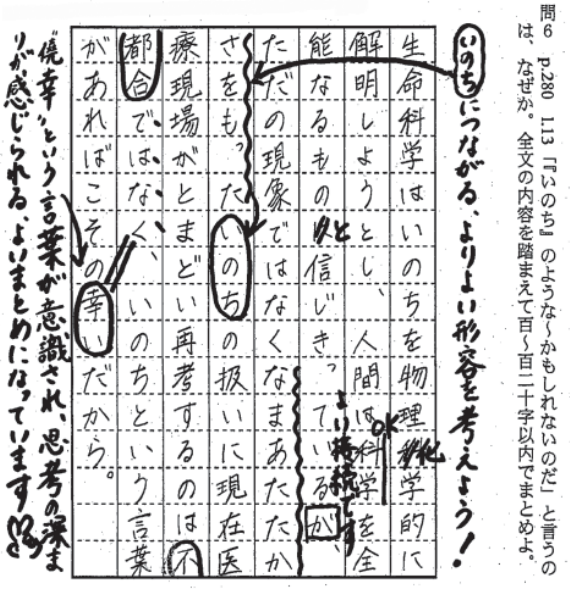
⑴　教材の概要

研究実践は、平成 29 年度 1 学期に、3 年生の科目「現代文（2 単位）」において教科書『高等学校　現代文Ｂ』（第一学習社）の「いのちのかたち」（西谷修著）を教材として行った。この教材には、英語の「ライフ」と日本語「いのち」の違いやその背景、機械論に立脚する生命科学に対するあるべき姿などが述べられている。重いテーマを扱った骨太の内容であり、知識として「知る」段階から、概念的な意味理解や思考の段階へと深化させ、人としての在り方や生き方をも思索・探究させることができる懐の深い教材である。

⑵　本文理解を深める作文を用いた対話

本文を読み深めるために、6 つの発問への解答と、本文要約（200 字）が書き込める「学習プリント」を作成した。このプリントは提出させ、教員が添削の上、他の生徒の解答や考えも示してフィードバックした。生徒は、教師の添削と他の生徒の解答や考えと対話することで自分が書いた作文の見直しを行い、本文の読みをさらに深めていった。さらに、こうした作文での対話を通して、作文するモチベーションが上がり、何度も書き直しするなどの事後の取組にもつながった。

また、指名して模範文例を板書させる際には、その文章を作る上で工夫した点や困った点なども発表させ、それについて他の生徒に意見を求めた。こうすることで、互いに考えを述べ合う形での主体的な対話となり、本文理解を深める上で効果があった。



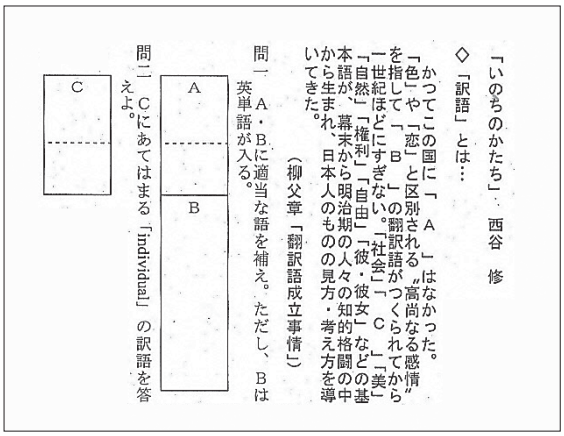
【図 2　添削が加えられた「学習プリント」】

⑶　思考・探究を深める作文を用いた対話

教材に関する思考•探究を深めるために、2 枚の「補助プリント」を作成した。

①「なぜ訳語・造語は作られたのか？」を深める

本文の前半で活用した「補助プリント 1」（【図 3】参照）は、近代日本で言語を輸入する中で、なぜ訳語や造語が作られたのかを、深く思考させるためのものである。柳父章の「翻訳語成立事情」の一説を示すなど、「いのち」以外の訳語、また翻訳に関する文化的背景などを、身近な言葉から考察できるよう工夫した。



【図 3　補助プリント 1 の一部】

この補助プリント 1 を参考にしながら、「なぜ訳語•造語は作られたのか？」について、各自の考えを作文させた。次時では、その中の 8 編を抜粋してプリントし、各作文について考えたことを話し合う時間を設けた。さらに、話し合った内容も含めて、級友の作文にコメントを加えさせた。その中のよいコメントを抽出してプリントし、生徒に配布して再度話し合わせた。

【図 4　級友と活発に話し合う様子】

このように、作文する行為と作文した文章についての対話を交互に行い、それらを積み重ねることで、生徒たちは話し言葉と書き言葉による「対話」を豊かに行い、考えを深めていった。

生徒たちの作文による対話の中から、一つのやり取りを次に示す。(a) はプリントに掲載された「訳語がなぜ作られたか？」についての作文であり、(b) は (a)

を読んでコメントした作文である。

(a) 訳語には抽象度が高く目に見えないけれど存在するというようなものが多いが、近代になり目に見えないが我々に影響を及ぼすような存在にも目を向け始めるようになった。明治に入ると西洋の物・考えが積極的に取り入れられたため、そのような中で新たに生まれてきたのではないか。

(b) 上記の意見は、自分の考えにも近いのかもしれないと思った。「目に見えないが我々に影響を及ぼす存在」というのは、西洋の言葉や文化のことだけでなく、日本を統治していくような政府やそれらによって様々に変化していく民衆自身でもあったように思う。その大きな存在に飲み込まれるのではなく、受け入れつつも自分たちに合うように形を変えていったので、「日本人らしさ」も感じられるような、革新的な言葉が生まれてきたのだと思う。

(a) は鋭く本質に迫る内容であり、(b) はそれによって新たな発見をし、さらに掘り下げた発展的な見解を述べるに至っている。これは一例だが、他にも多様な考えや意見を述べた作文が多数あり、それにより教科書の内容を深めることは勿論のこと、級友の考えも知ることで、多角的で深みのある視点が養われることになった。また逆に、級友と自分の作文を比較することで、自分の考えを掘り下げる機会にもなっていた。

②「ライフ」の背景にある西洋思想について深める

補助プリントの二枚目は、「ライフ」という語の背景にある西洋思想を、生徒たちに深く理解し考えさせるために、単元の中ほどで配布した。内容は、西洋思想を考える上でキーワードとなる「機械論」・「分析」・「抽象」という三つの語彙の解説と、それらの言葉に象徴的に表される西洋思想の根幹をまとめたものだ。

一枚目の補助プリントと同様に、このプリントについても読んで気付いたことや考えたことを作文させ、次の時間には秀作をプリントして配布し、少人数で対話する時間を設けた。実際の作文を以下二編紹介する。

(c) 人間の単なる生理学的な生と死だけでなく、人間としての人生や人間関係をも含む「いのち」という言葉が、科学や西洋思想に傾倒しすぎている人間にストップをかける最後の砦である。

(d) 精神が何によって司られているのか。たとえば脳という「パーツ」が「精神」という別次元の存在でもあるということになる。ただ、もし脳をそのまま他の身体に接続し、脳の固有の精神も発現するなら、脳もパーツでしかないと言えるのではないか。

(c) は本文の内容を受けて自分の意見を述べ、(d) は筆者とは異なる観点から哲学的な思索に至っている。上に紹介したもの以外も加え、生徒には 8 編の作文を紹介した。級友の多様な気付きや考えを読み、対話することで、西洋思想についての認識や本文自体の理解を深めていった。

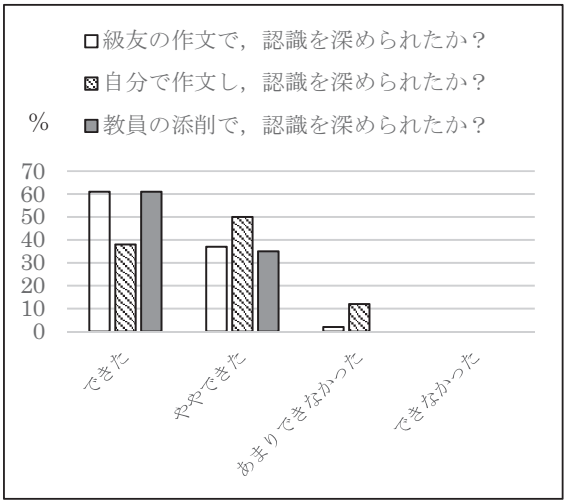
自分が考えてもいなかった考えに触れ、刺激を受けることで、理解のレベルを超えた一歩踏み込んだ哲学的な思索に至る生徒もいた。これまでの自分の思い込みや思考の枠を超え、新たなものの見方や発想を獲得していく“知的越境”の瞬間であり、かけがえのない体験と言える。その手段として、「作文を用いた対話」は非常に効果的であった。

4　研究成果

3 つの研究仮説に基づく研究実践が本研究のねらいである「主体的・対話的で深い学び」による“知的越境”をどれほど実現できたか、単元の最後に実施した生徒へのアンケートの結果をもとに検証する。

⑴　研究成果「作文による対話」による深い学び

図 5 は、「級友の作文」「自分で作文」「教員の添削」それぞれについて、「認識の深まりを感じられたか？」という問いに対する 4 段階（できた・ややできた・あまりできなかった・できなかった）の回答を集計したものである。



【図 5　研究実践後のアンケートの結果】

まず、研究仮説「⑴作文することで、教材をより深く理解し、読む力と書く力とを相乗的に伸ばすことができる。」については、設問「自分で作文し、認識を深められたか？」の結果「できた」「ややできた」を合わせ約 88%と、肯定的に回答した生徒が多い。

「⑵級友の作文を読み、コメントを加え、フィード

バックすることで、級友との深い対話ができる。」については、「友達の作文」が約98%、「教員の添削」が100%と、自分で作文するより高い割合の生徒が理解を深められたと回答している。このことは、作文による教師や級友との対話がより高い有効性を持っていることを示している。

次に、授業の中で対話した級友が書いた作文について自由記述したものから、「⑶対話が新たな気付きや発見をもたらし、多角的に物事を見る目が養われ、“知的越境”がなされる。」について検証したい。

＜級友が書いた作文について＞
A色んな角度からのアプローチがみられて楽しかった。この文章は複雑だし、具体が見つけづらいけれど、皆のおかげでかみくだけたような気がします。
B自分と異なる考えを持つ人の意見を見たり、こんなにハイレベルな意見が書けるのかと感じ、感動したり刺激になった。

上記以外にも、多くの生徒がアンケートにびっしりと書き込みをしており、ほとんどは級友が書いた作文との対話を肯定的に捉えたものだった。Bのように、対話を通して自分と異なる多様な意見や考え方を知り、「知」の幅を広げた、つまり“知的越境”が巻き起こった生徒もいたことが伺える。“知的越境”が級友に対する感謝の気持ちと知的な刺激をつくり出している点は興味深い。このことは、「作文との対話」による“知的越境”が、新学習指導要領のいう「学びに向かう力、人間性」の育成につながることを示している。

また、多くの生徒が苦手意識を持っていた作文だが、級友の作文について対話することによって、作文のコツがつかめてきたと感じている生徒も多い。

＜作文することについて＞
C 文章中の言葉をそのまま使うのではなく、それを理解したうえで、一歩踏み込んだ説明にすることでより深まった分かりやすい文章が書けると思った。
D 一・二年の時とは違って自分の分かっていない点が明白となり、授業での理解も深まった。

これまで苦手だったものの解決の糸口が見つかる、まさに対話によって自ら課題解決能力を手に入れたと言えよう。私自身も作文の添削を通して、生徒と対話し、生徒の主体的で深い学びと成長が実感できた。

以上のように、アンケート結果、そして、積極的に学習に取組む生徒の姿からも、3つの研究仮説の正しさが裏付けられたと考える。

⑵「作文による対話」における配慮事項

本研究実践によって「作文による対話」を通して“知的越境”をつくり出すことができたのは、授業構成の中で生徒の発想や思考を尊重し、その表出の一つである「作文」を、執筆者である生徒の発想や思考を肯定的に受け止め、吟味するという姿勢を教員と生徒の双方が、ともに共有したことが根底にあった。

そのために、作文する行為の過程では、生徒が自分自身の発想や思考をしっかりと練り、それを作文に表現するように指導した。例えば、教員の添削が加わること、級友が読むこと、つまり、作文した後に対話をすることを意識して作文するように働きかけた。

また、作文した文章について話し合い、コメントする際には、執筆者の発想や思考のいいところ・面白いところに着目して対話するように働きかけた。

このような対話するにふさわしい関係の中で生徒は、「書く・読む」と「話す・聞く」を組み合わせながら、両者の相乗効果によるより主体的で深い学びとなり、それまでの自分の「知」の枠を超えていく“知的越境”がもたらされた。

5　今後の展望

近年、教育の今後について「AIは教員に取って代われるか？」という議論をよく耳にする。本研究の成果を踏まえれば、その問いに対する回答は「ＮＯ」となろう。なぜなら、化学反応にも似た“知的越境”というクラス内で起こる生徒の変化や成長は、生徒と教員が時間と空間を共有する、生身の人間同士の生の対話の中でしか起こりえないと考えるからである。

今後も、そうした大局観を持ちつつ、一方で本研究を新学習指導要領のもとで発展させていくことなど、足元の一つ一つの授業の工夫改善を重ねていきたいと考えている。

●参考文献：中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」平成28年12月。

優　良　賞

《学校部門》

新たな教育目標の設定とカリキュラム・マネジメント

～教育活動全般を繋ぎ、生徒の資質・能力を高めるために～

山梨県立吉田高等学校
校長　髙保　裕樹

Ⅰ　はじめに

本校は、昨年度創立80周年を迎えた、地域の伝統校である。各学年普通科6クラス、理数科1クラスの編成で、生徒のほとんどは四年制大学に進学している。その結果、地元では東京大学への合格者数が毎年話題になるなど、教育効果が進学実績で語られることも多い。

Ⅱ　研究の概要

学校の教育目標は、生徒はもちろん、その目標達成に向けて日々の教育活動をしているはずの教員ですら意識しているケースは少ない。これは、多くの教育目標がもつ曖昧さにあるのではないかと本校では考えた。参考に、本校の平成28年度の教育目標の概要を記す。

1　確かな学力の育成
2　豊かな人間性の育成
3　たくましく、しなやかな心と体の育成
4　郷土、日本、世界に貢献できる人材の育成

他の多くの学校でも似たような目標が掲げられていると思うが、「確かな学力」「豊かな人間性」「貢献できる人材」とは何か、具体的なイメージを教員間で共有していないことが多く曖昧さを生んでいる。生徒にとってはなおさらである。その結果、目標が目に見える成果となり、生徒も教員も「勝つため」に部活を頑張り、「偏差値を上げるため」に勉強を頑張る。さらに「勉強か部活か」「授業確保のために学校行事を減らす」といった議論も起きるのである。本校の教育目標は、それを常に意識し、すべての教育活動を教育目標で繋ごうという、新たな視点を提案するものである。

Ⅲ　研究の内容

1　研究の実践内容

平成29・30年度　教育の目的と教育目標の設定による各種実践と生徒の自己評価を中心としたカリキュラム・マネジメント

ａ．教育の目的を次のように設定した。

「Yoshida PRIDEを持って未来を生き抜くことができる生徒を育成する」

＊Yoshida PRIDE　何事にも自らの考えを持って主体的に臨み、他者を尊重するしなやかな心

＊未来を生き抜くには　過去に学び、現在を知り、未来を考える手法を学ぶことが必要です

ｂ．教育目標「吉高GP」（吉田高校Graduation Policy）を次のように設定した。

この目的を達成するため、本校での3年間をとおして次の8つの力を身につけることを目標とします。

①自己肯定力　②傾聴力　③分析力　④思考力
⑤発信力　⑥想像力　⑦創造力　⑧行動力

2　研究の方法

学年を中心に教育目標の生徒への浸透を図り、その中から学年や教科が主体的な取組を行うことで、「吉高GP」の達成度を、生徒自身の自己評価により検証した。

Ⅳ　研究の実際

これから紹介する実践の指標の多くは生徒の自己評価である。自己評価にこだわった理由を次に示す。

①他者評価に振り回されない強い自己を持って欲しい
②自他の特性を多様な指標で見る視野を持って欲しい
③振り返りを通して、常に自己の課題を主体的に意識し、課題解決に向かう習慣をつけて欲しい

未来に向け「自分のものさしを確立する」ためである。

1　実践①　2か月ごとの自己評価の実施

生徒が自己評価するためのルーブリックを作成（次頁）し、これを基準に奇数月に各自を振り返る自己評価を、平成29年度1学年が始めた。このルーブリックでは、最終的に目指す姿を「自他共に尊重する中で、自分の意見を自信を持って発信し、周囲との意見の相違を整理・分析し、相手の論拠を考えながら着地点を探せる。その上で、先を見通し、建設的な方法を提案し、周囲を巻き込んだ行動に移していくことができる」とした。各学年では、このルーブリックを基本とした学年用のルーブリックを作成し、S•A•B•C（5•4•2•1）

の４段階で２か月ごとに自己評価を行った。この自己評価の積み重ねは非常に大きく、生徒の教育目標を意識して生活する態度が醸成された。また、自己肯定力を低く評価する生徒は､問題を抱えていることが多く、早めに相談体制が確立できるなどの副次的な成果も見られた。

＜吉高 GP のルーブリック＞

段階 / 力	C (1)	B (2)	A (4)	S (5)
自己肯定力	小さなことにも成功体験・達成感を感じることができる	自分の努力や過歩を認めることができる	自分の長所を理解し、積極的に物事に取り組もうとすることができる	他人の長所と自分の長所を理解し、自分の言動に責任が持てる
傾聴力	相手の話を静かに聞くことができる	相手の話を聞きながら、要点を整理することができる	相手の話から、自分の考えとの共通点、相違点を整理しながら聞くことができる	同意点には賛同、相違点には質問しながら相手の話を聞くことができる
分析力	状況を客観的に観察することができる	観察した状況から問題点や課題を考えようとすることができる	状況を整理し、問題点や課題を他人に伝えることができる	整理した状況から、次のステップに移る手段を提案することができる
思考力	日常生活で「何故？」を感じることができる	感じた疑問に対して解決する方法を考えることができる	感じた疑問を方法に関って、論理的に考えることができる	自分なりの考えを、他人に説明することができる
発信力	相手に伝えたいことがあると思える	伝えたいことを、自分の中で言語化することができる	伝えたいことを、相手に伝えることができる	伝えたいことが伝わりやすいように、工夫して伝えることができる
想像力	物事や行動の結果を、考える習慣が身についている	物事や行動の結果を、過去の経験や現在の状況を踏まえて考えることができる	これから先のことを、現在の状況から考えることができる	未知の状況を、現在とることができる手段に応じて考えることができる
創造力	過去の手法を使って、状況を処理していくことができる	過去の手法を改善する手段はないか考えることができる	過去の手法を改善し、より目的に合った手段を創案することができる	未知の状況でも目的を達成するための手段を創案することができる
行動力	言われたことは着実に遂行することができる	言われたことを、そのままではなく、自分なりの改善を加えて遂行することができる	自分がとるべき行動を見つけ、実行することができる	とるべき行動を理解し、周囲を巻き込んで行動することができる

2　実践②「吉高 GP」振り返りシートの作成

２か月ごとの自己評価は、振り返りシートとして家庭に還元した。これにより、生徒が自分の成長を自分の評価により実感でき、より真剣に自己評価に向かう姿勢が育成された。また、保護者には、人間力を育てようとする学校の姿勢を発信することができた。

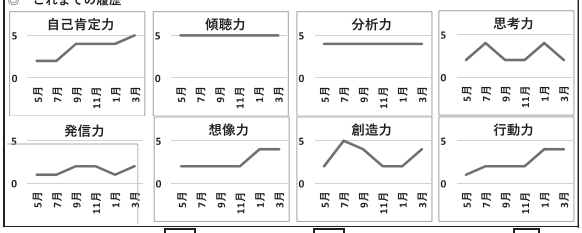
吉高GP振り返りシート

１年　Ａ組　１番　氏名　吉田　一太郎

◎ 自己評価表

		5月	7月	9月	11月	1月	3月	計	最高値	コ　メ　ン　ト
1	自己肯定力	2	2	4	4	4	5	21	5	学びの成果が見られます
2	傾　聴　力	5	5	5	5	5	5	30	5	あなたの強みですね
3	分　析　力	4	4	4	4	4	4	24	4	安定しています
4	思　考　力	2	4	2	2	4	2	16	4	もっと自信を持っていいのでは
5	発　信　力	1	1	2	2	1	2	9	2	できることから挑戦しよう
6	想　像　力	2	2	2	2	4	4	16	4	徐々に力はついています
7	創　造　力	2	5	4	2	2	4	19	5	目標を明確にして進もう
8	行　動　力	1	2	2	2	4	4	15	4	この調子で行きましょう

◎ これまでの履歴



◎ 3月分　学習習慣 [4]　生活習慣 [4]　担任による生活習慣評価 [4]

人の話を落ち着いて聴けることは素晴らしいことです。自己肯定力、行動力の上昇は自信がついてきている証拠ですね。周囲は、あなたが思う以上に、あなたを認めています。徐々に発信する機会を増やしていきましょう。

3　実践③　行事での自己評価の実施

行事の前に､「つけたい力」を意識させ、その評価規準を生徒各自に考えさせる取組を平成 29 年度２学年が始めた。例えば６月末の学園祭の前に、学園祭を通じて「つけたい力」とその評価規準を記入させ、終了後、その規準に則り自己評価をさせるというものであった。言わば、自己評価のためのルーブリックを、事前に自ら作成するという取組であり、自己の課題を明確にして行事に取り組むという意味で大きな成果があった。その確認シートを次に示す。

蒼風祭吉高GP 確認シート

【事前申告】
吉田高校最大の生徒会行事である「蒼風祭」において、あなたが最もアップさせたい力を、吉高GP の力の中から一つ書いてください。また、蒼風祭の準備から当日までを通して、どんな事ができればその力がアップしたと判断できるのかも教えてください。

※スキルアップしたい力

※判断できる規準（簡単に。箇条書きでもOK）

【事後評価】
蒼風祭を終わって、あなたが事前申告した「アップさせたい力」の自己評価をお願いします。評価は４段階（S：思った以上にアップした、A：思った通りにアップした、B：思ったほどはアップしなかった、C：アップしなかった）で、そう考えた理由も教えてください。

※あなたの自己評価 一つに○印をつけてください　S　A　B　C

※その理由（簡単に）

4　実践④　日常の授業と「吉高 GP」の連結

学習指導案や授業の終わりに記入させるリフレクションシートも「吉高 GP」との連結を図り、各授業や単元で「どの力を身につけさせるのか」を明確化した授業が実施され､教師の授業改善の促進が見られた。

5　実践⑤　全学年合同「吉高 GP」集会の実施

今年度（平成 30 年度）、３年生からの提案で、７月に全校生徒による集会を行った。この企画だが、計画から運営まで、すべて生徒の手により行われた。学校の教育目標に対する理解を深めるための集会が、生徒主導で行われたのである。具体的には、１年から３年までの各学年の生徒が必ず入った７～８人のグループを作り｢Cat & Chocolate ゲーム｣を行った。このゲームはピンチを切り抜けるアイディアを出し合うものだが､「イベントカード」の代わりに全グループに共通の「お題」を出し、それぞれの「お題」について、吉高 GP の８つの力を記した「アイテムカード」を２枚引き、その力を使った解決策を出し合うというものであった。「お題」を次に示す。

1) 親友が芸人になりたいというが正直向いていない。あなたならどうする？（現代）
2) 富士山が噴火した。あなたならどうする？（現実）
3) あなたは新人営業マン。でも売り上げが伸びない。あなたならどうする？（現実）
4) AI による初めての殺人事件が起きた。あなたのグループではどうする？（未来）

「お題」は、日常から将来、未来の３段階で構成されており、「吉高 GP が将来、どのように活きるのかを考えて欲しかった」というのが、企画した生徒の意図であった。学校の教育目標が、将来に繋がっているということを、生徒自らが発現した素晴らしい企画となった。「社会に開かれた教育課程」という言葉を最近よく耳にするが、まさに学校と社会が繋がったという実感を持たせるものであった。

Ⅴ　成果と課題

１　成果

教育課程全体を、「吉高 GP」という教育目標で繋ぐ取組は、次の五つの観点で大きな成果をあげている。

①　生徒自身による成長の意識化

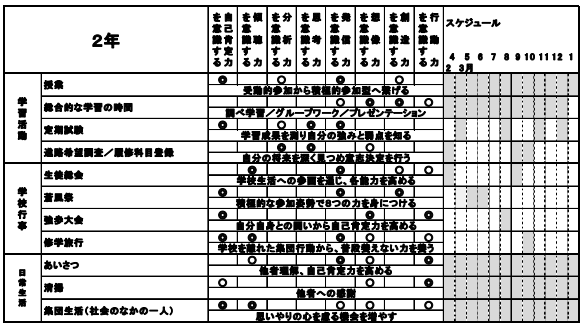
この点については、次の二つのデータから確認できる。一つは昨年度の学校評価である。昨年度の３年生は、吉高 GP を意識してはいたものの、受験生ということもあり、振り返りを行う時間が十分に確保できなかった。その結果、様々な取組を行った 1•2 年生と大きな差が出た。「私は、吉高 GP（８つの力）について、高校生活の中で総合的に向上した。」という項目に対し、肯定的に回答した割合は、３年生で 61.8% だったのに対し、1•2 年生は 87.8% であった。また、1•2 年生の自己評価ポイントの平均値を見ると下表のようになった。

		7月	9月	11月	1月	3月
自己肯定力	1年	2.97	3.48	3.35	3.18	3.37
	2年	－	2.85	3.29	3.24	3.28
傾聴力	1年	3.76	4.23	3.94	3.97	4.05
	2年	－	3.58	4.12	3.98	4.12
分析力	1年	3.40	3.63	3.60	3.49	3.65
	2年	－	3.16	3.61	3.66	3.71
思考力	1年	3.44	3.92	3.71	3.78	3.90
	2年	－	3.47	3.95	3.88	3.93
発信力	1年	3.56	3.39	3.41	3.35	3.33
	2年	－	3.07	3.46	3.46	3.52
想像力	1年	3.58	3.78	3.64	3.45	3.60
	2年	－	3.24	3.54	3.62	3.69
創造力	1年	3.25	3.72	3.62	3.32	3.51
	2年	－	3.29	3.72	3.64	3.79
行動力	1年	3.55	3.74	3.59	3.49	3.67
	2年	－	3.40	4.02	3.78	3.82

（2 年の 7 月は実施しなかった。）この結果から、1 年の発信力を除けば、初回と最終回では平均点の上昇がみられ、生徒は自身の成長を自覚していることがわかった。また、1 年の 7 月の発信力、2 年の 11 月の行動力には、学園祭や修学旅行といった学校行事の影響があったとみられ、学校行事の有用性や行事の目的を検証できるデータともなった。このことは、生徒の自己評価が、カリキュラムの評価の一指針となる可能性を示したものだと考えた。

②　カリキュラム・マネジメントの方針の明確化

①でも述べたが、生徒の自己評価を分析することで、生徒の内面に与える学校行事の影響が大きいことがわかった。そこで、教育課程のすべてを「教育目標」に照らし、そのバランスをとろうという動きが生じた。育てたい生徒像を明確化し、授業は勿論、クラブ活動や学校行事までを「吉高 GP」という尺度で見直そうというものである。これこそがカリキュラム・マネジメントの視点ではないかと考えている。これにより、カリキュラムの評価が、生徒の自己評価という指標で行えることになる。具体的には、下表のような教育活動と育てたい力、実施時期を、学年ごとに一覧にまとめた「育成計画」を作成し、教育目標から見た教育課程の偏りについて検討することができた。（一部抜粋）



また、今年度からは、この育成計画をもとに行事ごとに「評価シート」を作成し、事前にねらいを再確認すると共に、生徒個人のねらいや評価規準を記入させ、事後に評価をさせる形に進化している。このシートは、学校側の行事のねらいを明確にしたうえで、生徒個人の課題も明確化させ、振り返りを前提とした取組を意識させようとしている。各行事ごとに作成されているので、「行事シラバス」と言ってもいいのではないかと考えている。

行事名	蒼風祭	日付	6／29，30
		場所	
目的	蒼風祭を通して、人間関係を形成し、所属感や連帯感を深める。また、平素の学習活動の成果を総合的に生かし、文化や芸術に親しむ活動を行う。		
①	伸ばしてほしいGP	自己肯定力・発信力・創造力	
②	伸ばしたいGP（○をつける）	自己肯定力　傾聴力　分析力　思考力　発信力　想像力　創造力　行動力	
	判断規準（具体的行動を箇条に）		
感想	学園祭について感じたこと・気づいたこと・考えたことを文章で書いてください。最後行まで！		
自己評価（○をつける）	①（　　力）　S　A　B　C		
	理由		
	②（　　力）　S　A　B　C		
	理由		

S：思った以上にアップした　　B：思ったほどはアップしなかった
A：思った通りにアップした　　C：アップしなかった

③　教育目標の共有

昨年度末の学校評価の「私は、吉高 GP を常に意識している。」という項目に関して、肯定的に回答した教員は 83.0%、1・2 年生は 84.8% であった。否定的に回答した教員や生徒の中には「常に」という一言が気になったという者も多く、認知度としては、ほぼ全員に浸透していた。保護者には、学校評価で直接尋ねる項目はなかったが、「お子さんの、どの力が成長したと感じますか。」という項目に回答が得られていることから、保護者にも浸透していることが伺われる。「教育目標を意識する」という点においては、教員、生徒、保護者ともに深く浸透したと考えている。

④　授業と教育目標の連結

今までも、授業においては「確かな学力」を身につけさせるための指導は行われていたが、「確かな学力」の中身が整理されないことも多く、結果として「偏差値」が目標になることが多かった。しかし、「吉高 GP」の導入により、授業で育成する資質・能力という視点で授業が行われるようになった。例えば、学習指導案の指導計画にも、学力の三要素とともに「吉高 GP」との関連を記載する教科も見られるようになった。行事だけでなく、授業も教育目標と明確に繋がった。

回	学習内容 ◇対照すべき概念	新しい学習指導要領を見据えた評価の3観点　評価計画							
		知識・理解		思考・判断・表現			主体的に学習取組態度		
		吉高ＧＰ（８つの力）評価計画							
		傾聴力	分析力	思考力	発信力	想像力	自己肯定力	創造力	行動力
1	関数と方程式 ◇関数とは何か	○	○	○		○			
2	方程式の理論 ◇そもそも方程式とは何か	○		○		○		○	
3	関数と不等式 ◇関数との関係性を考える	○	○	○		○			
4	不等式の理論 ◇そもそも不等式とは何か	○		○		○		○	

⑤　教員の意識の変化

このような教育活動や、2 ページで触れた「吉高 GP 振り返りシート」の作成を通じて、職員室での話や生徒への声かけにおいて、生徒の資質・能力を認める発言が増えている。これは、生徒の自己評価から生徒の声を聴き、教員がその内面に、今まで以上に寄り添おうとした結果だと考えている。教育目標が、今までのような「確かな学力」「豊かな人間性」といった曖昧なものではなく、生徒個々が自己評価できる項目になったことで、教育目標が教員と生徒の心を繋ぐ役割を果たしたと言えるのではないだろうか。

2　課題

「吉高 GP」を、今後さらに推進していくに当たり、次のような課題があると考えている。考えられる解決策も併せて次に示す。

①　自己評価だけでなく、質の保証の上からは客観的な評価も必要だと考えられる。

→パフォーマンス評価やジェネリックスキル測定テストの導入等により、解決できる可能性が高い。

②　学校が計画する業務のすべてが、吉高 GP には集約されていない。

→現在学校が作成する教育計画は多岐にわたり、学校が主体的に計画するものばかりではない。その結果、吉高 GP との関連性を考慮できずに実施しているものも少なくない。今後、ひとつずつ整理していきたい。

③　成果の項目で述べたように、保護者との教育目標の共有は、ある程度図られていると考えているが、「育成する」という視点まで共有できているとは言えない。家庭との連携をさらに深める必要がある。

→現在、保護者も使えるコミュニケーションツールを導入しているので、このツールを使った保護者への呼びかけや、ＰＴＡの本部役員との協力体制の構築などを通じて、さらに連携を深めたい。

④　目標変更（「吉高 GP」型の廃止）が難しい。

→「吉高 GP」型の目標を従来型の目標に戻そうとすると、教育課程全体の再構築が必要になる。したがって、大きな変更が難しい。また、8 つの力の種類の変更や数の変更なども、すべてのシートの変更までを要するため、かなり面倒な作業となってしまう。現在のところ、見直しの意見はないが、小さな改善を継続していきたい。

⑤　生徒の「評価慣れ」からくる、意識の低下が懸念される。

→意識の高い生徒でも「今回は、こんな感じでいいや」という評価をすることがあることもわかった。これまでの自己評価では、全体としては雑な回答が減少し、自己と向き合う傾向が見られてきたが、意識づけを継続していかないと、雑な自己評価が増加する恐れもある。

今回、新たな教育目標の設定で、生徒の内面の成長を視覚化でき、さらに生徒の声を反映したカリキュラム・マネジメントの可能性が見えた。また、教育目標が、社会に繋がるものだという認識を生徒が持てたことの意義は大変大きい。今後さらに PDCA サイクルを継続し、未来を生き抜くことができる生徒を育成していきたい。

優　良　賞

《学校部門》

主体的に学び 表現する児童生徒の育成

～自分や集団の考えを発展させる「学び合い」の授業を通して～

広島県安芸高田市立美土里小学校
校長　冨岡美保子

1　はじめに

本校が属する安芸高田市は、従来より中学校区を単位とした「複数校の協働による授業づくりへの挑戦」を掲げ、小中連携を核とした授業づくりに取り組んでいる。そういった中､本校は､平成 27 年度より 3 年間、広島県「『学びの変革』パイロット校事業」の指定を受け、これからの社会で活躍するために必要な資質・能力の育成を目指した「主体的な学び」を促進するために､「学び合い」を土台とした「課題発見･解決学習」の授業づくりに取り組んできている。初年度は、国語科と総合的な学習の時間を中心に、「課題の設定」「情報の収集」「整理･分析」「まとめ･創造･表現」「実行」「振り返り」という探究過程を取り入れた単元の開発を行った。平成 28 年度からは、「パイロット校事業実践指定校」となった美土里中学校とも連携しながら、「課題発見・解決学習」の質の向上に向けて、「学び応えのある課題設定の工夫」「協働的な思考の場の充実」「資質・能力の育成」に重点を置いて研究を進めてきている。

2　主題設定について

⑴　研究主題

主体的に学び 表現する児童生徒の育成
―自分や集団の考えを発展させる
「学び合い」の授業を通して―

⑵　主題設定の理由

「学び合い」を土台とした課題発見・解決学習の単元開発を通して、仲間と試行錯誤しながら課題解決に向けて粘り強く取り組む姿が見られるようになってきた。しかし、自ら学んでいこうという意欲の向上には課題も見られる。そこで、学習者基点の学びを目指して指導者の意識改革も含めた授業改善を進めることで、主体的に学ぶ児童の姿を目指したいと考え、研究主題を「主体的に学び表現する児童生徒の育成～自分や集団の考えを発展させる『学び合い』の授業を通して～」として本研究を進めることとした。

⑶　研究推進体制

平成 28 年度から、美土里小・中学校連携の要である「美土里教育２１」という組織の運営を担うメンバーの構成要員を「校長・教頭・教務主任」から「校長・教頭・教務主任・研究主任」とした。これは、小中連携推進の核を「授業づくり」に置くということの表れである。各校 4 名、計 8 名のメンバーで連携教育を進めている。

3　研究の実際

⑴　育成したい資質・能力と目指す児童生徒の姿の系統性
⑵　目指す授業イメージの共有化
　①魅力的な課題設定は単元プランの要
　②協働的な思考の場（学び合い）の充実
　③子供自身がつくる「目指す学びの姿」
⑶　合同研究授業及び協議会の充実
　①合同模擬授業の実施
　②合同研究協議会の実施

⑴　育成したい資質・能力と目指す児童生徒の姿の系統性

育成したい資質・能力が小・中学校 9 年間を見通したものになるよう、全職員での議論を通して、「育成したい資質・能力と目指す児童生徒の姿の系統性」を設定した。【表１】

当初は、育成したい資質・能力を小・中で別々に設定していたが、本当の意味で連携の充実を図るためには、9 年間を通した学びをデザインする必要性があるという確認に至り、繰り返し議論を重ねながら作成していった。9 年間を連続する学びと捉えることで、児童生徒に付けたい力が明らかになり、また、目の前の子供の姿から「資質・能力」の具体を明らかにしていくことができた。

			小学校１・２年生	小学校３・４年生	小学校5・6年生／中学校1年生	中学校２・３年生
生きて働く知識・技能の習得	知識	知識・技能	各教科等に関する個別の知識や技能など			
未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成	スキル	①コミュニケーション能力 （つながる力/対話する力） 学習内容に関する他者との建設的な対話を通して，課題解決に向かうことができる力	楽しんで話合いに参加し，自分の思いや考えを表現することができる。 友達の考えを聴き，よいところを見付けることができる。	進んで話合いに参加し，自分の考えを相手に分かりやすく表現することができる。 友達の考えを聴き，よいところを取り入れたり，違いを認めたりすることができる。	進んで話合いに参加し，伝えたいことを根拠をもって分かりやすく表現することができる。 友達の考えや立場を理解しながら聴き，目的に向かって話合いを深めることができる。	相手のことを考え，根拠をもって自分の考えを分かりやすく説明することができる。 相手の思いや立場を尊重して受け止め，課題解決に向けて話合いを深めることができる。
		②知識・情報活用能力 （知識や情報を生かす力） 様々な資料をもとに情報を収集・選択し，それを根拠として自分の意見や考えをもつことができる力	調べたいことを見付け，最後まで調べることができる。 簡単な内容について調べ方の手法を知ることができる。	問題や課題を見付け，必要な情報を収集することができる。 メモや写真など集めた情報を比較したり関連付けたりして整理することができる。	問題や課題を見付け，多様な方法で必要な情報を収集・選択したり，分析したりすることができる。 解決方法の見通しをもって学習を進めることができる。	課題解決の際，自ら求めて様々な資料を検索することで情報を収集し，必要な知識・情報を選択し，それを根拠として自分の考えや他者の考えを補強・修正することができる。
学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養	意欲・態度	③挑戦力 （前向きにチャレンジする力） 課題の解決に向けて，自分の考えを大切にしながら粘り強く様々なことに挑戦しようとする力	具体的な活動や体験に対して，やる気をもって最後まで取り組む。	目指す目標をもち，課題解決のための方法を選択し，対象に対して自ら働きかけたりしながら，粘り強く取り組む。	目指す目標の達成に向けて，課題解決のための方法を選択し，対象に対して積極的に働きかけたりしながら，計画的に粘り強く行動する。	困難な課題や初めての状況に直面した際，自分のこれまで学んできたことを活用したり，他者と協力したりすることで，あきらめることなく解決案を生み出したり，計画を見直したり，実践したりしようとする。
		④協働性　（協働する力） 異なる多様な他者との対話を繰り返し，自らの考えを構築しながら他者とともに納得解や最適解を創り出す力	他者と互いに関わり合いながら活動する。 他者と関わり合うことを楽しむ。	他者と進んで関わり合いながら，協力して活動を進める。 他者と関わり合うよさを実感する。	異なる意見や他者の考えを受け入れながら，目的に向かって協力して課題を解決する。 さらに分析したことから，自分の役割を理解し，互いに高め合いながら最後までやりきる。	課題解決に向けてグループ内での役割分担に進んで関わり，協力し，助け合うとともに，互いの異なる考えを認め，また，合意形成を図ることで，目標達成を目指す。
	価値観・倫理観	⑤自己肯定感 （自分を見つめる力/自分を信じる力） 自己を見つめ，向上を図るとともに，自己や他者の成長を評価できる力	自分の頑張りや友達のよいところを見付ける。 自分が好きなことや誰なことが言える。	新たな気付きや身に付いた力を意識し，自分や友達の成長，よさに気付く。 自分の特徴に気付き，よいところを伸ばす。	学び合う楽しさに気付いたり，他者の成長に共感したりするとともに，自らの成長を実感する。 自分の長所や短所を理解し，自分らしさを発揮する。	自分の長所や短所を受け入れ，自らその改善と向上に向け努力することを通して，自分自身に誇りをもち，他者の成長も認めることができる。
		⑥よりよく生きようとする力 （生活に生かす力） 視野を広げ，他者から学ぶことなどを通して，社会の一員としての判断・実践をする力	体験活動などから学んだことを自分の生活に取り入れようとする。	学んだことを，その後の学習や自分の生活と結び付け，自分にできることを考える。	学習を通して身に付けた力をもとに，自らの生活を見直すとともに，学校・家庭・地域の中で実践する。	広い視野をもち，他者の考えなども取り入れながら，様々な課題に対して，社会の一員としての望ましい判断・実践をする。

【表１　育成したい資質・能力と目指す児童生徒の姿の系統性】

⑵　目指す授業イメージの共有化

目指す学びをデザインしていくためには、汎用的能力（資質•能力）を系統的に育成していくだけでなく、「授業観」の共有化も必要であることに気付き、本校では、中学校と連携しながら、目指す授業イメージの共有化に向けて次のように取組を進めた。

①魅力的な課題設定は単元プランの要

単元レベルでの課題を設定する際は、まず「教科の指導事項」と「発揮させたい資質・能力」を明確にしている。その際、設定した課題が子供にとって「自分事」として捉えられるものになっているかどうかということを重視している。課題が「自分事」となることで子供の心に火が付き、目指す「主体的な学び」が実現できるとともに、学習活動がより発展的に展開していくと考える。

【その他に課題設定のポイントと考えているもの】
・児童の興味・関心　　・学校・地域の実態
・実生活や発展的な学習へのつながり

【課題設定の工夫例（総合的な学習の時間）】

②協働的な思考の場（学び合い）の充実

本校では、まず、堅い雰囲気があったグループ学習を、自然体で率直な対話の雰囲気に変えていこうと取り組んだ。グループでの子供たちのコミュニケーションをより大切にしつつ対話とアイディアの創発を促してきた結果、自分の考えの広がりを実感する児童が増えてきた。しかし、その質の深まりにはなかなか至らない状況があった。児童の思考を深めることは、教科等のねらいを達成するために不可欠である。そこで、学びの深まりが十分ではない要因を次のように分析した。

・「学び合い」の目的や視点が明確でない。（安易にグループ活動を導入してしまい、ここ一番というタイミングで仕組むことができていない。）
・指導者が児童同士や、児童と教材をつなぐための有機的な関わりができておらず、かえって児童の学びを阻害する場面も見受けられる。

そこで、この課題の改善に向けて、次の２点に取り組むこととした。

＜ホワイトボードは“学びを深めるための作業台”＞

ホワイトボードがグループで結論をまとめる発表ボードとして使われたり、話し言葉が飛び交ったりするだけでは、思考の深まりにはつながりにくい。そこで、子供たちが考えながら話し合い、そこで出た意見やアイディアを思い付いたままメモする作業台としてのホワイトボードの活用を共通認識とした。ホワイトボードは発表するためのツールではなく、思考を可視化するためのものという位置付けにより、さらに話し言葉が活性化し、一人一人の思考が促進される姿が見

られるようになった。最終的には、グループで共有した考えをもとに、一人一人が自分なりに再構成できる（個に戻す）活用の仕方を目指している。

【ホワイトボード活用の様子（４年　総合）】

＜“学びをつなぐ”ファシリテーターとしての役割＞

子供の思考を深めるために、指導者は“学びをつなぐ”ファシリテーターとしての役割を意識することを共通認識している。その際のキーワードが「聴く」「つなぐ」「戻す」の３つである。

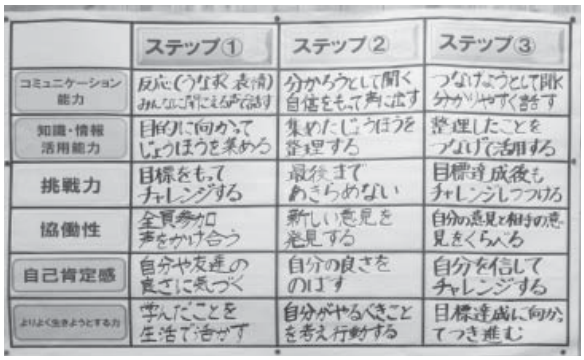
聴く	児童の発言が「何を根拠に表現したものか」「他の子のどの発言とつながっているのか」「その子自身のこれまでのどの考えとつながっているのか」を聴く。
つなぐ	「それはどこでそう思った？」「どうしてそう考えたの？」「他の人はどう？」など根拠や理由を尋ねたり、他者につないだりする。
戻す	教科書やテキスト、既習の知識や基礎的事項に戻したり、児童に戻したりして考えさせる。

③子供自身がつくる「目指す学びの姿」

子供たちが本来有している資質・能力は、繰り返し発揮する中で高まっていくと捉えている。その資質・能力を発揮した姿は、指導者が引き出すだけでなく、“子供たち自身が目指す”という視点を重視して取組を進めている。

＜目指す学びの姿３ステップの設定＞

各学級で、児童と指導者が共に議論しながら、資質・能力を発揮した姿を３ステップで設定している。単元や学期の節目に、自分自身の姿を振り返って３ステップの表と照らし合わせる形で活用している。自分たちの目指す姿を意識し、今の自分との比較を通して自覚化することを大切にしながら次の学びに向かっていく指針となっている。



	ステップ①	ステップ②	ステップ③
コミュニケーション能力	反応（うなずき 表情）みんなに聞こえる声で話す	分からうとして聞く 自信をもって声に出す	つなげようとして聞く 分かりやすく話す
知識・情報活用能力	目的に向かって じょうほうを集める	集めたじょうほうを整理する	整理したことを 学びに活用する
挑戦力	目標をもって チャレンジする	最後まで あきらめない	目標達成後も チャレンジしつづける
協働性	全員参加 声をかけ合う	新しい意見を 発見する	自分の意見と相手の意見をくらべる
自己肯定感	自分や友達の 良さに気づく	自分の良さを のばす	自分を信じて チャレンジする
よりよく生きようとする力	学んだことを 生活で活かす	自分がやるべきことを考え行動する	目標達成に向かってつき進む

【目指す学びの姿　３ステップ】

＜「目指す学びの姿」共有化への取組＞

上記にあげたような「目指す学びの姿」について、指導者の支援を得ながらとはいえ子供たち自身で設定することができるようになるまでには、様々な試行錯誤の取組があった。

- 目指す「学び合い」のイメージを子供たちがもてるように、全校朝会で職員が児童に扮し、期待する姿やその意図について劇化を通して説明した。
- 異学年の子供たちがお互いの授業（学び合い）を参観し、“学び方”を学ぶ時間を設けた。参観し合うだけでなく、上学年が下学年の教室に出向き、学び合いの場面で「今、分からないと思っていることを班の誰かに質問してみたら？」と具体的にアドバイスするなどの時間を設けた。子供同士が「学び合い」のコツを伝え合い、それによって自己肯定感を育むことにもつながっている。

⑶　合同研究授業及び協議会の充実

主体的・協働的に学び合う子供たちの姿を目指すには、まず教職員集団が「学び合う」集団となることが求められると考え、「教職員同士が学び合う研修」をデザインする視点を常に意識している。

①合同模擬授業の実施

パイロット校事業の指定校となってから、年２回の「小中連携教育研究会」を開催し、その提案授業については、事前に小中合同模擬授業を行っている。授業者の指導意図を把握しながら、子供の目線に立って授業のめあてや思考の場、まとめなどの妥当性をみんなで吟味したり、新たなアイディアを出し合ったりする場となっている。異なる校種の職員が、各々の専門性にのみこだわらず多角的な視点から議論することで、「他者の授業が自分事」になり、共によい授業をつくっていこうとする機運の高まりにもつながっている。

【小中合同模擬授業の様子】

②合同研究協議会の実施

研究協議会の在り方についても熟議を重ね、議論し合う視点を子供たちの学びの事実とすることを確認している。

＜授業参観＞
- 参観者でグループを分担し、子供同士の関わりや表情、つぶやき、変容のきっかけ等を見取る。

＜事後の協議会＞
- 机をなくし、自由に前に出ながら、拡大指導案に付箋を貼っていく。（赤：子供の学びの姿、青：よかった点、黄：改善を要する点）
- 発表者の話題に合わせて、担当者が撮影した授業画像やノートをスクリーンに映し出し、それを生かしながら子供の学びの姿を語る。

見取った子供の姿を議論の中心とすることで、必然的に課題が浮かび上がり、指導者の教材解釈や授業中の関わり、手立て等の有効性についても検討することにつながってきている。

【合同研究協議会の様子】

このように、合同で授業をつくり、事後の協議会を行うことで、教職員こそが「学び合う集団」に近付く大きな契機となっている。「学び合う授業」の実践には、「学び合う教職員集団」の姿勢こそが問われていると実感することができた。

4　成果と課題

主体的・協働的に学ぶ児童生徒の育成を目指して実践を積み重ねてきたが、この3年間の児童生徒の意欲や主体性などに関わる意識の変容をアンケート調査の結果をもとに分析すると次のようになった。

質問項目	H27 小学5年	H30 中学2年
学校へ行くのは楽しいです。	７８	９１
授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	７４	７７
授業では、友だちと話し合うなどして、自分の考えを深めたり、広げたりしています。	９６	１００
将来の夢や目標をもっています。	９６	１００
自分には、よいところがあります。	９１	８６

【表２　同一集団による肯定的回答の割合の変化（%）】

肯定的評価は増加傾向にあり、意欲が向上するとともに、「学び合い」を通して自分の考えが拡大・深化することを実感している様子もうかがえる。

しかし、「自分には、よいところがある」と感じる子供が微減するなど、自己肯定感、自尊感情の育成は、小中学校を通しての課題であると言える。また、小学校を中心に「教科学習が好きではない」と回答する傾向もあり、子供自身の学習に対する主体的な意識は必ずしも高まっているとは言えない現状がある。主体的な学びの実現に向けて、教科で付けたい力についての振り返りを積み重ねることで自らの変容を自覚させ、学び続ける意志の醸成を図っていきたい。

5　おわりに

「学び合い」を土台とした授業づくりに取り組んで1年後、中学校の職員から「今年の中1は違う」という感想が小学校にもたらされた。課題解決に向けて、友達と協働しながら粘り強く学び合う子供の姿が、これまでの生徒たちとは異なるということだった。

異なる校種の職員が、授業改善のみならず様々な場面で共に学び合うことで、垣根を超えた同僚性の発揮にもつながり、それが小中9年間の学びの連続性として子供たちに返っていくこと、子供たちの姿が変わっていくことが実感でき、それが研究を進めていく上での大きなモチベーションとなっている。

今後も、「子供の学びと教師の学びは相似形」と捉え、全教職員がお互いに学び合い、共に授業改善に挑戦し続けることで、チーム美土里としてのさらなる「同僚性」と「学校文化」を構築していきたいと考えている。

優　良　賞

《学校部門》

輝け！秦っ子！！

～運動を取り入れた生活リズムに改善することにより、生きる力を身につける～

高知県高知市立秦小学校
校長　髙石　智恵

1．はじめに

本校は高知市の中心部から北へおよそ 2 ㎞に位置し、児童数 753 名、教職員 45 名の大規模校である。

本校の児童の多くは、何事にも前向きで意欲的である。保護者や地域の方は、教育への関心が高く、学校に協力的である。

しかし、平成 26 年度から家庭での教育力に厳しさを感じる児童や、個別の指導計画の必要な児童の割合が増加傾向にある。また、肥満率も高く、体育の授業を休みたい児童、体を動かすのが苦手な児童が多くいた。

様々な課題を背負って登校している児童を含め、どの子も社会に出て生きていける力をつけ、人生 100 年時代が充実して輝けることを願い取組を行っている。

2．課題

本校は全国学力・学習状況調査や高知県版学力調査、また新体力テストの結果において 2 極化傾向が続いている。放課後の過ごし方や家庭での学習習慣の定着度についても同様の傾向が見受けられる。

原因として考えられることは、①保護者の仕事の忙しさのため、児童の就寝時刻が遅くなり、朝起きられず、十分な朝ごはんも食べずに遅れて登校する、また、体調不良を訴え学校を休む、②家庭の養育力が十分でないため、保護者への支援が必要で、①と同じような状況がある、③テレビやゲームで過ごす時間が長く依存傾向を示しているなどである。

このような状況で登校してくる児童は、学校での生活に意欲を持てず、学習に向きづらくなり授業中落ち着けなくなる。また、友達とのコミュニケーションもうまく取れず、いわゆる「きれやすく」なり、トラブルにつながるなど様々な課題を表出している。

3．仮説

「生活習慣の大切さや体を動かすことを児童自身が意識すれば、学力も向上し、生きる力もついていくだろう。」ただし、課題を表出している児童に焦点を当てて取り組むのではなく、全体を底上げすれば、課題を表出している児童を含め、すべての児童が生きる力を身につけていくだろうという仮説を立てた。

基本的生活習慣の定着を図る取組は、学校独自では難しい面があり、保護者の協力が必要となる。保護者に対しては、生活リズムカードを児童と一緒につけてもらい、その結果を保護者に返す取組を通して意識づけようと考えた。

学校では児童自身を変革するために、運動を児童の生活に組み込んだ。日中体を動かせば、ご飯をきちんと食べ、しっかり眠り、朝すっきりと目覚めることができると考えた。そうすれば、学校に遅れず登校し、朝のスタートを全員でできる。学習にも意欲的になり、授業に落ち着いて取り組めるだろう。より良い生活習慣を身につけるため、運動習慣を身につけることから取り組むことが効果的だと考えた。

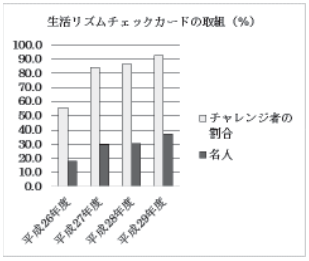
4．研究方法

⑴　基本的生活習慣の定着を図る

①　生活習慣へのモニタリング力を高める活用

㋐　生活リズムチェックカードの取組

高知県教育委員会が作成している「生活リズムチェックカード」は、生活項目ごとに、学年に応じた基準に合わせて点数が定められている。親子で日ごろの生活行動を振り返るツールとして活用した。



㋑　全員参加に向けて

平成 26 年度までは自由参加としていたが、平成 27 年度から全家庭に参加を呼びかけた。参加者数の目標値を掲げることで、年々、増加してきた。

㋒　結果のお知らせを工夫

生活リズムチェックカードの結果について、個人カードを作成し、配付している。

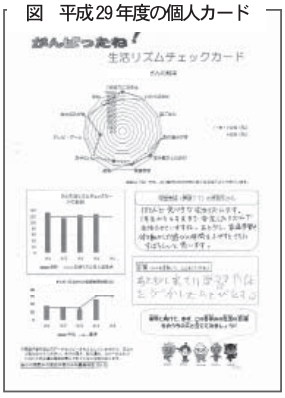
下図のように、レーダーチャートで生活項目ごとに

昨年度の結果との比較ができるようにした。

また、合計点の推移と家庭学習の時間の推移をグラフ化している。家庭学習は、校内の平均最高時間も添えた。

また、級外教員である7年の職員が、個人カードにメッセージを書き、意欲化を図っている。

図　平成29年度の個人カード



㋓　生活リズムと学力等との関係についてまとめた便りを作成し、実態に基づく指導を行い、啓発を行った。

㋔　冬休みの生活に向けた学級指導

上級学年では生活リズムチェックカードと個人カード、便りを活用して、自分の生活習慣の状況を振り返らせ、冬休みの生活の目標を立てさせた。5年生は、冬休みに再度生活リズムチェックカードを実施した。

㋕　全校児童を対象に学期はじめの1か月、朝の過ごし方の計画を立て、遅刻をせず登校した日は、学級で、人気キャラクターのパーツに色塗りをして、仕上げていくことで、達成感を持たせている。

②　出席等への早期介入による規範意識の醸成

毎朝の登校確認をすることで、児童の安全管理はもとより、家庭の状況を把握し、その困り感にも寄り添っている。特に、遅刻や欠席の多い児童には、1週間の生活リズムを振り返らせる個別指導を実施した。

⑵　体力向上の取組

①　体育の授業改善

体を動かすことを嫌がらない児童、運動好きな児童を育てることを目指して、「楽しい体育」「もっとやりたい体育」を行うために以下のことを大切にして授業づくりを行った。

- 児童の実態や学習履歴に応じた単元構成を設定する。
- 学習のねらいや進め方、約束、運動の行い方等を板書して授業を行う。
- 待ち時間を減らして運動量を豊富にする。
- 苦手な児童も行えるような易しい運動から始める。
- 安全にできる、安心してできる場や教具を設定する。
- 実態に合ったルールを設定する。
- できるようになるポイントが児童にわかるようにする。
- 即時的な肯定評価を多くする。
- 友達や仲間の良さを認め合ったり、児童自身が自分の成長に気づいたりできる場面を設定する。

②　新体力テスト結果分析の学習

全校、全学級で行う。結果をもとに、運動時間と体力合計点には密接な関係があることを知り、生活の中に60分の運動を取り入れる計画を考える学習を行う。計画後、児童に実践を促し確認を行う。

③　運動の日常化

体育授業で行った内容を休み時間に行ったり、直接的に体力の向上をねらった運動を行ったり、午後の学習への切り替えとしてけん玉を行ったりした。

- 休み時間の外遊びの奨励
- 長休み時間の「チャレンジ20ｍシャトルラン」
- 朝の会での「のびのび体操」（ストレッチ）と「にぎにぎ体操」（握力体操）
- 長縄跳び大会（学年大会）
- けん玉検定

⑶　学習基盤を強化し、学力を向上させる

①　MIM・コグトレを全校で実施

MIMとは、学習につまずきのある子どもへの多層指導モデル（MIM）のことで、早期の段階で、指導・支援を提供する学力指導モデルである。コグトレとは、「認知機能強化トレーニング」の略称で、学校や社会で困らないために3方面から子どもを支援するための包括的プログラムである。MIMを1・2年生で集中的に取組み、コグトレを全学年で、帯タイムで学習の基盤を強化している。

②　ユニバーサルデザインを意識した授業づくり

㋐　全員参加の授業づくり…「秦スタンダード」を全学級、全授業で実施。

秦スタンダード
1．本時のねらい
2．本時のまとめ
3．全員参加の工夫
4．時々笑顔

㋑　支援の必要な児童への対応について、チーム支援を取り入れた教育方法の実践を確立し、全教職員で共有し、同じ支援を行う。

㋒　発達に課題があるなしにかかわらず、「いけないことはいけない」と教える、ただし個々の子どものニーズを知り、適正な支援を行う。

⑷　自己表現を豊かにする

～音楽を楽しむ子どもの育成～

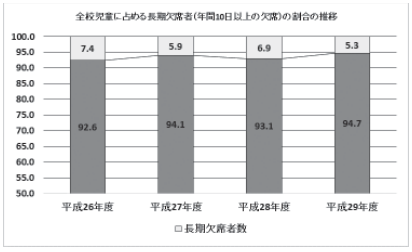
音楽科の指導では、技能の習得に終始することなく、音楽を感じとる力、愛好する力を育てていくこと、ま

た、みんなで合わせる、つくり上げる喜びを体験させることを基本とし、一人ではできない響き合い、関わり合いの大切さ、達成感の素晴らしさに気づかせる指導を行っている。

5．検証

⑴　基本的生活習慣

①　生活リズムチェックカードの推進や朝の登下校チェックとお迎え作戦及び保護者への電話連絡により長期欠席者が減少している。



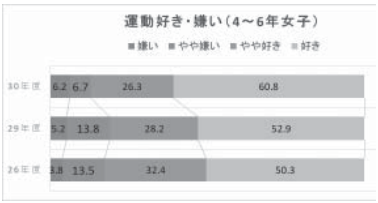
平成30年度1学期の長期欠席者数は、30日以上は0人、10日以上は0.9％と改善傾向が見られる。

②　生活リズムチェックカードの合計点と、全国学力・学習状況調査等の学力調査、Q—U、学校図書館の貸し出し数、新体力テストとの関係をみると、文部科学省等のデータと同様の傾向となった。

⑵　体力向上

①　体育の授業改善

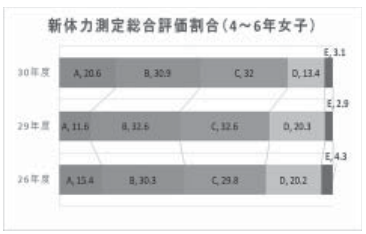
右の写真は、「体ほぐし」の授業の中で仲間と協力し達成できた時の喜びの様子である。「やった」「できた」「ほめられた」の好循環の中で、児童は体育の授業が好きになり、「もっとやりたい！」の声が増え、保健室に体育着を借りに来る児童が出現した。体調不良以外で体育の授業を見学する児童はいなくなった。その結果、資料1（高知県体力・運動能力、生活実態等調査）「運動好き・嫌い」では、平成30年度には肯定群は87.1％に増加し、否定群が12.9％に減少した。



資料1

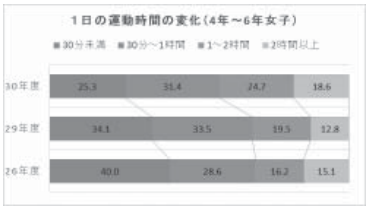
②　新体力テスト

資料2、新体力テストの結果も改善された。運動への好意的心情が育ち、運動時間が増加することにより、平成30年度にはA・B評価の児童が51.5％で半数を超え、D・E評価は16.5％に減少した。



資料2

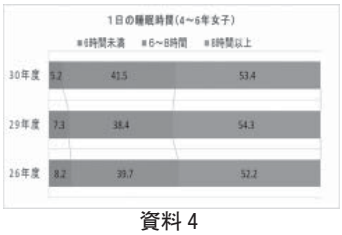
③　運動の日常化



資料3

⑦　資料3、女子の1日の運動時間は、大きな課題であった。平成26年度には30分未満が40％もあったものが、平成30年度には25.3％に改善された。女子の1日の運動60分未満の割合の改善率が全国1位となった。

⑦　資料4では6時間以上の睡眠時間の児童が増加している。運動が好きになり、運動時間が増えると、しっかり眠れる傾向にあると思われる。また、業間体育や外遊びの充実で肥満率も下がってきた。



資料4

⑶　自己表現を楽しむ子どもたち

音楽科の授業を通して、みんなで歌う、表現することを楽しいと学んだ子どもたちは、もっと上手に歌いたいと、合唱部に入部し、朝早くから活動している。結果合唱コンクールで、最優秀賞を受賞することができた。高学年になるにつれて、校歌を高らかに歌える学校になっている。

⑷　全国学力・学習状況調査より

全国正答率を「0」としたときの、本校の平成29年度と平成30年度の結果を比較すると、平成29年度に比べて、平成30年度は国語Aで1.5、国語Bで1.8、算数Aで2.1、算数Bで2.4ポイント上回った。国語A・B、算数A・B、理科とも、全国正答率を上回る結果となった。

児童質問紙において、昨年度と比較して上回った項目は「自分には良いところがある」5.7％、「将来の夢や目標を持つ」15.4％、「地域でのボランティア活動」12.1％のポイントが上昇した。

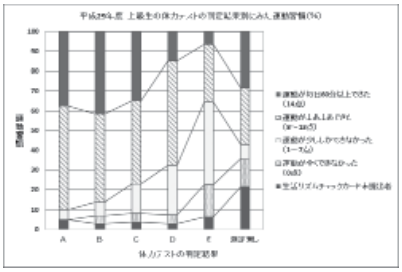
6．研究のまとめ

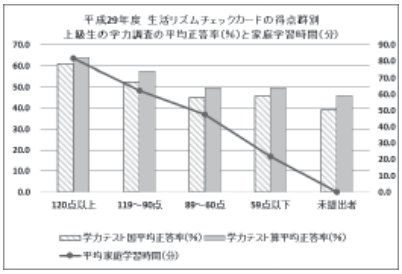
運動を取り入れて生活リズムを見直す方法を研究してきた。「運動を取り入れて」というのは本校の児童の特性に即しているものである。体を動かすことに喜びを感じた子どもたちは自ら動き始めた。例えば、午

後の授業のはじめに「けん玉」をして頭を切り替えると、5時間目のテストが「なんかできたみたい」とつぶやく児童、ボランティア活動に進んで参加し、自己有用感を高める児童など、学校のため、地域のために何かをしようとする児童が育ってきた。その結果、体力や学力の底上げができ、2極化が改善しつつある。

⑴　生活リズムと体力・学力の関係より

「生活と体力」「生活と学力」「体力と学力」の関係から検証してきた結果、いずれも個人のデータでは、生活と学力や体力の間に関係性は見られない。しかし、生活リズムの階層別にみると、生活リズムがよいグループの児童は学力や体力も高い傾向にあることがわかった。また、日中の体育的活動を増やすよう指導した結果、運動習慣を基盤とした生活リズムが改善していった。経年でみたとき、対象者は違うものの本校の肥満傾向児の出現率は、改善傾向にある。

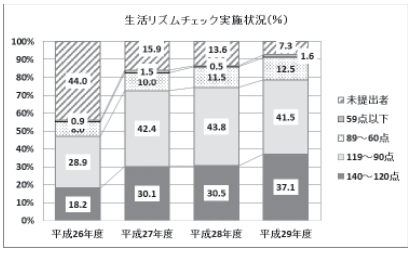




	平成26年度	平成30年度
肥満傾向児の出現率	8.8%	6.0%
高度肥満の出現率	1.3%	0.6%

一方、テレビやゲームで過ごす時間が長いのは、児童質問紙と同じ結果である。引き続き運動習慣や時間管理能力など自制心を育てる指導が必要である。

⑵　生活リズムチェックカード実施状況より



取組状況は未提出者が減り、改善傾向にある。しかし、厳しい家庭環境にある児童は提出率及び得点が低い結果となった。その中でも運動を取り入れた生活リズムを意識したA児・B児は、平成26年度から4年連続120点以上の得点を維持している。特に新体力テストではA評価であり、平成30年度の全国学力・学習状況調査において全国正答率と比較すると、国語Aに課題はあるものの、国語B・算数AB・理科では成果を上げている。

	体力	国A	国B	算A	算B	理
A児	A	-20.7	+20.3	+7.9	+18.5	+8.4
B児	A	-4.0	+20.3	+29.3	+18.5	+33.4

個人のデータとして、生活リズムが良いから学力や体力が高くなるという因果関係はないが、相乗効果を上げる傾向にあることから、生活習慣の指導・支援が行き届くよう学校でもさらに取り組む必要がある。

⑶　学年別生活リズムチェックカードの結果より

4・5年生で120点以上の得点群が最も増え、6年生になると下がる。学力や体力の結果に差が出てくるのは高学年であり、生活の自律が図られる低学年から指導することがポイントになることが再認識された。

7．おわりに

運動を取り入れて生活リズムを改善する、全児童を対象として取り組んできた方向に間違いはないと実感している。しかし、個に焦点を当てたときには、児童を取り巻く環境は厳しいものがある。休日にテレビやゲームをして過ごす、十分な朝食を食べずに登校する児童もまだまだいる。

保護者には現在の成果を伝えつつ、基本的習慣の定着の必要性をさらに啓発していかなければならない。教育力の高い地域性をうまく活用して、底上げを図る取組を継続・発展させていきたい。

児童には、家庭学習での達成感を感じられる仕組みをつくり、より良い生活リズムの習慣化を図ることが効果的であることを意識づけたい。

学校は生活習慣などの非認知能力を高めるためにも、学級経営が重要だが、経験年数4年次までの若年教員の生活リズムチェックカードの学級提出率は平成28年度78.3％(若年以外87.4％)、平成29年度は85.0％(若年以外94.7％)となっている。生活リズムをはじめ、様々な面で児童にやり抜く力を育成できるよう、引き続き教職員の指導力を高めていきたい。

優　良　賞

《個人部門》

考え、議論する道徳授業の在り方

～自分らしさを発揮し合う、対話・話し合い活動を通して～

千葉県木更津市立波岡小学校
教諭　古舘　良純

1．主題設定の理由

平成30年度4月より、道徳が教科化となった。学校現場では、「年間指導計画の見直し」や、「各教科との関連」など、枠組みに対する整備が続き、事務的な処理を中心に進められている。

しかし、「考え、議論する道徳とは何か」「評価はどうするのか」「教科書の使用法は」という、日々の授業に対してのアプローチはほとんどないと感じている。あったとしても、夏の研修における「講話」がメインであり、とても「授業づくり」とは言えない。

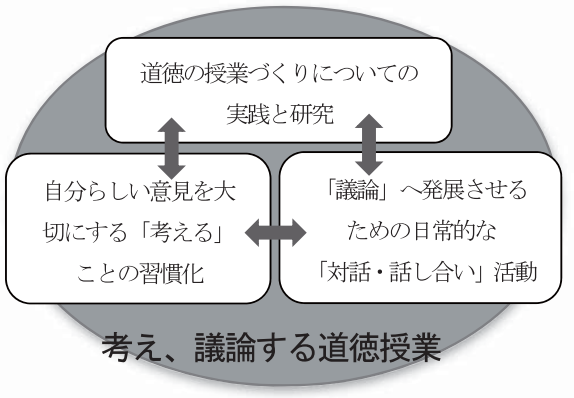
そんな中、4月に教科書が配付された。年間35時間の指導計画も明確に出された。教育現場では新しい道徳授業の在り方に、より関心が寄せられるようになった。そういった背景から、「考え、議論する道徳授業」とは何か研究してみたいと思い、本テーマを設定した。

確かなことは、週1時間の道徳授業だけで授業の精度が高まっていくわけではないということだ。「小学校学習指導要領解説　道徳編　第2章　道徳の目的」では、「学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達の段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。」と書かれている。

これを、「道徳の授業は要であるが、それを取り巻く教育活動全体で道徳教育を行っていく」と捉えた。

また、道徳授業で「考える」ことは、「自分らしさ」を発揮することであると考えている。「なぜその立場を選んだか」「どんな意見か」「どのような理由を持っているか」その全ての「考え」は、一人ひとりの心の中から導き出した自分らしさそのものである。さらに、日常的な対話・話し合い活動があってこそ、その延長に「議論する道徳」が成立すると考える。つまり、道徳の時間に議論が成立するようなコミュニケーション指導を、年間を通して行っていくことが必要であると考えた。

イメージ（関係図）は次のようになる。



2．研究仮説

⑴　45分間の授業構成を工夫すれば、児童の集中力が途切れず、思考がより続くようになり、「考え、議論する道徳」に発展しやすくなるだろう。

⑵　教師が児童の自分らしい考えを大切にする心構えを持ち、対話・話し合い活動を日常的に授業（すべての教科）に組み入れていけば、道徳においても議論が活発になり、「考え、議論する道徳」に発展するだろう。

3．研究の方法と実際

年間を通した日常的な研究実践について、⑴～⑷の4つの視点で、研究の方法と実際とをまとめていく。

⑴　授業構成の工夫

これまでの道徳授業では、中心発問（主発問）をメインとし、その前後に補助発問をしたり、中盤以降に「ゆさぶり」をかけたりするなど、45分で1つの流れができていたように思う。自分自身も、同じように授業を構成し、実践してきた。これは、1つの事柄、価値について深く考えることができ、いい意味で児童の思考に負荷を与え、考えを深めさせることができた。

反面、教師側が児童の反応や考え方を事前に想定し、思考の幅を持っておかなければ、想定外の意見に戸惑

い、授業の流れが停滞することもあった。そして、教師が強引に授業を引っ張ってしまうこともあった。

そんな中、今年度4月より教科書が配付され、評価が求められるようになった。「考え、議論する道徳」を義務づけられるようになり、35時間の年間計画に沿って授業を実施することになった。

そこで、より対話的で思考を促しやすい授業構成の工夫を行い、授業実践に生かしてみた。

それは、授業を15分3パックで構成するという工夫である。これは、菊池省三氏が実践する「一本のチューリップ」の授業からヒントを得たものである。ここでは、道徳資料としては認知度の高い、「手品師」で実際に実践した授業構成の工夫を紹介する。

授業の概要は次の通りだ。

【導入の15分】
1．手品師が男の子と「明日もまたきっと来る」という約束をする場面まで読む。2分
2．**発問①**「手品師は、男の子との約束を守るべきである」→○か×か選び、理由を書く。5分
3．自分の立場に自画像を貼り、自由に立ち歩きながら、立場や理由を聞き合う。3分
4．全体で考えを聞き合い、議論する。5分

【展開の15分】
1．手品師に友人から電話がかかってきて、大舞台でのチャンスが舞い込む場面まで読む。2分
2．**発問②**「それでも手品師は、男の子との約束を守るべきである」→○か×か選び、理由を書く。5分
3．自画像を貼り(貼り直し)、自由に立ち歩きながら、立場や理由を聞き合う。3分
4．全体で考えを聞き合い、議論する。5分

【終末の15分】
1．手品師が友人からの誘いを断り、男の子との約束を果たす場面まで読む。2分
2．**発問③**「手品師は、どうすることが一番よかったのか」→それぞれ考えて書く。5分
3．自由に立ち歩きながら、立場や理由を聞き合う。3分
4．全体で考えを聞き合い、議論する。5分

以上が、15分3パックの授業構成の概要である。資料をぶつ切りで読み、発問を3つ用意したことで、児童の考えや意見がどんどん変わったり、深く考えたりする様子が見られた（この際、児童に資料は配っておらず、先の展開は読めないことになっている）。

特に、中盤の場面では、「約束は守るべき」を貫く児童と、「場合によっては約束を破る」という児童に分かれた。価値の対立が生まれ、議論が白熱したのだ。

児童にとっては、15分ごとに考えや理由をリセットできるというメリットもあった。15分ごとに立場を変えるタイミングがあると、話し合う中で意見を再構築することができ、考え続ける様子が見られた。

授業後に感想を聞くと、「時間が早く過ぎた」「もうちょっとやりたかった」という声が聞かれた。15分を何度も繰り返すことによる充実感があったようだった。

もちろん、年間を通してこの15分3パックのスタイルだけを実践していくわけではない。別の資料では価値を掘り下げるような授業があってもよい。授業構成を工夫する1つの方法として取り入れていくとよい。

(2) 板書構成の工夫

これまで、道徳の板書は右から左に書き進めるという「授業の流れを示す」ためのものだった。「教師から児童への伝達機能」「児童のノートの補助」のための板書だった。登場人物やキーワードなどをメモするような、いわゆる「読み物道徳」としての板書だった。

しかし、筑波大附属小の加藤宣行氏は、思考を広げ深めるためにも、黒板を「情報伝達板」から「思考サポート板」にすべきだと言っている。

実践した授業の板書を2つ紹介する。

① 資料名：「手品師」（先ほど紹介した授業）

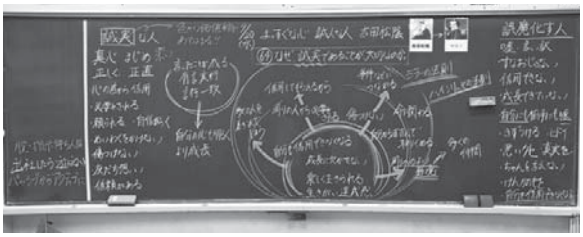
自画像で立場を明確にし、自由に対話させるときに誰がどの立場かを明確にした。黒板下半分には、全体での議論の様子をまとめ、左右に分かれて対立する構造になっている。（↓板書）

② 資料名：「吉田松陰」

「誠実とは何か」を考えた授業で、左側には「誠実

な人」、右側には「誤魔化す人」という対立を示した。その上で、黒板の真ん中には深層心理と、それを取り巻く外的要因などを描き、中心から外側へ広がっていくような構造で描いた。

①手品師の板書と違い、自画像は使用していない。立場を決めるというよりも、「誠実とは何か」というテーマを全員で深め、議論することができた。(↓板書)



以上の２つの授業のように、板書を構造的にすることで、児童はノートに板書を写さなくなった。その分、思考する時間が増え、考えを書くようになった。板書はその思考の手助けとして生かされることになった。

この他にも、折れ線グラフのように、左から右に時系列で心情の動きを表した板書や、外側から中心へ向かうような板書など、様々なパターンの実践がある。

⑶　自分らしさを発揮する取り組みの工夫

ここで言う「自分らしさ」とは、物事に対する自分の立場や、それに伴う意見、理由のこととする。

道徳の時間に立場決定をさせるため、日頃から立場を決める「意思決定の場」を設けたり、そういった授業づくりを心がけたりする必要がある。その中で、考えることを習慣化させ、週１時間の道徳授業につなげることが重要ではないかと考えた。

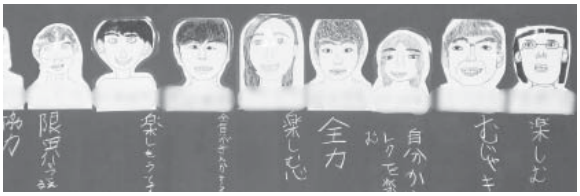
ここで紹介するのは、一人一人が自分の考えを持つための手立てである。人に流されずに「自分らしい考え」を持つこと。そして、違う考え方を受け入れ合うような学級づくりについて、２つの実践をしてみた。

①　自画像を使って参加意識を高める

子どもたちの自画像を使うだけで、より温かみのある空気が醸し出され、一人一人をより大切にしている黒板になる。また、「その子が言っている」ようにも感じる。自画像とセットで意見を板書すると、言葉(意見や理由）が他人事ではなくなるのだ。

例えば、「学級の成長しているところを書こう！」という課題を朝のうちに黒板に書いておき、登校した児童から書かせるようにしておく。

このように、自画像を使って日常的に自分の考えを発信すると、次第に自分の考えをきちんと持てるようになっていく。年間を通して仕組むことで、児童同士がお互いの考えを認め合い、安心して意見を言えるようになっていった。(↓日常的な自画像を使った指導)



②　指名の方法を工夫する

これまで、「わかる人？」「言える人？」という教師の問いに対する、「挙手→指名」のような構図が、教室の「当たり前」だった。できる子が答え、積極的な子が目立つ。そういった構図である。

もちろん、こうしたやり取り自体が悪いわけではないが、こうした授業を続けることが、「考え、議論する道徳」に直結するのだろうか。そこに自分らしさを発揮するような効果があるか考えてみた。

目指すゴールは、より多くの意見を出し合い、多様性を認めていくような授業を３５時間かけて作り上げることである。そう考えるのであれば、全員が考え、全員が発言できるシステムを生み出す必要がある。

そこで、指名方法を工夫し、全員の発言を引き出すための方法を実践してみた。その方法は次の３通りの指名方法である。

- **列指名 ・・・ ある列を立たせ、順に考えを述べさせる**
- **班指名 ・・・ ある班を立たせ、順に考えを述べさせる**
- **自由起立 ・・・ 言える子から順に立って考えを述べさせる**

１学期は、列指名や班指名をして、ある程度教師主導の中で発言させていった。強制力の強い指名方法である。その都度、「考えは違っていいのだ」「考えが違うから話し合うのだ」「同じ立場だって、理由はそれぞれ違うよね」と、児童の行為を価値づけ、考えることは「自分らしい」ことであるという指導を積み重ねた。

２学期以降は、列指名と班指名に加え、自由起立で発言させていくようにした。教師が間に入るのではなく、児童の発言に、他の児童がダイレクトに質問したり、反論したりするようなやりとりを生むためである。

自由起立に慣れてくると、積極性のある児童がきっかけとなり、他の児童もどんどん議論に加わるようになる。教師の「指名」「コーディネート」の時間が減るにつれ、議論のスピードも加速する。自然に「考え」が変わったり、深まったりしていくようになった。

ある子は、授業後に「みんなの話し合いを聞いているだけで、僕も発言したくなった」と答えてくれた。

⑷　対話・話し合いを日常化する取り組みの工夫

考え、議論する道徳の肝は「自由に立ち歩く」ことであると考えている。古舘学級では、対話・話し合いをする際には、席を離れて自由に立ち歩いてよいということになっている。それはなぜか。

隣の人が同じ意見だったら議論に発展しない場合があるからである。さらに、算数などで、隣の友だちが終わっていても、離れた席の友だちが終わっていなければ教えに行けるからである。

道徳における議論も同じである。全体で議論する場合と、少人数で議論する場合がある。そうした時、頭を突き合わせて議論した方が白熱するだろう。つまり、児童同士の物理的な距離が近いほうがよい。だからたち歩かせる中で対話・話し合いを生むのだ。

しかし、年間 35 時間だけでそういった状況を生むことは難しい。だからこそ、年間各教科を通して、対話・話し合いを日常化していく必要があると考える。

そのための工夫を 2 つ実践した。

①　黒板を開放する

板書構成の工夫でも述べたように、黒板は「思考をサポートする場」であるべきだと考えている。よって、黒板は対話・話し合いの媒体となるべきであり、全ての教科で、教え合いの場になっていくべきだと考えた。

この黒板の開放は、算数において特に効果を発揮し、「人が集まりやすい」「思いついたことをすぐに書ける」「みんなで見ることができる」など、メリットがたくさんあった。

道徳授業においても、自画像を貼ることで授業への参加意識が高まり、黒板を見ただけで話し合う相手が決まるなど、黒板を介したコミュニケーションが生まれるようになった。（↓黒板前で話し合う児童）

②　自由に立ち歩かせる

「立ちましょう」「ノートを持って、話し合おう」と言う指示を毎時間出すようにした。自由な話し合いの回数は、年間 2000 回（1 日 10 回以上）を越える。新指導要領でキーワードになっている、「主体的・対話的で深い学び」に迫る最も有効な手立てになると考える。

席を離れて話し合いに行くからには、自ずと主体的にならざるを得ない。もちろん、対話的にもなる。

そのために、回数を重ねることと、その「立ち歩き」に、教師の価値づけをすることが必要になる。立ち歩かせると、「騒がしくなるのでは」というデメリットも生まれるからだ。それは、ねらいを明確にし、児童に伝えてくことで回避できる。決して立ち歩くこと自体の方法が悪いとは言えない。教師から、

・意見を聞く時間です。休み時間ではありません。
・聞いたらメモします。単なる散歩ではありません。
・対話をします。「一人」をつくらないようにしなさい。

など、事前指導をすることで、十分管理できる。実際、話が横道にそれ、ふざける様子は、回数を重ねるごとに減っていった。

そして、立ち歩いて対話し、話し合うことの価値を感じ始めると、自分たちでどんどん話し合いを白熱させていくようになる。だからこそ、道徳の時間においても「議論」が成立していくようになったのだ。

4．成果と課題

道徳授業が劇的に変化した。児童が主体となり、教師は板書に専念するような授業だ。教師が話さない分、児童の対話が増え、議論が白熱するようになった。

また、その議論を支える年間を通した取り組みの成果が見られた。「考えの違う人との対話を厭わないような人間へ成長した」ように感じている。これが、一番道徳的な成長かもしれない。

課題は、学校として全校実践にし、6 年間を見通した道徳授業をしなければならないということだ。今回は、古舘学級のみの実践であり、効果が表れてきたのは 10 月以降である。

児童相互の人間関係づくり、対話・話し合いのスキル指導、その場数を踏ませることなど、やはり半年以上の時間がかかる。これを、どの学年でも実践することができれば、次年度へのつながりもできるだろう。

【参考文献】

・道徳授業原論　（日本標準）深澤久 2004
・道徳授業の教科書　（さくら社）野口芳宏 2014
・考え、議論する道徳に変える指導の鉄則 50
（明治図書）加藤宣行 2017
・1 年間を見通した、白熱する教室のつくり方
（中村堂）　菊池省三 2016

優　良　賞

《個人部門》

身近な生活と社会をつなぎ多面的・多角的に思考できる生徒を育成する技術・家庭科教育

～『電気エネルギー変換に関する技術』の授業づくりと評価の工夫～

香川県三豊市立詫間中学校
教諭　丸岡　正則

1　はじめに

社会は豊かになり、価値観の多様化がさらに進む。一人一人の個性を活かした生き方が可能になる一方、問題解決力や自己判断力が求められる傾向にある。身近な生活の様々な事象を多面的・多角的に捉え、自分の考えをしっかりと持ち､他とつながることを通して、たくましく生きる力を身に付ける必要がある。

豊かで快適な生活を持続するために、効率の良いとされる原子力発電に支えられるエネルギー政策が、問い直されつつある。環境問題を考えると、再生可能なエネルギーの開発や電気エネルギーの有効利用など、解決すべき問題への対応に直面している。

2　研究のねらい

⑴　生徒の実態

生徒は日常生活での様々な経験が少なくなっており、技術の授業においては、「何のために」「何をすべきか」といった、必要感や課題意識を持って活動することが十分ではない。そのため過程よりも結果に固執したり何かを模倣したりしがちで、自ら考えながら創造することに、喜びや意義を感じている生徒は少ないとも言える。問題に直面した場合でも、友だちとかかわり合いながら解決する学習を避け、できなければ、すぐ教師に援助を求めようとする傾向も見られる。

⑵　研究主題設定の理由

新学習指導要領では、主体的に考え行動し生活を拓くことのできる生徒の育成が掲げられている。本研究では、生徒に社会とのつながりを意識させることで、「自分は○○だからこう思う」「自分は○○なのでこう考えた」など、新しい気付きや思考をゆさぶる授業が可能になると考えた。教師が教科観をしっかりと持ち、生徒の意識変容を大切にした指導と評価が工夫できれば、新しい学びに転換できる。

⑶　研究仮説

身近な生活と社会をつなぎ、必要感や好奇心を持って多面的・多角的に思考させる授業ができれば、生徒は学ぶ意義や楽しさを実感できると考えた。

3　研究内容

⑴　多面的・多角的な思考を意図的に促す指導

技術分野の目標は『技術の見方・考え方を働かせ、ものづくりなどの技術に関する実践的・体験的な活動を通して、技術によってよりよい生活や持続可能な社会を構築する資質・能力の育成を目指す』と新学習指導要領に明記されている。

そこで、生徒が社会と身近な生活のつながりを気付き、必要感や課題意識を持って多面的・多角的に思考することで、より深い学びになると考えた。

◆多面的とは→【いろいろな方面から考えを深める】
◆多角的とは→【異なる視点から検討する】

教師が多面的・多角的な視点で生徒の思考の背景を探り、指導に生かせるように以下の配慮をした。

【生活体験や既習の学びから、思考させる発問】
【思考をゆさぶり、さらなる思考を促せる発問】

⑵　生徒の資質・能力を観点別評価

新学習指導要領では目指す資質・能力を『知識及び技能』『思考力、判断力、表現力等』『学びに向かう力、人間性等』と明記され、全教科において３観点で評価することになった。今回の改定での最大のポイントと言える。これまで以上に、それぞれの教師が教科の垣根を越えて、生徒一人一人の意識変容を見取る評価ができる。

そこで本研究では、技術分野『エネルギー変換に関する技術』において、題材『電気エネルギー変換に関する技術』を２年生対象に指導計画（23時間）で実践した。尚、評価の観点は本校で実施している現行の４観点で評価した。授業づくりでは、生徒が自己の思考に気づき、次の課題へ意欲が持てるように以下の配慮をした。

【社会や身近な生活と授業の学びを関連付けた評価】
【生徒の多様な表現から意識変容を見取る評価】

4　研究実践

⑴　社会と生徒がつながる新聞記事の活用

生徒が社会への興味・関心を持つきっかけになるタ

イムリーな新聞記事を随時授業で活用する取組を17年前から継続しているが、新聞は社会を見つめる窓だと実感している。情報を鵜呑みにするのではなく、多面的・多角的に思考することで、これまでの自分の考えを問い直し、新たな意見を取り入れることの大切さに気付いた。相手に理解してもらおうと、分かりやすく整理して発表することで、思考をさらに深めることができた。

①　定期テストで身近な新聞記事を活用

既習の学びを活用する力を評価するために、授業では紹介していない記事を出題した。

市の新鋭ごみ処理施設 微生物でゴミ再資源化

煙突も焼却炉もない施設

－毎日新聞 2017 4/1 抜粋－

この施設では家庭や事業所などから出る可燃ごみを発酵し乾燥させ，固形燃料の原料としてリサイクルすることができる。国内でも先進的な方式という。CO_2の排出を抑えダイオキシン類も発生しない。

問１：この新技術の良さについて書きなさい。
（以下、枠中の生徒文章から仮説を検証）

【興味・関心の観点評価】［10 × 12 行 配点；5 点］

○この技術は微生物で発酵させ、燃やさないのでCO_2の排出を抑え、（中略）地球温暖化を進めないすばらしい技術です。→環境対策で多面的思考
○可燃ゴミを燃やすのでなく、固形燃料の原料としてリサイクルし、（中略）人の役に立つように生まれ変わらせてすごいと思います。→多角的思考

問２：この技術の新たな改善方法を書きなさい。

【創意・工夫の観点評価】［10 × 12 行 配点；5 点］

○発酵すると異臭がでると考えられた。（中略）、対応策を考える。→既習事項をもとに多面的思考
○詫間中学校では、リサイクル活動をしています。しかし、回収できない物が混入していることがあり、放送で呼びかけています。だから、自分が自治会で出すときには、燃えるゴミだけにして、金属は混入しないように分別します。→多面的思考

実際に事業所が苦慮していることの改善策を、身近な生活と結びつけて考えた生徒もいた。このような解答例を授業で紹介することで、他の生徒の思考がさらに深まり、紹介された生徒の良さも称賛できた。

②　他教科の内容と関連づけた授業づくりの有用性

社会とつながる授業づくりを進めていくと、地球温暖化の要因の一つであるCO_2の排出については、理科、社会科で学習していた。発酵は、国語科「食の世界遺産－鰹節－」家庭科「みそ汁の調理」理科「消化器官のはたらき」などにも関連教材があった。教科横断的な視点で授業づくりをしたことで、生徒は学ぶ意義や根拠をもって思考できた。

③　教師の授業に対する意識の高揚

この新聞記事に掲載された事業所と市環境衛生課へ電話をし、新聞記事には書かれていない多くの情報を得た。事業所の技術者が熱意を持って、多くの難問を解決しながら技術開発している様子を生徒に伝える事ができた。地域社会と授業を関連づけた教材開発の意義や価値を教師自身が実感し、その思いを授業づくりに生かせた。

⑵　電力会社との交流授業（５年間継続）

電気はスイッチ一つで簡単に使えるために、生徒には実感があまりない。本年度は夏場の電力需要が増える７月に、電力会社の広報担当者を迎え『電気を身近に感じ安全に有効利用する』授業を実施した。校内研修の一環として授業を公開したため、理科、社会科の教師も授業を参観した。

①　学校生活から課題意識を持たせる工夫

導入時では、本校の電力使用量の推移が分かるデータを提示した。自分たちの身近な学校生活から課題を意識させることで、学習の意欲付けになった。

②　実験したことから思考を深める工夫

電磁誘導のしくみは理科でも学習するが、電力会社が準備した簡単な実験器具で、すぐに理解できた。

本県は水力発電ができないため、蒸気を発生させて、タービンを回す火力発電が主流である。水力発電ができない理由は、社会科「気候と地形」でも学んでおり容易に意見がでた。技術科では電力会社が、準備した圧力鍋で作った実験装置を用いたので、発電のしくみが体感を通して理解できた。

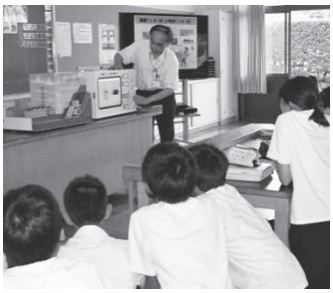
③　見えない電気を実感させるための工夫

電力会社が準備した手回し発電機で、生徒が苦戦しながら発電したが、蛍光灯１本分の 1/1000 しか発電できないことを知って驚いた。

また、発電所 (50 万Ｖ) から各家庭 (100 Ｖ) までの送電経路は、保安上の問題もあり公表しづらい内容であったが、可能な範囲で説明を受けた。

このとき生徒は高電圧の鉄塔に使われている送電線の実物見本を手に取りながら、何箇所もの変電所を経由さて安定供給している多くの人たちの苦労を身近に感じた。

④　電気をより安全に取り扱う体験活動



復旧方法を学ぶ生徒

生活に便利な電気だが、取り扱い方を間違うと重大な事故になる。そこで、家庭にあるブレーカを大きくした実験装置を教室に持ち込み、停電や漏電時の復旧方法を学んだ。

普段の授業では控え目な生徒だが、自ら挙手をして復旧操作に挑んだ。手際よく終えると、友だちから感嘆の声が上がり、拍手をもらった生徒の表情が良かった。授業後、その生徒に感想を聞くと「ここで自分が操作しないと、後悔する」と言ったので、専門家を招いた甲斐があった。

⑤　身近な電気製品から省エネへの意識づけ

学校にある簡易な電力計を使い、教師がLEDライト（4.3 W）と教室の黒板ふきクリーナ（340 W）を比べて表示した。さらに、教室のエアコンの電力（4000W）を伝えると驚きの声がでた。

液晶テレビは省エネだと思っていたが、技術室の大型液晶テレビ（101 W）は､意外と省エネではなかった。家電製品を選ぶ時には、安全性、環境負荷、経済性などに着目して、多面的・多角的に検討することの大切さに気付いた。さらに、液晶テレビの主電源を切ると（0 W）だが､常時電源が入っていると待機電力（0.4 W）が消費されることも確認した。

新しい製品は技術の改良が進み、待機電力が大幅に削減され、省エネになっていることにも気付いた。しかし、この0.4 Wをどう意識するかで、省エネが決まることを押さえた。

⑥　授業後の生徒アンケート結果（４段階中最上位）

【電気を身近に感じられた → 74.1%】
【電気を安全に利用したい → 89.1%】
【電気を有効利用したい　 → 93.1%】

各項目とも高い評価を得た。電力会社の担当者が、実物見本や実験装置を使い、電気をわかりやすく伝えようとする熱意が伝わった。専門家と生徒をつなぐことで生徒の意欲も高まり、思考の深まりを実感した。

⑶　長期休業中の実践レポート

既習の学びを家庭や社会と関連づけて活用させるために、実践レポートにまとめている。各学年で段階に応じた課題を設定して取り組んでいるが、学年が上がるに応じて思考力、表現力が向上している。

①　既習の学びを家庭生活で実践化

夏休みには『わが家の電気の安全と省エネについて』【Ⅰ～Ⅲ：電気の安全・点検】と【Ⅳ、Ⅴ：電気の省エネ】について実践させた。

【Ⅰ：漏電の有無を漏電遮断器で点検】
【Ⅱ：配線用遮断器の個数と接続場所を確認】
【Ⅲ：たこ足配線、トラッキングの点検と対処】
【Ⅳ：電気使用量を５日間設定し、電力量計で計測】
【Ⅴ：家電製品の表示から、消費電力を確認】

> ○エアコンの消し忘れをなくすには、タイマーを使ったら、（中略）であった。家ではエアコンの設定温度を家族で話し合いたいです。→省エネの実践
> ○トラッキングは、手入れ不足で起こることが分かりました。親と一緒に手入れしてみると、簡単に出来たので、定期的に手入れしたいです。→点検の実践

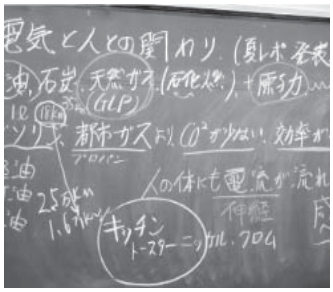
１学期に電力会社との交流授業で学んだことを、家族と関わりながら実践する良い機会となった。

②　実践レポート発表会における評価の工夫

夏休み明けの授業では、友だちの多様な情報から深く思考させるために、一人１分程度のレポート発表会を２時間配当で実施し、観点：Ⅰ～Ⅲで評価した。

【興味・関心の観点：Ⅰ→何をどう調べ、気付きへ】
【創意・工夫の観点：Ⅱ→新たな課題、今後の生活へ】
【技能の観点：Ⅲ→発表の仕方、レポートのまとめ方】

> ○自分とは違う節電対策を（中略）していて、こんなに簡単に節電ができることが分かり、自分でもしていこうと思いました。→観点Ⅱ；省エネの実践



レポート発表会の板書

生徒の発表を教師が関連づけて板書し視覚化することで、思考を深めることができた。発表を通じて、友だちと交流することで、多様な情報から多面的・多角的な思考が持てるようになった。さらに、家族を巻き込んで、意欲的に実践した生徒も教師の予想を上回った。

③　既習の学びを社会や身近な生活とつなぐ

冬休みには生徒の主体性を重視して、新聞以外の情

報源Ⅰ～Ⅲで選択(複数可)し、「電気と人の関わりについて」レポートした。

【情報源：Ⅰ→イベントや体験会への参加：3人】
【情報源：Ⅱ→新聞、本や雑誌から：17人】
【情報源：Ⅲ→ネットから：59人】

○私の家に太陽光がつきました。それがＣＯ２を出さないことをイベントに参加して知りました。これを機会に（中略)、節電をしたいです。→情報源：Ⅰ
○世界では14億人が電気を使えない。電力の79%が化石燃料など、(中略)。地球温暖化を防ぐ方法をみんなで考えなければなりません。→情報源：Ⅱ
○エジソン電球が120年前に発明された。電気が使えるようになったのは最近で（中略)、使いやすいけれど環境を考えると節電したいです。→情報源：Ⅲ

発表会では、自分の言葉でまとめた考えを友だちへ伝えようとする姿が見られた。イベントなどに参加し、地域社会へつながる生徒が少なかった。

⑷　学習成果を見取る観点別評価の工夫

教師がⅠ～Ⅲの評価観点を設定した項目から、生徒が選択（複数可・該当項目に○を記入）し、学習の振り返りをワークシートに記入した。

【Ⅰ：意欲・関心→気付き、次への課題など】

○これからは、もっと節電して年々増えている詫間中学校の電力使用量を減らしたい。→次への課題
○いろいろな発電方法には、メリットとデメリットがあって、大変だと思いました。→多面的な気付き

【Ⅱ：知識・理解→分かったこと、できたこと】

○いろいろな実験装置や実物見本があったので、(中略）わかりやすかったです。→より深く理解

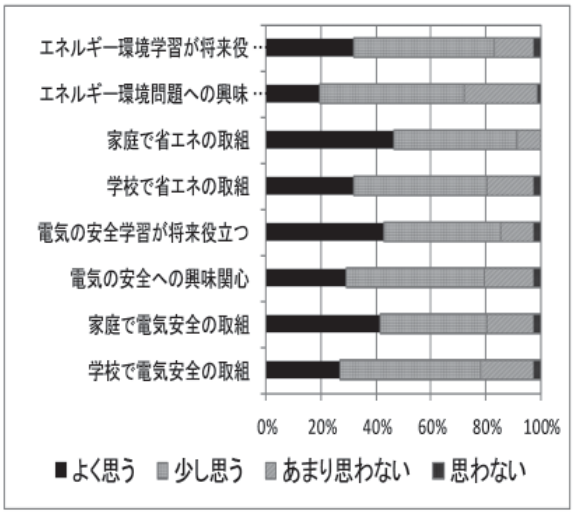
【Ⅲ：創意・工夫→身近な生活、社会との関わり】

○自分の部屋の電気の使い方を見直し、少しでもエコになるように使います。→家庭で省エネ意識化
○ブレーカが落ちたときに、いつも親に任せていたけれど、今日学んだことを生かして、自分で見に行くようにしたいです。→安全点検への実践化
○もっと、簡単で安全な方法で環境にも良い発電ができたらと思いました。→社会との関わりで意識化

教師は生徒がどの項目を選んで記入したか、把握して評価できたので、生徒の意識変容を効果的に掴むことができ、次の授業づくりに生かせた。

5　研究成果と今後の課題

⑴　成果



授業後の意識調査：2年87名対象

各項目で（よく思う、少し思う）と回答した生徒が80%程度となった。しかし「エネルギー環境問題への興味」「学校で省エネ」の項目で（よく思う）と回答した生徒が少なかった。

○社会と身近な生活をつなぎ他教科とも連携し、問題意識や必要性をもたせたことで、生徒の思考力や表現力が高まった。
○多様な他者や友だちとの関わりの中で、多面的・多角的に思考させることで、自己理解を深め新しい課題への意欲が喚起できた。
○学習の振り返りを観点別に分析・評価することで、生徒の意識変容をより良く把握でき、具体的な授業改善につながった。

⑵　課題

○深い学びのある授業を構築するためには、友だちとの対話活動や体験的な学習を意図的に仕組む。
○学校図書館司書、地域の図書館などと連携し、調べ学習や問題解決の仕方を身につけさせる。
○新学習指導要領では、学びに向かう力、人間性等が重要となるので、道徳教育との関連づけを図る。
○教師自身が社会と積極的にかかわる姿勢をもち、とことん生徒と向き合う職員集団づくりを目指す。

おわりに

「教師がやってみせ言って聞かせて、生徒の後ろ姿を見守って、信頼すれば生徒は育つ」を痛感した。研究とは、未来ある生徒のために、教師の資質・能力を向上させるべきものである。

優　良　賞

《個人部門》

新学習指導要領への移行期における英語授業改善

～「やり取り」・「即興性」を意識した言語活動～

徳島県吉野川市立鴨島東中学校
指導教諭　着藤　文恵

1　はじめに

中学校新学習指導要領は、平成33年度から全面実施され、今は移行期にあたる。新学習指導要領は、次のように書いている。

外国語科の目標は、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力を明確にした上で、①各学校段階の学びを接続させるとともに、②「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするという視点から改善・充実を図るものとなっている。

外国語科の英語における内容については、互いの考えや気持ちなどを伝え合う対話的な言語活動を一層重視する観点から、「話すこと［やり取り］」の領域が設定された。その領域における目標を達成するための重要な条件として「即興で」が掲げられている。「即興で伝え合う」とは、不適切な間を置かずに相手と事実や意見、気持ちなどを伝え合うことである。やり取りを行う際は、相手の発話に応じることが重要であり、聞き手が理解しやすいように、限られた時間で話す内容をまとめたり、それに関連した質問や意見を述べたりして対話を継続・発展させなければならない。

以上の改訂の要点に、私の授業を照らし合わせたとき、授業改善を図らなければならないと感じる。

私は、今まで、コミュニケーションの相手を意識した言語活動を重視し、生徒が主体的に英語を使って「何ができるようになるか」に重点を置いた授業を行ってきた。しかし、「話すこと」の領域においては、［発表］に関する言語活動が多かったように思う。私は、すべての生徒が達成感を十分持てることを目指すあまり、話すための原稿を事前に用意してその内容を覚えて、話せるように練習させるなど、準備時間をとらせることが多かった。それは、生徒が「書くこと」という難しいハードルを越えてから、覚えて「話すこと」を行う手順である。しかし、実際の場面では、話し手と聞き手の役割を交互に繰り返す双方向のコミュニケーションの機会が多い。私は実際のコミュニケーションの場面を十分に考えられていなかった。そこで、私は、「話すこと［やり取り］」の領域における「即興性」を高める指導に重点的に取り組むことにした。

2　「即興性」を高める一連の指導

中学校卒業時の到達目標の１つには、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。」がある。

私は、その学習到達目標を評価するものとして、ディベートやディスカッションなどの言語活動を考えている。それらは「即興性」が大きく求められる言語活動である。ディベートやディスカッションなどに繋げていく言語活動として、授業最初の帯活動にチャットを取り入れることにした。そして、チャットができるようになるためのインプットに重点を置いた事前の活動として、弾丸インプットを行い、さらには、チャットに取り組んだ後の評価まで、一連の指導の流れを考えた。

3　活動１：「弾丸インプット」

⑴　活動のねらい

生徒にいきなり「何でも話しなさい。」とチャットを行わせるのでなく、相手に配慮したり共感したりしながら、対話を継続・発展させるスキルを具体的に教えて練習させる必要がある。

そのスキルを習得させるためのインプットとして、「弾丸インプット」を取り入れることを考えた。したがって、「弾丸インプット」には、チャットに必要なスキルを盛り込んだ、実際に起こり得る自然な流れの対話が題材になっていることが前提となる。

⑵　指導の工夫

①ペアについて

・教室の席で４人グループを利用する。（学級で決まった班がある場合は、編成をそのまま使う。）席のままで、縦ペア・横ペア・斜めペアを使ったり、席を離れて自由にペアを組んだりする。いつも同じ相手にならないようにする。

②やり方について

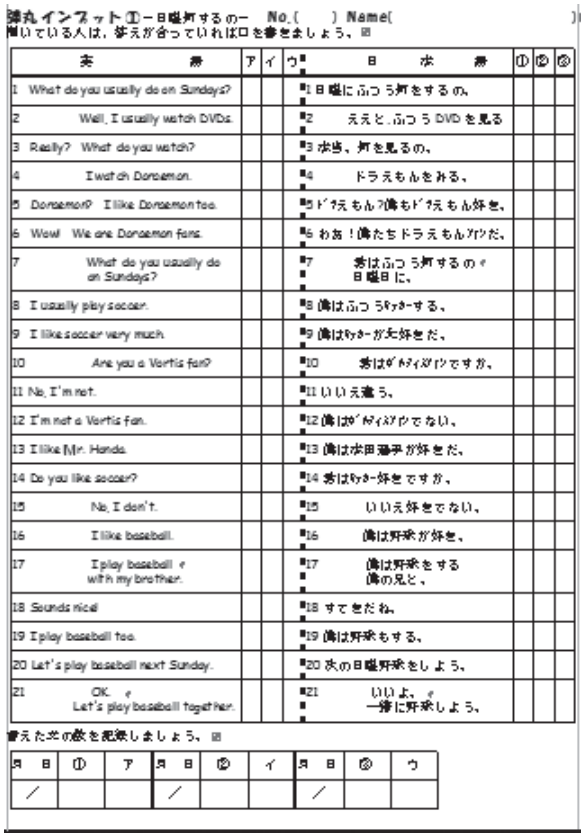
・一斉の繰り返し練習や個人練習を行った後、点線部分で山折りにした各自のシートをペアと交換する。じゃんけんで誰が言うか決め、一人は起立して日本文または英文を言い、他方は座ったままでペアが言う文が正しいか聞いてシートに○を記入する。（２回目は◎を記入）
・立った生徒は、まずシートの英文のページを見て、その意味を１分間日本文で言う。一通り上から下まで言い終えたら、２回目・３回目と１分間言い続ける。次は､座っていた生徒が行う。
・両者が終われば、もう一度元の生徒が立ち、次は日本文のページを見てその英文を言い、１分間ずつ同様に行う。
・言う際は、相手に聞こえる声を出すことに留意し、わからない場合は「～番パス。」と言う。
・二人が日本文・英文とも言い終わったら、ペアの○の数を得点として書き、相手にシートを返すとともに、言い間違えていた箇所を教える。
・１枚のシートを３回（１日１回ずつで３日間）使い、２回目が１回目より、また３回目が２回目より得点が多ければ、ボーナスポイントをもらう。（授業で使用の各自のポイントカードに）

③「弾丸インプット」シートについて
・チャットに必要なスキルを盛り込んだ対話形式の内容になっている。（必要なスキルについては、４⑵で述べる。）
・後で行うチャットの内容に類似し、実際に起こり得る自然な流れの対話が題材となっている。

⑶　活動の実際

１回目は、特に英文を多く言うのが難しい生徒がいたが、２回目、３回目となると、それまで言えなかった英文が言えるようになっていった。また、いつも順番を１番から始めさせると、終わるところが同じで言えない文が同じになってしまうので、ときには途中からスタートさせるのも効果的だった。１分間の時間制限の中でたくさん言うという目標が、素早くたくさん英文を言うことに繋がった。また、実際に起こり得る流れの対話の中で、どんな既習の英文が使えるか実際の良い例文になったと思われる。

しかし、言えない英文がずっと言えないままになった生徒がいた。一斉練習で難しいところや間違いに着目させて、個別でも言う練習を行わせ、生徒が使える英文のインプットを増やす必要がある。それに、言わせることでインプットになったと思うが、実際に「チャット」で使えるまでに高まったかどうか疑問が残る生徒もいた。


弾丸インプット①－日曜何するの－　No.(　　) Name(　　)
聞いている人は，答えが合っていればロを書きましょう。

英　　語	ア	イ	ウ	日　本　語	①	◎	◎
1 What do you usually do on Sundays?			1	日曜にふつう何をするの。			
2 Well, I usually watch DVDs.			2	ええと..ふつうDVDを見る			
3 Really? What do you watch?			3	本当、何を見るの。			
4 I watch Doraemon.			4	ドラえもんをみる。			
5 Doraemon? I like Doraemon too.			5	ドラえもん?僕もドラえもん好き。			
6 Wow! We are Doraemon fans.			6	わあ！僕たちドラえもんファンだ。			
7 What do you usually do on Sundays?			7	君はふつう何するの〃日曜日に、			
8 I usually play soccer.			8	僕はふつうサッカーする。			
9 I like soccer very much.			9	僕はサッカーが大好きだ。			
10 Are you a Vortis fan?			10	君はバティスファンですか。			
11 No, I'm not.			11	いいえ違う。			
12 I'm not a Vortis fan.			12	僕はバティスファンでない。			
13 I like Mr. Honda.			13	僕は本田選手が好きだ。			
14 Do you like soccer?			14	君はサッカー好きですか。			
15 No, I don't.			15	いいえ好きでない。			
16 I like baseball.			16	僕は野球が好き。			
17 I play baseball 〃 with my brother.			17	僕は野球をする〃僕の兄と、			
18 Sounds nice!			18	すてきだね。			
19 I play baseball too.			19	僕は野球もする。			
20 Let's play baseball next Sunday.			20	次の日曜野球をしよう。			
21 OK. 〃 Let's play baseball together.			21	いいよ、〃一緒に野球しよう。			

答えた文の数を記録しましょう。

月　日	①	ア	月　日	◎	イ	月　日	◎	ウ
／			／			／		

４　活動２：「チャット」

⑴　活動のねらい

「チャット」は、教師主導でなく、生徒が主体的に、相手を配慮しながら即興で話す言語活動である。情報や考え、気持ちなどをやり取りすることによって、相手について知ったり自分のことを知ってもらったりして、内容のやり取りをするコミュニケーションを楽しむことが、その大きなねらいである。限られた時間で即興的に伝え合い、どちらかと言えば、正確さよりも流暢さに重点が置かれ、使用する言語材料も限定されない。よって、既習の文法事項や語彙などを使用できるように活性化したり、言いたくても言えない英文を辞書無しでどう表現したら伝わるかチャレンジしたりすることも、「チャット」のねらいの一つである。

⑵　指導の工夫

①ペアについて
・教室の席で４人グループを利用する。（学級で決まった班がある場合は、編成をそのまま使う。）席のままで、縦ペア・横ペア・斜めペアを使ったり、席を離れて自由にペアを組んだりする。いつも同じ相手にならないようにする。

②やり方について
・教師がALTや生徒とモデルチャットをやって

みせる。その内容は、生徒がおもしろいと感じる題材で話したり、豊かな話しぶりを披露したりする。生徒が、チャットは難しいかもしれないけれど、興味を持てるようにする。

- チャットシートを3回（1日1回ずつで3日間）使用し、1つのトピックで3回、それぞれ異なる相手と話す。
- 3つの目標があり、その一つは対話を継続・発展させるスキルを使うことである。チャットを行う前に、必ず使うべきスキルを確認したり使ってみたりする。そのスキルとして使える表現集を1枚のプリントにまとめ、4月の授業開きで提示し、普段の授業から使うようにする。
- チャットはあいさつで始め、トピックの文で会話を深めたり広げたりし、お礼や感想で終わる。時間は1分間から始め、慣れたら時間を延ばす。
- チャットの前に、ヒントの例文などを参考に、自分が使いたい文を書いたり、終わった後に、相手が使った文を参考に、次回使いたい文を書いたりしておく。
- 終わったら、シートの記録欄に記入する。

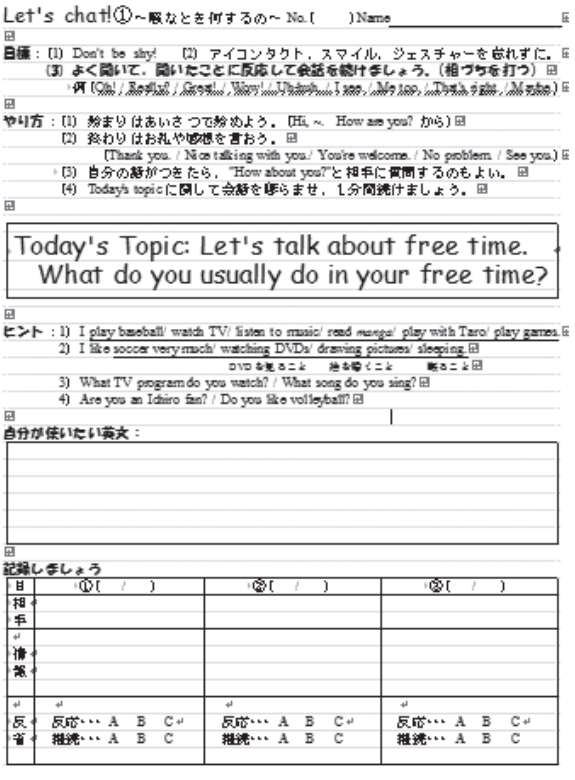
③「チャット」シートについて

- 生徒に使わせたい必要なスキルとその例文がいくつか示されている。スキルは「相づちを打つや相手が言った言葉を繰り返すなどのリアクションをする・質問に対して1文付け足して答える・質問する・相手が興味を持つようなことを話題にする」などである。
- シートには、「目標・やり方・トピック・ヒント例文」が書かれており、生徒が「自分が使いたい英文・記録欄（日付・相手の名・情報・反省）」を記入する欄がある。情報は、チャットの中で相手についてわかったことを書き、反省は、自分が反応と継続においてどうだったかについてABCのいずれかに○をつける。

⑶　活動の実際

生徒たちは、自由に生き生きと話し、話すことを大いに楽しんだ。対話の入口を指定して話し始めやすくなり、あとは双方のやり取りをする中で、意味あるやり取りを楽しんだようである。1分間という時間制限の中で、英語を話す「即興性」を高める活動になったと思う。また、トピックとなる英文を指定していたが、途中からどんな方向へ話しが進んでもよいとしたので、自由な対話によってその進展を楽しむペアがいた。時間的にも2分間以上のチャットをすることができ、長く話し続けることができた。

課題は3つ挙げられる。1つめは、正確な英文でなくても、単語を言うだけでも伝え合っていた生徒がいる一方で、正確に話そうとするために考える時間がかかり、素早く英語で話すことができない生徒がいたことである。チャットでは、正確さよりも素早く応答することに重きを置くように話した。2つめは、人間関係が良好で、英語力に大きな差がないペアであれば、チャットを楽しむことができるが、あまり関係が良くなかったり話したことがなかったりするペアや、英語力に問題がある生徒同士のペアの場合、チャットは難しいということである。その対策として、自由に組ませるペアを使うとうまく機能した。それでもうまくいかないならば、ソシオメトリーを使ってペアを組むのもよいと思う。3つめは、チャットが即興性を求め流暢さに重点があるとは言え、生徒のチャットの内容を分析して、正確さについての指導も適切なときに行うことである。また、言いたくても言えなかったことを、どう言うべきだったかについて、個人だけでなくクラス全体でも、既習事項を総動員してパラフレーズする機会を持ちたい。チャット中に、多くのペアを見て分析するのは時間的に難しい。評価は、後日行うALTとの一人ずつのチャット面接で「表現の能力」を評価するのが妥当であると思う。


Let's chat!①～話なとを何するの～ No.(　　) Name＿＿＿＿＿＿＿＿

目標：(1) Don't be shy!　(2) アイコンタクト，スマイル，ジェスチャーを忘れずに。
(3) よく聞いて，聞いたことに反応して会話を続けましょう。(相づちを打つ)
例 (Oh! / Really? / Great! / Wow! / Unbelievable! / I see. / Me too. / That's right. / Maybe.)

やり方：(1) 始まりはあいさつで始めよう。(Hi, ～.　How are you? から)
(2) 終わりはお礼や感想を言おう。
(Thank you. / Nice talking with you./ You're welcome. / No problem. / See you.)
(3) 自分の話がつきたら，"How about you?"と相手に質問するのもよい。
(4) Today's topicに関して会話を膨らませ，1分間続けましょう。

Today's Topic: Let's talk about free time.
What do you usually do in your free time?

ヒント：1) I play baseball/ watch TV/ listen to music/ read *manga*/ play with Taro/ play games.
2) I like soccer very much/ watching DVDs/ drawing pictures/ sleeping.
DVDを見ること　絵を描くこと　眠ること
3) What TV program do you watch? / What song do you sing?
4) Are you an Ichiro fan? / Do you like volleyball?

自分が使いたい英文：

記録しましょう

日	①(　/　)	②(　/　)	③(　/　)
相手			
情報			
反省	反応… A　B　C 継続… A　B　C	反応… A　B　C 継続… A　B　C	反応… A　B　C 継続… A　B　C

5　活動３：「ALT とのチャット面接」

⑴　活動のねらい

生徒が ALT との自由な対話を楽しむことが大きなねらいである。そして、英語で即興的に話すことに自信をつけさせたい。そのときの評価には、それまで行ったチャットで目標として重点的に取り組んできたことを、到達目標として設定する。

⑵　指導の工夫

①やり方について

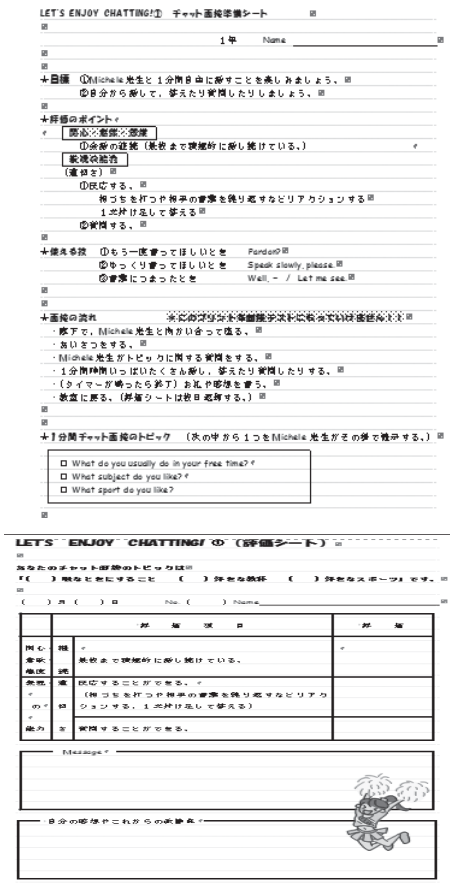
- 生徒は、ALT との１分間チャット面接について聞き、面接準備シートと評価シートを見る。トピックはそれまでのチャットのうちの一つであることや目標、面接の流れ、評価を事前に知る。
- それまで行ったチャットのトピックを確認し、言うことを考えて、素早く言えるように練習しておく。
- 廊下で ALT と生徒一人が机を挟んで椅子に座る。生徒は ALT に評価シートを渡し、１分間面接を受け、その後、評価を記入してもらう。ALT は対話をするだけで、JTE が生徒の後ろで評価をしたり、教室の中をのぞいたりする場合もある。

②「チャット面接」準備ｼｰﾄ・評価ｼｰﾄについて

- 準備シートには、目標・評価のポイント・面接の流れが書かれている。生徒にとって、チャット面接がどのように行われ、自分は何をできるようにしておけばよいか明らかになる。
- 評価シートには、評価者が生徒に対してできたかできなかったか○×を記入し、良かったところやアドバイスを記述する。JTE は、その評価を記録した上で後日生徒に返却し、生徒は感想や改善点を書いてそれ以降のチャットに生かす。

⑶　活動の実際

生徒はコミュニケーションの楽しさを感じ、自信をつけることができたと思う。ALT との１対１面接をすることは、生徒にとって緊張することかもしれないが、事前準備を十分に行うとともに、それまでに何度も練習してきたチャットのトピックから選ばれた対話なので、落ち着いてできたり準備をしたりすることができた。対話内容でも目標を十分達成することができ、それ以降のチャットへのやる気に繋がったと思う。



LET'S ENJOY CHATTING!① チャット面接準備シート

1年　Name

＋目標　①Michelle 先生と１分間自由に話すことを楽しみましょう。
②自分から尋ねて，答えたり質問したりしましょう。

＋評価のポイント
関心・意欲・態度
①会話の継続（最後まで積極的に話し続けている。）
表現の能力
（達成を）
①反応する。
相づちを打つや相手の言葉を繰り返すなどリアクションする
１文付け足して答える
②質問する。

＋使える表現　①もう一度言ってほしいとき　Pardon?
②ゆっくり言ってほしいとき　Speak slowly, please.
③言葉につまったとき　Well, … / Let me see.

＋面接の流れ　※このプリント準備学習シートに書いていく活動です。
・廊下で，Michelle 先生と向かい合って座る。
・あいさつをする。
・Michelle 先生がトピックに関する質問をする。
・１分間時間いっぱいたくさん尋ね，答えたり質問したりする。
・（タイマーが鳴ったら終了）お礼や感想を言う。
・教室に戻る。（評価シートは後日返却する。）

＋１分間チャット面接のトピック　（次の中から１つをMichelle 先生がその場で指示する。）
□ What do you usually do in your free time?
□ What subject do you like?
□ What sport do you like?

LET'S ENJOY CHATTING! ② （評価シート）

あなたのチャット面接のトピックは
「（　）曜日にすること」　（　）年生な教科　（　）年生なスポーツ」です。

（　）月（　）日　No.（　）Name

		評価項目	評価
関心・意欲・態度	継続	最後まで積極的に尋し続けている。	
表現の能力	反応	反応することができる。（相づちを打つや相手の言葉を繰り返すなどリアクションする，１文付け足して答える）	
	質問	質問することができる。	

Message

自分の感想やこれからの英語学習

6　終わりに

私は、生徒が自由に即興で話してやり取りをすることを楽しむ取組を続けたい。そのために、生徒が、主体的に行うやり取りを広げたり深めたりできるように、スキルを教え、繰り返し練習をさせる機会を多く与えて、生徒同士が互いに学び合う環境を作り出したいと思う。聞き手が理解しやすいように配慮して話すために、間違いを恐れず、伝える項目を精選して、適切な順序で並び替えるなど、見通しを立てて話す内容をまとめたり、相手と対話が継続・発展する話題に繋げるため、質問や意見に応答したりすることができる生徒を育てることを目指したい。

また、チャットにおいて、関心がある事柄や日常的な話題を扱うことが多いが、生徒が社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについても述べ合うことができるように、指導を工夫していきたいと思う。

参考文献

- 文部科学省 (2018)「中学校学習指導要領」
- 樫葉みつ子 (2008)「英語で伝え合う力を鍛える！１分間チャット＆スピーチ・ミニディベート 28」明治図書
- 小松原唯弘 (2013)「英語の授業を楽しくする 10 分間の帯活動「フリートーク」で表現力を育てる」三省堂

優　良　賞

《個人部門》

けがをしにくいしなやかな体と心づくりをめざして

～地域教育力を活かしたメンタル・体幹を鍛える「元気アッププロジェクト」を通して～

熊本県菊池市立菊之池小学校
養護教諭　吉川　恵美

はじめに

新学習指導要領完全実施まで２年。学校では、外国語活動や「主体的・対話的で深い学び」等に関する研修会が増え、新たな教育改革の波を肌で感じるようになってきた。グローバル社会及び情報化社会が叫ばれる中、ＰＩＳＡ調査等から見る児童の学力実態を踏まえた今回の改訂の方向性は確かに理解できるものである。しかしながら、養護教諭として昨今の児童実態の変化を見つめた時に、大変危惧するものがある。それは、「集中力や体幹力の低下」である。新学習指導要領完全実施を控えた今だからこそ、このようなメンタル・体幹を中心とした心身のバランスにも目を向ける必要性を強く感じ今回の取組を考えた次第である。

本論文は、昨年度養護教諭として、学校・地域で取り組んだ「メンタル・体幹トレーニング」を中心としたプロジェクトの実践記録である。今後の「地域とともにある学校づくり」の一方策となれるよう、ここにまとめた。

Ⅰ　研究の概要

１　主題設定の理由

昨年度体力テスト結果から、本校における課題種目をまとめてみた。（図１）

		1年	2年	3年	4年	5年	6年	▼の数
上体おこし	男子	◎	▼	◎	◎	▼	▼	7
	女子	▼	▼	◎	▼	◎	▼	
反復横飛び	男子	▼	－	▼	◎	◎	▼	6
	女子	◎	◎	▼	◎	▼	▼	
シャトルラン	男子	◎	▼	－	◎	▼	▼	8
	女子	▼	▼	▼	▼	◎	▼	
立ち幅飛び	男子	◎	◎	◎	◎	－	◎	2
	女子	◎	▼	▼	◎	◎	◎	
県数値との比較「◎」上回る、「－」同じ、「▼」下回る								

図１：平成 29 年度体力テスト結果（記号は県比較）

特に「敏捷性・筋力・持久力」に課題が見られる。このような実態は、長年の本校の特徴であり、これまでも全校体育や教科体育によって意識的に取り組んできているが、実態の問題点としては、次のような点が挙げられていた。

これまでの体力向上取組の課題
①　教科体育外の運動量の低下
②　休み時間の遊びの偏り
③　児童の運動量・体力の２極化傾向

「敏捷性・筋力・持久力」は、児童の体力の基盤となるものであり、更なる向上をめざすべき項目でもある。「少しの時間にでもやってみたい」と感じられるトレーニングメニューを開発する必要性を強く感じていた。このような体力実態がもたらす保健室来室状況が以下の通りである。（図２）

	平成２８年度	平成２９年度
全児童数	２２４	２４４
けがによる１年間保健室来室者数	４５３	４２２
けがの内訳		
打撲	２２３	２１５
すりきず	１２２	１２９
その他	１０８	７８

図２：過去２年間の保健室来室状況

特に、気になる点は、圧倒的な打撲の多さであり、単なる転倒だけではなく、「とっさに手が出ない」「ボールをよけられなかった」「自分を支えきれない」等明らかに本校の体力課題を反映するものであった。

このような実態は、集中力の持続力低下も踏まえて、児童の体幹力の低下を物語るものである。このような実態克服に向けた早急な取組の必要性を感じ、本主題を設定することとした。

本校に必要とされる健康面での取組とは
①　楽しみながら運動量を持続するメニュー開発
②　姿勢保持や敏捷性を意識した体幹トレーニング
③　児童の主体性で成立するカリキュラム
④　地域の専門職に携わる方々の協力を仰ぐ

２　研究の仮説及び視点について

本研究における仮説及び視点を次のように設定することとした。

仮説１：児童の実態をもとに、地域の方々と連携しながら動きを楽しめるトレーニングメニューを開発すれば、児童はけがをしにくいしなやかな体と心づくりをめざすことができるであろう。

仮説２：児童の自主的・自発的行動を促す縦割り班を生かしたセッティングの工夫を行えば、児童はけがをしにくいしなやかな体と心づくりをめざすことができるであろう。

【仮説１、研究の視点】

視点１：地域人材を生かした「きくぽんず」の結成

視点２：児童実態を考慮したメニュー開発

【仮説２、研究の視点】

視点１：地域と職員・地域と保護者をつなぐ工夫

視点２：子どもと子どもをつなぐ工夫

Ⅱ　研究の実際

１　仮説１（視点１）の検証

本校は、菊池市の人権教育の中心校として長年、地域とともに歩む学校として地域教育力が基盤となってきた学校でもある。そこで、地域の方でスポーツ関係を職業とされていた経歴をお持ちの方々に今回の提案をした。ダンス指導者や元スポーツインストラクターの方々３名がこの計画に賛同して頂けた。私たち教職員には異動がつきものであるが、地域教育力は不変的なものである。教職員メンバーが変わろうとも、一時的取組とはならず、継続してほしいという願いから、体力向上プロジェクトチームの結成となった。さらに、始動にあたって、今の児童の実態や課題を相談する中で、児童の興味関心を向上させるためにインパクトがあり楽しいイメージをと誕生したのが、「きくぽんず」である。（写真１）

写真１：きくぽんずのメンバー

「きくぽんず」結成に際して、最も大切にしたとは、次の３点である。

①　子どもたちの意欲向上のために

「運動を楽しむ」これが大前提である。専門家だからこそ、「楽しむ」と「向上」が同時にできるようにしてほしいということを最初の会議で依頼し、共通理解を図った。

②　委嘱状の交付

今後も継続していくためには、単発的なゲストティーチャーではなく、定期的活動が大前提となる。そこで、外部指導者という立場で学校からは委嘱状を交付し、４月実施のＰＴＡ総会にて紹介と交付式を行った。

③　指導意図の確認

実態からも課題となる体幹力の向上と、運動嫌いの子どもに焦点をあてることを共通理解した上での活動開始とした。

２　仮説１（視点２）の検証

体力向上支援チーム「きくぽんず」結成と同時に最初の会議は、やはりメニュー開発である。今回の実践の中心は、「業間体育」の時間で、わずか１５分の活動であるが、年間継続を考えれば非常に長く効果的な時間ともなる。ここで、どのようなメニューで実践していくか、次のような内容で計画を立てることとした。

①　ローテーションによる通常メニュー（写真２）

写真２：通常メニューの様子

いずれも、本校の児童実態から考えられたメニューである。写真２にある「タイムマシーンコース」は、昔遊びを取り入れたものである。また、「チェケマッチョコース」とは、竹踏みを主とした体幹トレーニングで「楽しむ」がベースとなっている。

②　全校で取り組めるダンス運動

通常メニューは、ローテーション方式を採用しているため、小グループでの実践となる。その際の「きくぽんず」は、プレリーダー役として指導し、職員がコース別に分かれて補助役をしている。

しかし、「全体で楽しく運動量を確保する」重

要性も捉え、オリジナルの「ダンス」や「簡単準備運動」の開発と動画作成を行い、全校体育や各学級の準備運動など、いつでもどこでも誰でも、楽しく体を動かすことができるようにしている。（写真３）

写真３　全校ダンスの様子

③　日常生活における職員の共通実践指導

児童の日常の様子からも、明らかに体幹力や集中力の低下が見られていたため、業間体育のメニュー開発と共に、日常の体幹・メンタルトレーニングについても職員の共通実践指導ができるようにした。（資料図３）

日常でおこなえる体幹・メンタルトレーニング

☆知らない間に身につく筋力と集中力。安全に健康に生活する上で必要な最低限の筋力
①靴の脱ぎ履き＝立っておこなう。（　靴下を立ってはく。）
②起立の姿勢（気をつけ）着座の姿勢（グーペタピン）の保持
③まっすぐ並ぶ　体育座りの姿勢保持
④授業前、掃除前の黙想
⑤弛緩法・呼吸法を朝の会や帰りの会に取り入れる
※細かいことですが、くり返し実施することで定着させていきましょう。
この強化は、学力アップにもつながります。
実践にあたり、子どもたちの実態を知って成果を確認。子どもも励みになります(^^)/
～何分、何秒しゃべらずにいられるか、じっとしていられるかetc…～

図３：日常トレーニングの共通実践資料

このように、地域の体力向上支援チーム結成と様々なメニュー開発によって、休み時間も楽しんで体を動かそうとする子どもたちが明らかに増加してきた。

３　仮説２（視点１）の検証

地域教育力を活かす目的の一つとして、教職員の負担軽減も考えての実践とした。新学習指導要領移行にむけ、教職員も様々な準備に追われる状況である。そこで、今回の業間体育活動においては、詳細な割振りや指導メニュー表を作成することで、教職員は補助指導のみに従事できるよう心がけた。（図４）

☆元気アッププログラム　班わりふり表　縦割り体育

	種目（コース）	場所	担当職員	トレーナー	雨天	9月班	1月班
A	リズムあそび（ストレッチ）☆筋力	体育館（夏）運動場	城 堀田 松村	高宗	そのまま	1 2 3 4	17 18 19 20
B	タイムマシン☆バランス力	横列り 雨天時→1年教室	園田 作能	田中 来村	室内遊びなつかみあてだま	5 6 7 8	1 2 3 4
C	チェケマッチョ☆体幹力	音楽室	梅田マ 廣瀬	松野	そのまま	9 10 11 12	5 6 7 8
D	投　力	図書室・家庭科室前の廊下	梅田ト 岩本	矢ヶ部	そのまま	13 14 15 16	9 10 11 12
E	精神力UP	図書室	成松 工藤	吉川	そのまま	17 18 19 20	13 14 15 16

図４：業間体育ローテーション一覧表

このような負担軽減をはじめ、「きくぽんずと教職員の指導バランス」を考えながらコーディネーターとしての役割を行ってきた。また、地域人材を学校・保護者とつないでいくために、以下の取組も実践してきた。

①「きくぽんずと保護者をつなぐ」ために

先に、述べたように地域教育力の強みはやはり継続である。しかし､保護者の認知力を高めなければ、このような継続には発展しない。そこで、様々な掲示物や学校・保健だより等の活用と校区のお祭りや学習発表会等、保護者や地域の方が多く集まる場所で「きくぽんず」の活動を披露し積極的に広報する活動を行った。（写真４）

写真４：学校便りでの広報活動

②「きくぽんずと授業をつなぐ」ために

現在の活動は、業間であり教育課程外の活動である。しかし、今後のカリキュラムマネジメントの視点からも、このような地域教育力を生かした活動を授業にも反映させていきたいと考え、授業活用につながる職員の体験型実技研修も実施した。

４　仮説２（視点２）の検証

今回のローテーションをもとにした体力向上メニューの実践の土台にしたものは、本校が様々な教育活動で活用している「縦割り班」である。この縦割り班のメリットは次のように考えている。

縦割り班のメリット
① 上級生の責任感やリーダー力育成
② 子どもたちによる自発的行動力の育成
③ 子どもたち自身による礼儀作法指導

活動では、上級生が優しく指導する場面もあれば、すべてのコースメニューで必要になる道具は、すべてコース別に準備しているため、準備道具も子どもたちが準備・片付けも行えるようなシステム化を行った。そのことにより教職員の指示なしに行動する場面も多く見られるようになり、下級生の良いモデリングとなっている。

ローテーション表や道具等のシステム化を確実に行うことで、子どもたち自身による行動が確立し、「子どもと子ども」をつなぐ取組が実践できるようになったと考えている。(写真５・写真６)

写真５：縦割り班活動の様子

写真６：準備物置き場

Ⅲ 成果と課題

1 研究の成果

今回の取組を通し、児童の体力面・心理面に確実に変化が表れてきている。体力面では、課題としていた「敏捷性・筋力・持久力」の成果が見られた。この結果は、元気アッププログラムの成果であると考えている。(図５)

		1年	2年	3年	4年	5年	6年	▼の数
上体おこし	男子	◎	▼	▼	▼	◎	◎	5
	女子	◎	▼	◎	▼	◎	◎	
反復横飛び	男子	◎	◎	◎	◎	◎	▼	2
	女子	－	◎	▼	◎	◎	◎	
シャトルラン	男子	▼	◎	◎	◎	◎	▼	6
	女子	▼	◎	▼	▼	▼	◎	
立ち幅飛び	男子	◎	◎	◎	◎	◎	◎	0
	女子	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
県数値との比較「◎」上回る、「－」同じ、「▼」下回る								

図５：平成 30 年度体力テスト結果（記号は県比較）

保健室来室状況にも変化が表れており、特に危惧した打撲状況も減少している。とっさに手をついたことで、顔面打撲を守ることができたと報告に来る児童や事例も増えており、体幹トレーニングが反映されつつある状況である。(図６)

	平成２９年度前期	平成 30 年度前期
全児童数	２２４	２４４
けがによる前期保健室来室者数	１９１	１３５
けがの内訳		
打撲（首から上打撲）	９５（６０）	６２（４１）
すりきず	６１	４８
その他	３５	２５

図６：けがによる保健室来室状況の変化

また、児童感想からも満足感と意欲に満ちた声が届いており、けがをしにくいしなやかな体と心づくりへの意識が少しずつ生まれてきている。これらの結果や児童の声は、きくぽんずの方々の達成感にもつながるものとなった。(図７)

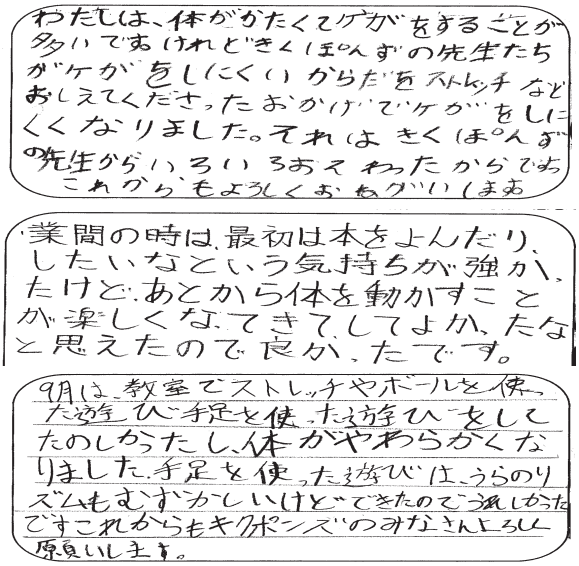


図７：児童感想から（順に３年・５年・６年）

2 研究の課題

今後の課題は、学校総体の取組をより個々の体と心の成長へとつなげていくことである。今回の成果は学校全体の数値的向上をもたらし、職員間の今後の継続意欲につながったといえる。

そこで、経年比較を中心とした個々の変化を意識した取組へと転換させていきたいと考える。

おわりに

「地域の方々と共に子どもたちの健康面を考えていきたい。」これが私の養護教諭としての大きな夢でもあった。そして今後の展望としては、やはり「この連携の灯を消さない」ことである。学校職員が変わろうとも、地域連携のこの取組を継続していくために、何が必要かを考えながら児童の健やかな成長のために精一杯頑張っていきたい。

優　良　賞

《個人部門》

多様な意見を尊重し、合意形成を図る力の育成

～意見を可視化し、折り合いの付け方を考える話合い活動を通して～

沖縄県那覇市立松川小学校
教諭　我那覇ゆり子

Ⅰ　テーマ設定の理由

特別活動ワーキンググループにおける審議の取りまとめ（2016.8）において、社会に主体的に参画するために、「自分自身や他者のよさを生かしながら、集団や社会の問題について把握し、合意形成を図ってよりよい解決策を決め、それに取り組む力」の育成が示された。

また、本校では、平成28年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査において「学級会などの話合い活動で、自分と異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いをつけたりして話し合い、意見をまとめている」に「そう思う」と回答した児童は18%であった。

このことから、特別活動において多様な意見を生かし合意形成を図る力は、今後一層求められる資質・能力である一方、その定着に課題がみられる。合意形成を図る力の育成のためには、自治的な話合いの充実が重要であり、更なる指導の工夫が求められている。

これまでの話合い活動を振り返ると、異なる意見や少数意見への配慮に欠けたり、折り合えず多数決に頼ったりする姿がみられ、合意形成のための手立てが不十分であった。これらの課題解決に向け、何のために話し合うのかを明確にさせ、意見の違いを尊重しながら、より納得できる合意形成に向け話し合う必要がある。具体的には、提案理由を根拠とする意見を考えたり、よりよい意見に収束したり、折り合いの付け方を考えたりする活動が、よりよい合意形成への有効な手立てであると考える。

そこで、話合い活動において、意見を可視化し提案理由を根拠とする意見を話し合わせ、折り合いをつけるための手立てを講じることで、多様な意見を尊重し、合意形成を図る力を育成することができると考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究仮説

1　基本仮説
話合い活動において、意見の可視化を工夫し折り合いの付け方を考えさせる活動を設定すれば、児童は多様な意見を尊重し、合意形成を図ることができるであろう。

2　作業仮説
⑴　意見を比べ合う場において、意見の可視化を工夫し提案理由を根拠とする意見を考えさせることで、多様な意見を尊重し、よりよい意見に収束することができるであろう。
⑵　意見をまとめる場において、収束された意見を基に折り合いの付け方を考えさせる活動を取り入れることで、よりよい合意形成を図ることができるであろう。

Ⅲ　研究内容

⑴　多様な意見を尊重する態度とは

杉田（2013）は、人の意見を尊重する態度について「学級会を通して、単に話合いの技術を身に付けるのではなく、子どもたちに相手の意見を尊重する態度をしっかりと身に付けようとすること（中略）相手の意見を尊重し、少数意見にも配慮しつつ、話合いで折り合いをつけていくことができるようにすること」が大切だと述べている。また、特別活動ワーキンググループにおける審議の取りまとめ（2016.8）では、「全員が完全に合意できる『正解』がない中で、互いを認め合い、意見や立場等の違いを尊重しながら、熟慮し意見を交わしながら少しでも納得できる合意形成に向けて進んでいくこと」が望ましい集団活動に繋がると述べている。

このことから、互いの意見を尊重する態度が、折り合いを付けていくことに繋がり、合意形成を図るために重要であると捉える。

そこで、本研究では、提案理由に迫る意見はどれかという視点で、互いの意見を比べ合い、公平に判断させ、多様な意見を尊重する態度の育成を目指す。

⑵　合意形成を図る力とは

小学校学習指導要領（案）（2017.2）において、その目標に「合意形成」という文言が新しく明記された。これを受け、新しく求められた「合意形成」を図る力とは何か、育成のためにどう指導すればよいのかを明らかにする必要がある。『特別活動指導資料学級・学校文化を創る特別活動【中学校編】』には、「『合意形成を図る』とは、互いの意見の違いを超えたり、よさを生かしたりしながら最終的に“自分もよくてみんなもよい”というように集団として意見をまとめること」とある。

これらのことから、児童が折り合いを付けながら、自分もよくてみんなもよい意見にまとめていく合意形

成までの過程が重要であると考える。

そこで本研究では、話合い活動において、多様な意見を基によりよい意見に収束し、折り合いを付け、学級としての意見をまとめていく経験が合意形成を図る力を育んでいくと考え、実践に取り組んでいく。

⑶　合意形成を図る話合い活動について

指導要領解説では、中学年において「異なる意見にも耳を傾け、公平に判断したりして、楽しい学級生活をつくるために折り合いを付けて集団決定ができるように適切な指導をすることが大切である」と示している。教師は、児童が「折り合いを付ける」ことができるように発達の段階に即した適切な指導をする必要がある。『特別活動指導資料楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動【小学校編】』（以下、『特活指導資料』という）では、折り合いを付ける条件を挙げている（表１）。

表１　折り合いを付けるための三つの条件

【特活指導資料小学校編】

①提案理由がまとめるための根拠になっている。 （何のためにするのか、何のために話し合うのか） ②まとめるための条件が明らかになっている。 （いつ、どこで、何を、どのようにするのか） ③まとめるまでの道筋のイメージが共有されており、児童はまとめるための意見を言うことができる。

以上のことを踏まえ本研究では、表１の①提案理由の共通理解と③話合いの工夫に着目し、「提案理由キーワードの可視化…提案理由を根拠とする意見を考える」「意見すっきりタイム（以下、『すっきりタイム』という）…よりよい意見に収束する」「折り合いなっとくタイム（以下、『なっとくタイム』という）…折り合いの付け方を考える」活動を設定し、合意形成を図る話合い活動に取り組むこととする。

⑷　意見を可視化する工夫について

杉田（2013）は、話合いの充実に向けて、「ディスプレー（板書や掲示）を工夫する話合いの可視化」を挙げている。「子どもたちから出された意見を可視化し、それらを話合いの流れに即して操作化し、合意形成（収束）までの流れがわかるように構造化していくことも授業改善の一つの視点である。」と述べている。

そこで、本研究では、合意形成までの流れがわかるように板書を工夫し意見の可視化を行っていく。具体的には、「①提案理由をキーワード化し色・マーク別の短冊に可視化する」「②提案理由キーワードを基に発言を短冊に書き分類•整理する」「③意見を収束する」「④収束された意見を基に折り合いをつける」活動を取り入れ、意見を可視化することで話合いの流れを共通理解できるようにしていく（図１）。

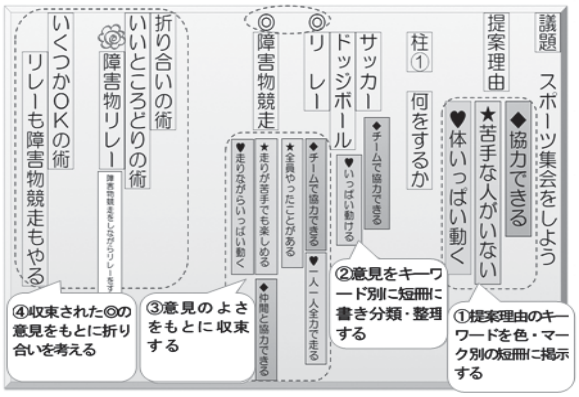


図１　意見を可視化する工夫【筆者作成】

⑸　折り合いの付け方を考える活動について

杉田（2013）は、「決まったことには従うということは教えなければならないが、安易に数で決めることは避けたい。ぎりぎりまで互いの意見を調整する努力をさせたいのである。」と述べている。また、『特活指導資料』では、「多数意見でまとめていくことが基本だが、賛成や反対を述べ合うだけで『数の論理』だけで決めてしまうようでは、納得がいかない児童が出てくる。それぞれの意見を比べ合いながら折り合いを付けていくことが大切である」と示し、折り合いを付ける様々な方法を挙げている（表２）。

表２　折り合いを付ける方法【特活指導資料小学校編】

・それぞれの意見を合わせる。 ・いくつかの意見のよいところを取り入れながら、新しい考えを作る。 ・それぞれを縮小して全部行うことにする。 ・優先順位を付けて上位の考えに決める。（次回はＡを行うことにして、今回はＢを行うことにする。） ・自分の考えを変え、異なる意見に賛成する。（友達の考えのよさに気付いたら、自分の考えを変えてもよい。） ・条件をつけて賛成する。

以上のことから、意見をまとめる場において、折り合いを付けることが重要だと考える。その為には、折り合いを付ける方法を理解し実践できる必要がある。そこで、本研究では、表２を参考に「折り合いのつけかた（意見をまとめるまでの道筋のイメージを共有する資料）」や「折り合いの術（折り合いを付ける方法、説明、例を示した資料）」を作成した（図２）。これを

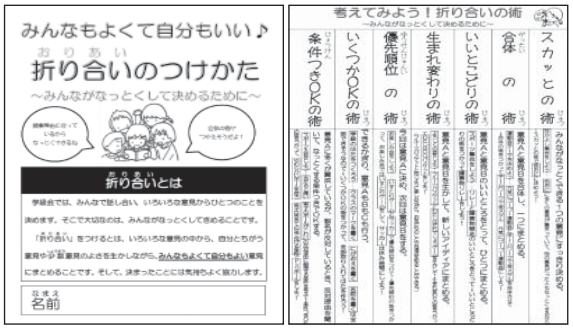


図2 児童用資料　左「折り合いのつけかた」 右「折り合いの術」

基に、折り合いの付け方を確認し理解させる。そして、意見をまとめる場において、折り合いの付け方を考える活動を取り入れていく。

Ⅳ　授業実践（第４学年）

１　議題名「かがやけ２組カレンダーをつくろう」

２　議題選定の理由

本議題は、「みんなのよさを再発見し、いつまでも思い出に残るカレンダーをつくることで、仲間を大切に思い、元気いっぱいかがやく２組になりたい。」という児童の提案により選定された。「テーマを何にするか」について、提案理由を根拠とする意見を考えさせ、折り合いを付けるための手立てを講じることで、多様な意見を尊重し、合意形成を図る力を育みたい。また、一連の活動を通して、自分たちの力でよりよい学級生活をつくっていこうとする自主的、実践的な態度を高めていきたい。

３　本時の展開

⑴　ねらい

カレンダーのテーマを決める話合いで、提案理由を根拠に話し合い、折り合いの付け方を考える活動を通して、多様な意見を尊重し合意形成を図ることができる。

⑵　授業仮説

①すっきりタイムにおいて、意見の可視化を工夫し提案理由を根拠とする意見を考えさせることで、よりよい意見に収束することができるであろう。

②なっとくタイムにおいて、折り合いの術を活用し、折り合いの付け方を考えさせる活動を取り入れることで、よりよい合意形成を図ることができるであろう。

⑶　展開

1. 提案理由やめあての確認

今までケンカがあったり、言葉づかいが悪かったりするので、もっと仲間を大切にするクラスになりたいです。そこで、みんなのよさを再発見し、いつまでも思い出に残るクラスのカレンダーをつくりたいと思いました。カレンダー作りを通して、仲間を大切に思い、元気いっぱいかがやく２組になれると思い提案しました。

提案キーワードは、★みんなのよさ再発見、❤思い出にのこるです。めあてはみんなの輝く様子を伝えるカレンダーにしようです。

2. 話合い　⑴「テーマは何にするか」

出されたテーマ　・かがやけぼくらの将来　・ぼくわたしのスーパー特技　・ぼくわたしのじまんチャンピオン　・かがやけ私たちの成長！　・本気になれること

⑵　意見すっきりタイム　仮説①提案理由を根拠とする意見を考えさせ、よりよい意見に収束する。

○黒板係が提案キーワードと賛成意見が多数出された意見２つに収束する。

①かがやけぼくらの将来　②ぼくわたしのじまんチャンピオン

⑶　折り合いなっとくタイム

折り合いの術を配り、考えたグループから短冊に意見を書かせる。

仮説②折り合いの付け方を考え、よりよい合意形成を図る。

○スカッとの術で、「かがやけぼくらの将来」に決める。

Ⅴ　結果と考察

１　作業仮説⑴の検証

意見を比べ合う場において、教師が意見の可視化を工夫し提案理由を根拠とする意見を考えさせることで、児童は多様な意見を尊重し、よりよい意見に収束することができるであろう。

【結果】本研究では、提案理由を根拠とする意見を考えさせるため、提案理由をキーワードにし、色・マーク別の短冊に発言をまとめ、意見を可視化できるよう工夫を行った。また、「すっきりタイム」を取り入れ、よりよい意見に収束できる展開とした。

児童は「みんなの自慢できることを知って、みんなのよさを再発見できると思うからです。」と提案理由キーワードを根拠に発言し、提案理由を根拠とする意見の割合は91%であった。黒板係の児童は、発言を色・マーク別短冊に書き分類・整理し、意見を可視化していった。話合い後半、全体で板書を見ながら話合いの流れを確認したところ、❤短冊は多くあるが★短冊が少ないことに気付くことができた。そこで、「★みんなのよさ再発見」の視点で意見を考える時間を設けた。すると児童は、異なる意見や少数意見の中にも、提案理由に合う意見があることに気付き発言していた。

そして、提案理由キーワードに基づく❤と★の短冊が多く出されよりよいテーマと考えた「①輝け僕らの将来」「②ぼくわたしの自慢チャンピオン」の２つに収束し「なっとくタイム」に繋げることができた（図３）。

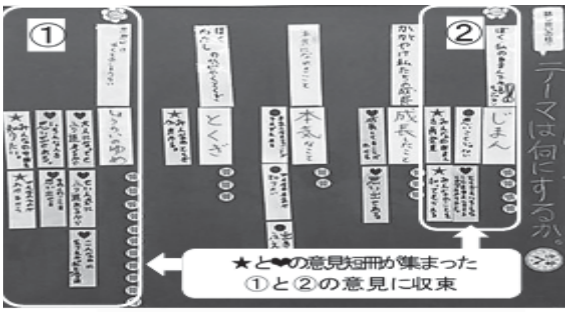


図３「意見すっきりタイム」の板書の様子

実践前と実践後のアンケートの結果では、「黒板を見て話合いに活かしている」と回答した児童は84%から100%に増加した。理由には「短冊を分けて見やすいから」「提案キーワードでまとめているから」等とあった。また、「自分と違う意見や少数意見のよさはないか話し合っている」と答えた児童が57%から92%に増加した。

【考察】これまでの話合いでは、自分の意見を通したり自分の好き嫌いで判断したりする発言がみられたが、本時では、提案理由を根拠とする意見で話し合うことができた。また、意見を可視化したことにより、視点の偏り（★短冊が少ない）が理解でき、視点に合った意見を考えることができた。これらのことから、提案理由をキーワード化し話合いの視点としたことで、自分の考えにこだわったり興味の有無で判断したりせず、異なる意見や少数意見にも目を向け話し合うことができたと考えられる。そして、可視化を手立てに、意見短冊が集まる、よりよいテーマだと考えた意見に収束することができた。

以上のことから、意見を比べ合う場において、意見の可視化を工夫し提案理由を根拠とする意見を考えさせ、「意見すっきりタイム」を取り入れることは、多様な意見を尊重し、よりよい意見に収束するために有効な手立てであると考えられる。

2　作業仮説(2)の検証
意見をまとめる場において、教師が収束された意見を基に折り合いの付け方を考えさせる活動を取り入れることで、児童はよりよい合意形成を図ることができるであろう。

【結果】本研究では、意見をまとめる場おいてよりよい合意形成を図れるよう「折り合いの術」を活用し、折り合いの付け方を考える活動「折り合いなっとくタイム」を設定した。あるグループで話し合う場面で、児童からは「みんなも納得できると思うから」、「みんなもよくて自分もいい意見だから」等と発言があり、より納得できる合意の方法を考える様子がみられた。次に、各グループで考えた折り合いの付け方を全体で出し合った。話合いでは「スカッとの術を使い、輝け僕らの将来に決める」という意見が多く、理由には「多くの意見が集まっていて納得できるから」等と、話合いの結果を基に、みんなが納得できるテーマに決めようと考える姿があった。他に「優先順位の術を使い、コメントに将来の夢、写真に自慢を書く」という意見があり、2つのテーマを採用することで、みんなが納得できるのではないかと考えていた。そして、比べ合う話合いでは、多くの賛成と★❤短冊（提案理由に基づく意見のよさ）があるという意見や、コメントと写真のテーマは1つにまとめたほうがよいと条件に合わせた意見などから「スカッとの術を使って、輝け僕らの将来」に決めることができた。表3は「なっとくタイム」導入後、計3回行った学級会で決まったことである。児童は話合いの内容や流れに合った折り合いの術を選び、合意形成を図ることができた。

表3　「折り合いなっとくタイム」で決まったこと

議　題	折り合いの術	決まったこと
①一人一鉢運動のテーマをきめよう	いいとこどりの術	2つのテーマのいい所をとって、1つのテーマにまとめる。
②なかよしスポーツ集会をしよう	優先順位の術	集会は「人間色おに」、休み時間に「キャタピラリレー」をする。
③かがやけ2組カレンダーを作ろう	スカッとの術	1つのテーマ「輝け！僕らの将来」にすっきり決める。

質問「折り合いをつけて話し合っていますか」の回答では、88%の児童が肯定的に回答した。理由の記述には、「折りあいの術を使うとなっとくする人がふえる。」「にたような意見は合体したりしたほうが両方ともいいところが生かせるから。」とあり、折り合いを付け合意形成を図るよさを実感している様子がわかる。

表4は「なっとくタイム」導入前後の学級会の感想である。導入前は多数決で決めたり安易に意見を合わせたりし納得していない様子があるが、導入後は納得した様子や実践への意欲等の肯定的な感想が見られた。

【考察】本時では、提案理由に合う意見を選んだり複数の意見を生かそうとしたりと、よりよい決め方を考え話し合い、折り合いを付けテーマを決めることができた。表4からは「なっとくタイム」を設定することでよりよい合意形成を図ることができた様子がわかる。これは、「折り合いの付け方」を活用し意見をまとめるまでの道筋を共有したことや、「折り合いの術」を活用し意見をまとめる方法を共通理解したからだと考えられる。そして、「なっとくタイム」を導入し「みんなも自分もいい」決め方はどれか納得するまで話し合い、まとめていく経験を通して、合意形成を図る力を育むことができたと考えられる。

表4　なっとくタイム導入前後の児童の乾燥

導入前 ・話合いがまとまらず大変だった。 ・時間が無くなり、司会が多数決で勝手に決めたので不満でした。
導入後 ・みんなのよかった所は、提案キーワードにそって意見を言っていたところです。 ・AさんやBさんやCさんがいいところどりの術や合体の術を使っていたのでいいと思いました。 ・今日、いつもよりなっとくしたのでよかったです。

以上のことから、意見をまとめる場において、収束された意見を基に折り合いの付け方を考える活動は、合意形成を図る手立てとして有効だと考えられる。

Ⅵ　成果

⑴意見の可視化を工夫し提案理由を根拠とする意見を考えさせることで、多様な意見を尊重し、よりよい意見に収束することができた。

⑵「折り合いの術」を活用し、収束された意見を基に折り合いの付け方を考えさせる活動を設定したことで、よりよい合意形成を図ることができた。

Ⅶ　課題

意見をまとめる場において、様々な折り合いの術から、話合いの内容や流れに適切な折り合いの付け方を判断し、よりよい意見にまとめていく力が必要である。

《主な参考文献》

『小学校学習指導要領解説　特別活動編』文部科学省　東洋館出版社　2008

第 24 回 日教弘教育賞

教育研究集録 第 30 集

平成31年 4 月発行

編集・発行　公益財団法人　日本教育公務員弘済会
URL：http://www.nikkyoko.or.jp
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-6
ＴＥＬ 03－3354－4001
ＦＡＸ 03－3354－4068

印　　刷　株式会社　篠原印刷所
〒422-8033 静岡市駿河区登呂 6 丁目 7 番 5 号
ＴＥＬ 054－286－5141